

菊川町埋蔵文化財報告書第71集

たかだおおやしき  
**高田大屋敷遺跡**

第1次～第7次・第9次発掘調査報告書

2004

菊川町教育委員会

菊川町埋蔵文化財報告書第71集

たかだおおやしき  
**高田大屋敷遺跡**

第1次～第7次・第9次発掘調査報告書

2004

菊川町教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、昭和63年度から平成5年度にかけて実施した静岡県小笠郡菊川町下内田地内に所在する高田大屋敷遺跡の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、菊川町教育委員会が圃場整備事業に伴い、現地調査を実施した。

　　調査主体　　菊川町教育委員会

　　調査員　　塙本和弘（菊川町教育委員会社会教育課）

　　栗田真澄（第7次調査）

　　作業員　　田中三平・渡辺辰司・勾坂光雄・山川加知夫・長谷山寅男・服部喜三郎  
　　高塚順作・横山邦雄・井指秋雄・織部寿々恵・堀木やす子・八木かつ子  
　　井指辰夫・田中悦子・杉山花江・横山みさお・丹羽とみ江・福島さと子  
　　綿野はな・小林好子・栗田敏子・堀内みねよ・成瀬富美子・綿野さかえ  
　　内藤まさき・伊藤初恵・野中保子・夏目りつ子・吉野かつ子・成瀬ふで子  
　　山崎保世・横山千代・杉田孝江・福井京子・三ツ井しの・伊藤せつ子  
　　堀内初代・織部節子

　　出土遺物整理・報告書作成協力者

　　山本則子・横山恵子・堀内初代・福井京子・織部節子

　　萩原紀江・鈴木玲子・原田絹子・海野文江・山田妙子

現地空中写真測量　中日本航空株式会社

3. 本書の執筆は、塙本和弘が行った。

4. 遺物実測図は、中日本航空株式会社に委託した。

5. 遺構・遺物写真は、塙本が撮影した。

6. 本書刊行に関する事務は、菊川町教育委員会社会教育課が行った。

　　教　育　長　　坪　井　照　彦

　　事　務　局　長　　青　野　敏　行

　　社会教育課課長　　〃

　　社会教育課係長　　川　中　健　司

　　社会教育専門員　　紅　林　孝　博

　　文化財担当　　塙　本　和　弘

　　事　務　　戸　塙　由　実　子

7. 実測図・写真及び出土遺物は、菊川町教育委員会で保管している。

## 目 次

第Ⅰ章	遺跡の立地と環境	1
第Ⅱ章	調査に至る経緯	4
第Ⅲ章	調査の経過	5
第Ⅳ章	調査の概要	
第1節	第1次調査	7
	「高田大屋敷遺跡出土鉄滓の金属学的調査」	
	大澤正己（株九州テクノリサーチ）	12
第2節	第2次調査	14
第3節	第3次調査	30
	「菊川町高田大屋敷遺跡の「堀」状凹地に関する地学的検討」	
	加藤芳朗（静岡大学名誉教授）	38
第4節	第4次調査	42
第5節	第5次調査	44
第6節	第6次調査	45
第7節	第7次調査	58
第8節	第9次調査	66
第V章	まとめ	72

## 挿 表 目 次

第1表	圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査一覧	4
第2表	調査履歴	5
第3表	第1次調査出土土器観察表	11
第4表	出土鉄滓の化学組成	12
第5表	第2次調査出土土器観察表	26・28・29
第6表	第3次調査出土土器観察表	35・37
第7表	砾（16～32mm）の岩質組成	41
第8表	第4次調査出土土器観察表	43
第9表	第6次調査出土土器観察表	51・56・57
第10表	第7次調査出土土器観察表	65
第11表	第9次調査出土土器観察表	70
第12表	調査年次別出土舶載陶磁器分類表	73
第13表	出土遺物分類表	74
第14表	調査年次別出土土器分類表1	75
第15表	調査年次別出土土器分類表2	76
第16表	調査年次別中世国産施釉陶器一覧表	77
第17表	高田大屋敷遺跡出土器種編年表	78

## 挿 図 目 次

第1図	位置図	.....	1
第2図	遺跡の位置と周辺の遺跡	.....	3
第3図	第1次～7次・9次調査区	.....	6
第4図	第1次調査位置図	.....	7
第5図	第1次調査第1～第6グリット平面図	.....	8
第6図	第1次調査出土遺物実測図	.....	10
第7図	第2次調査位置図	.....	14
第8図	第2次調査Aトレンチ平面図	.....	15・16
第9図	第2次調査B・Cトレンチ平面図	.....	17・18
第10図	第2次調査D・E・G・Jトレンチ平面図	.....	20
第11図	第2次調査Fトレンチ平面図	.....	21・22
第12図	第2次調査出土遺物実測図1	.....	25
第13図	第2次調査出土遺物実測図2	.....	26
第14図	第2次調査出土遺物実測図3	.....	27
第15図	第3次調査位置図	.....	30
第16図	第3次調査第1トレンチ平面図	.....	31・32
第17図	第3次調査第2トレンチ平面図	.....	34
第18図	第3次調査出土遺物実測図1	.....	36
第19図	第3次調査出土遺物実測図2	.....	37
第20図	高田大屋敷遺跡付近の地形分類図	.....	38
第21図	菊川と上小笠川の蛇行流路復元図	.....	39
第22図	「堀」及び周辺の海拔高度(m)とトレンチの位置	.....	41
第23図	第4次調査位置図	.....	42
第24図	第4次調査出土遺物実測図	.....	42
第25図	第5次調査位置図	.....	44
第26図	第6次調査位置図	.....	45
第27図	第6次調査平面図	.....	46
第28図	第6次調査東区土器溜平面図	.....	48
第29図	第6次調査北区平面図	.....	50
第30図	第6次調査出土遺物実測図1	.....	52
第31図	第6次調査出土遺物実測図2	.....	53
第32図	第6次調査出土遺物実測図3	.....	54
第33図	第6次調査出土遺物実測図4	.....	55
第34図	第7次調査位置図	.....	58
第35図	第7次調査1トレンチ平面図	.....	59
第36図	第7次調査6トレンチ平面図	.....	60
第37図	第7次調査8・9トレンチ平面図	.....	61

第38図	第7次調査10トレンチ平面図	63
第39図	第7次調査出土遺物実測図	64
第40図	第9次調査位置図	66
第41図	第9次調査平面図	67・68
第42図	第9次調査出土遺物実測図	71
第43図	空中写真測量図	83・84

## 第Ⅰ章 遺跡の立地と環境

高田大屋敷遺跡は、菊川町の西側を流れて菊川と合流し遠州灘に注ぐ上小笠川右岸の標高8m～11mの平坦な沖積地に立地する遺跡で、行政的には静岡県小笠郡菊川町下内田水落に所在する。遺跡名は小字名称とは異なる「高田大屋敷」を遺跡名に冠している理由は、昭和56年に静岡県教育委員会で刊行された『静岡県の中世城館跡』に従ったものであるが、それ自体は当地に伝承として伝え残る「大屋敷」の呼び名に由来している。

上小笠川は、町の中央を流れる菊川の支線の一つで最も西にある。この河川は、袋井市、浅羽町、大須賀町、大東町、掛川市に跨る標高264mの小笠山を中心として約10km四方の小笠丘陵に源を発し、新世代第四紀更新世小笠山麓層、掛川層群からなる丘陵を刻んで流下する。掛川市上内田から菊川町中内田地区にかけて緩やかに東に向かい南下し流れ。この地域では広大で肥沃な沖積平野が形成され、町内でも有数な水田地帯となっている。菊川との合流点に近い下内田耳川付近では、戦前まで大きく蛇行し複雑な流れとなり、下流の高田橋付近で菊川と合流していた。なお、現在の河道は昭和20年から26年にかけて上小笠川改修工事によって耳川付近から高田橋までの約800mが直線的となっている。また、遺跡の北と南側には旧河道と接し、さらに北では、河川改修前の河川敷の面影を見ることが可能である。

当遺跡付近は、菊川と上小笠川の両河川によって上流から運ばれてきた砂などが河道の岸に沿って形成された自然堤防が発達し、この地形上に古代からの遺跡が多く分布し、高田大屋敷遺跡もその一箇所で、遺跡の存続と断絶が上小笠川の流れと深く関わるものと推定され、環境の変化を踏まえてこの地域の歴史を語らなくてはならない。



第1図 位置図

## 歴史的環境

上小笠川流域は、中内田森から下内田地区の一部へと続く、当地域では最も沖積地が広く農業生産の高い地域である。この流域の沖積地には、町内でも古くから知られ重要な遺跡である弥生集落耳川遺跡が所在するのをはじめ、弥生時代を代表する墓制である方形周溝墓が多数検出された中期の政所本屋敷遺跡、古川遺跡など、広い沖積地を舞台として弥生文化が芽生えた。こうした沖積地は、弥生時代以前では集落としても今のところ知られていない。弥生時代後期になると中期から継続する政所本屋敷遺跡、御門前遺跡では竪穴住居跡が多數発見され集落の規模は大規模となっている。これらの集落は中核的な役割として、さらに小河川に形成された谷地形や低丘陵地などにも集落を構えるなど、この時期に新たな開発が進展したことが窺える。

古墳時代になると、前期までは弥生時代の流れを受け集落は存続するものの中期以降、政所本屋敷遺跡（東ノ坪遺跡）は一時的に集落が営まれなくなり、律令期以降に再び集落化するものや御門前遺跡では集落地点が移動しながら継続するなど、この時期に集落構造の変化が著しくみられる。後期になると、丘陵部に当地域の特徴である墓制体制の一つ横穴墓が構築されている。横穴は上小笠川の西岸に一定の墓域空間を設け、その領域内では群構成を形成しその規模によって集落の規模と連動すると考えられている。また、横穴の群構成は、律令期の郷里単位範囲と密接に関係し当時の社会体制を知る一定の役割を担っている。上小笠川では右岸側に政所横穴群と小規模な森前横穴群、左岸側に杉森横穴群が分布し森前横穴群を除くと二つの大きな群（ムラ）から構成していることが読みとれる。このことは、調査資料は少ないものの現在分布する遺跡とリンクさせてみると、中内田地区の御門前遺跡を中心とした周辺と下内田地区の高田大屋敷遺跡から耳川遺跡周辺が集落域として捉えられるのではないかろうか。律令期に入ると上小笠川流域の有力遺跡が目立っていた前代の様相とは変わり、竪穴住居跡と掘立柱建物群から構成する森前遺跡が出現したり、庇付掘立柱建物をもつ有力遺跡が成立する。こうした状況は、平安時代に成立した「和名抄」記載の遠江国城飼郡の鹿城（加良古）郷に対比された地域の中で、集落の核の一つとして成長を遂げる。中世以降も、当地域では衰退することなく安定して集落が継続するのである。

上小笠川と平行する形で秋葉街道別名「塩の道」がいつ頃この地に成立したかは不明であるが、この街道沿いが内田庄と呼ばれる莊園になっていた。この史料上の初見は、建暦3（1213）年2月の青蓮院門跡慈鎮所領譲状案に「諱進門跡相伝房領等事……常寿院…内田庄」とあり、ここに常寿院領莊園の一つとして名を見せていている。平家没後、領家方は当初常寿院領から正和3（1314）年には園城寺領で、さらに応安元（1368）年には東福寺天得庵へ寄進していることが文献史料から見える。また内田郷の地頭職は鎌倉時代の御家人内田氏が大きく関わっている。内田氏は、「源平盛衰記」に遠江国の住人で内田三郎家吉の名があり、木曾義仲に従う巴御前と一騎打ちの末、首を取られたと見える。さらに『吾妻鏡』『承久記』などにその名を見て取ることができ、この内田を本貫地として活躍した武士であったようである。

内田庄は、掛川市上内田字王子に領座する王子社に通わる大般若經に「内田庄上郷」とある。さらに内田家文書に中に「遠江国内田郷庄下郷地頭職……」とあり、内田莊が上郷と下郷によって構成されていたことがわかる。特に近年発表された内田家文書と保賀家文書によって中世のこの地域の歴史解明に大きな成果を提示していることは言うまでもない。

塩の道沿いに集約する遺跡や政所、御門など地名にみえる中世的な歴史背景の中で内田庄下郷に立地する高田大屋敷遺跡の意義は大きく、今その研究は始まったばかりである。



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡

## 第Ⅱ章 調査に至る経緯

### 調査の経緯

菊川町の南部に広がる広大な沖積地は、行政的に内田と横地地区にあたる、この地区は、稲作を中心とするレタスやイチゴ・花などの園芸栽培の盛んな農業生産地域となっている。しかし昭和20年代後半の耕地整備事業によって標準区画20aに整備された以降は、用水や農道整備などが立ち遅れた。これらの問題を解消するため昭和56年頃から県営圃場整備事業を行う要望が高まった。昭和58年12月専業農家の規模拡大・兼業農家の省力と協業を促進させるため農業の機械化や生産地の環境整備を目的に県営圃場整備事業が採択され、本格的に整備が始まることとなった。

県営圃場整備は、内田地区と横地・内田地区の二地区とした。その面積は、内田地区は中内田からなる92.6ha、横地・内田地区は東横地、三沢、下内田からなる175.5haの合計268.3haが対象となった。この面積の対象水田は、町水田面積の27%と広い上、組合員468名と規模が大きいことからこの整備を推進するため、菊川町南部土地改良区組合が設立され組合員と関係機関との調整や事務を図ることになった。圃場整備事業用地域内には、昭和56年度作成された菊川町遺跡地図によると、内田地区1工区に下の坪遺跡、2工区に森前遺跡、3工区に東ノ坪遺跡、御門前遺跡、前切遺跡、政所遺跡、横地・内田地区は4工区と5工区に跨る耳川遺跡、8工区の土橋遺跡の周知遺跡が分布しており、工事計画に準じて調査を行うこととなった。各遺跡の調査経過については第1表の通りである。

高田大屋敷遺跡は、上小笠川の中流部菊川町下内田字高田に位置する遺跡である。遺跡は、昭和56年に静岡県教育委員会刊行の「静岡県の中世城館跡」によって紹介され、遺跡として周知化された。しかし、菊川町遺跡地図に記載されていなかったため、この遺跡の取り扱いについては、圃場整備事業内の周知遺跡とは別の問題として対応することとなった。遺跡の所在する地点は、昔から大雨のたびに住宅が浸水したり農業生産に大きな被害を受け地域住民として問題となっていた。そのため、この地区の整備は、この場所で生産し生活する住民にとって長年の願いであったため、遺跡による事業の影響に対して危惧する意見があった。高田大屋敷遺跡は、圃場整備事業採択後の4年後に静岡県教育委員会刊行の静岡県文化財地名表II - 静岡市以西 - で初めて登録された経緯の中で開発側と菊川町教育委員会・静岡県文化課の各関係者と協議を行い、遺跡の性格や範囲等資料を提示するための確認調査を実施することとなった。確認調査は各協議経過を踏まえて、昭和63年度から平成5年度までに9回段階的に行われた。また、工事計画に伴う部分的な本調査も実施された。

遺跡名	地区	期間	面積	内容	備考
耳川遺跡	横地・内田地区 4工区	昭和59年12月23日～昭和60年3月31日	300m <sup>2</sup>	排水路改良工事に伴う本調査	
森前遺跡・森前外屋敷遺跡	内田地区 2工区	昭和60年7月29日～11月5日	1,075m <sup>2</sup> 380m <sup>2</sup>	面工事に伴う本調査	森前外屋敷遺跡 新規登録
古川遺跡	横地・内田地区 4工区	昭和60年11月26日～昭和61年3月10日	972m <sup>2</sup>	第5工区内の古川遺跡の範囲確認調査	
東ノ坪・前切・政所・御門前遺跡	内田地区 3工区	昭和60年11月10日～昭和61年2月	3,150m <sup>2</sup>	第3工区内の東ノ坪遺跡・前切遺跡の範囲確認調査	
耳川遺跡	横地・内田地区 4工区	昭和62年11月10日～12月16日	1,200m <sup>2</sup>	第4工区内の耳川遺跡の範囲確認調査	
東ノ坪遺跡	内田地区 3工区	昭和63年11月18日～平成元年3月30日 平成元年9月9日	12,950m <sup>2</sup>	面工事に伴う本調査	
御門前遺跡	内田地区 3工区	平成元年9月18日～平成2年1月31日 平成2年8月17日～12月14日	5,500m <sup>2</sup> 5,200m <sup>2</sup>	面工事に伴う本調査	
古川遺跡	横地・内田地区 4工区	平成2年1月8日～3月31日 平成2年10月23日～平成3年3月1日	2,500m <sup>2</sup>	面工事に伴う本調査	

第1表 圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査一覧

### 第Ⅲ章 調査の経過

遺跡の性格や範囲を明らかにすることを目的として確認調査を主体として発掘調査が実施された。確認調査は、本来各種事業計画を把握した時点で協議を行い、事前に協議資料として作成しなければならず、保護協議の結果、工事上の関係でやむなく記録保存（本調査）に至る遺跡の面積が最終段階に確定するのが、今回の調査では、圃場整備事業が進行している段階で実施しなければならなかった。そのため、整備事業の計画図に従ってトレーナー及びグリットの設定を行うことになった。

昭和63年8月、文化庁、静岡県文化課の指導のもと田辺昭三京都芸術短期大学教授を団長として調査を実施したのを機に、平成5年度までに9回の調査が行われた。調査は確認調査6回、本調査3回である。これらの調査履歴は当初、年度ごとにまとめていたが整理していく上で支障があったため、昭和63年8月の調査を第1次調査とし、その後の調査については試掘調査・確認調査・本調査と調査方法の区分にとらわれず、すべて第〇次調査として調査履歴を統一して取り扱うこととした。各調査履歴は以下の第2表のとおりである。なお、調査履歴の第8次調査については刊行されている報告書を参照して頂きたい。

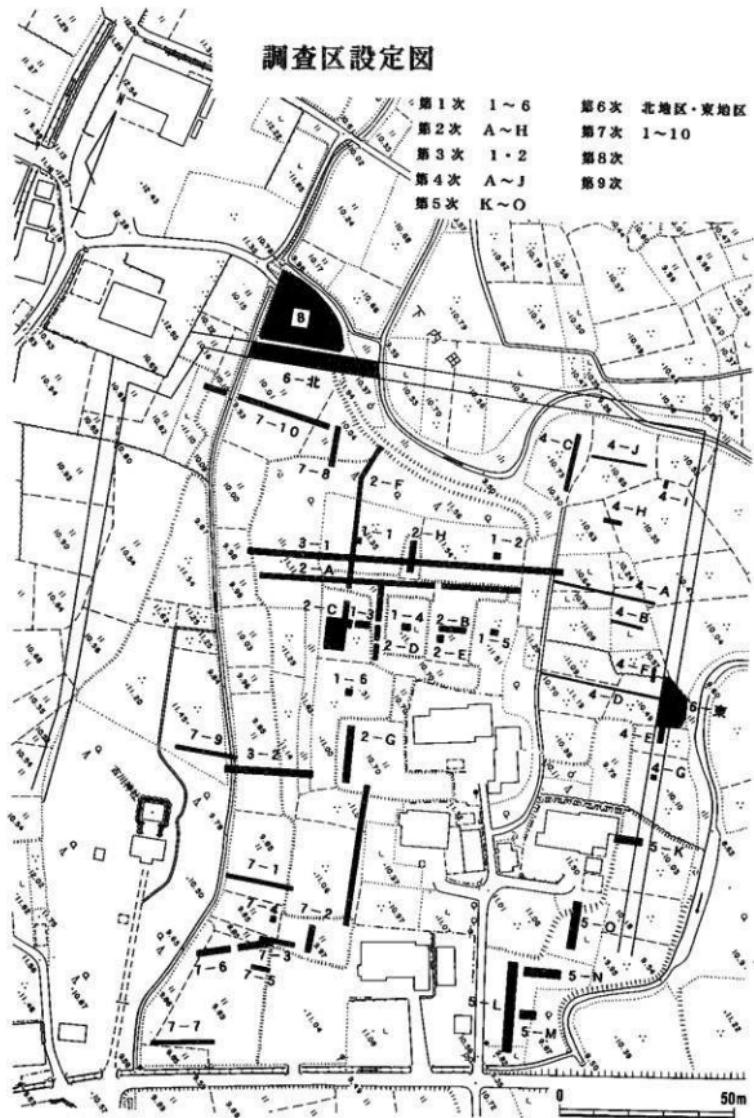
調査番号	年度	期間	調査方法	内容
第1次調査	昭和63年度	昭和63年8月1日～9月16日	確認調査	地形測量・土壌内部の状況
第2次調査	昭和63年度	昭和63年11月28日～12月24日	確認調査	土壌内部の状況・北と西側土壌の構築状況
第3次調査	平成2年度	平成2年6月4日～7月20日	確認調査	西側水田部と東側と西側土壌の状況
第4次調査	平成2年度	平成2年10月29日・30日	確認調査	東側の道路範囲
第5次調査	平成2年度	平成2年11月27日	確認調査	南側の東部分の遺跡範囲
第6次調査	平成2年度	平成2年12月15日～平成3年1月21日	本調査	排水路部の本調査
第7次調査	平成3年度	平成3年8月16日～9月21日	確認調査	西側水田部の遺跡範囲・土壌状況
第8次調査	平成3・4年度	平成4年3月7日～6月15日	本調査	排水路北側の本調査
第9次調査	平成5年度	平成5年9月25日～10月15日	本調査	西側土壌から水田部の仮設排水路工事の本調査

第2表 調査履歴

### 第Ⅳ章 調査の概要

今回の報告では、調査履歴に従って各調査次ごとに調査の方法・経過も含め記述することにする。調査にあたり、遺物番号は第1次から通し番号とし、遺構によって親番に枝番をつけて取り上げを実施した。遺構は調査区ごとに付記している。そのため重複する番号がみられるが、現地調査段階の名称を優先した。整理にあたり、遺物の分類や年代は、知多半島陶器中野晴久、国産施釉陶器藤澤良祐、舶載陶磁器小野正敏各氏の編年案に従った。遺構は溝（S D）、土坑（S K）、不明遺構（S X）、柱穴（P）とし、盛土により構築され一定の規則性を備えた遺構を土壙として統一した。

## 調査区設定図



第3図 第1次～7次・9次調査区

## 第1節 第1次調査

調査の目的 現地の地形測量と遺構の残存状況の確認  
調査期間 昭和63年8月1日～9月16日  
調査面積 23.4m<sup>2</sup>  
調査経過 8月1日～18日まで空中写真測量の為の除草作業  
18日 空中写真測量  
19日 グリットを6ヶ所設定し掘削を行う  
9月9日 3・4・6グリット完掘  
10日 1・2・5グリット完掘

### 調査の概要（第4図～第6図）

田辺昭三氏の指導のもと現況測量の現地調査を実施することとなった。測量にあたり草木が茂っていたため人力によって除草作業を行った。測量はヘリコプターを用い空中写真撮影を行う。範囲は高田大屋敷遺跡を中心に3万m<sup>2</sup>で、周辺も含め縮尺1/200とした。グリットは測量後、工事計画の土地区画図にあわせて10m方眼グリットに区切り、このグリットを基準に調査を実施した。この基軸の方位はN-4°-54'-48"-Wである。層位は基本層位を表土（1層）、明灰褐色砂質土（2層）、黄茶褐色粘土（3層）、黄褐色粘土（4層）の四層に識別することができた。

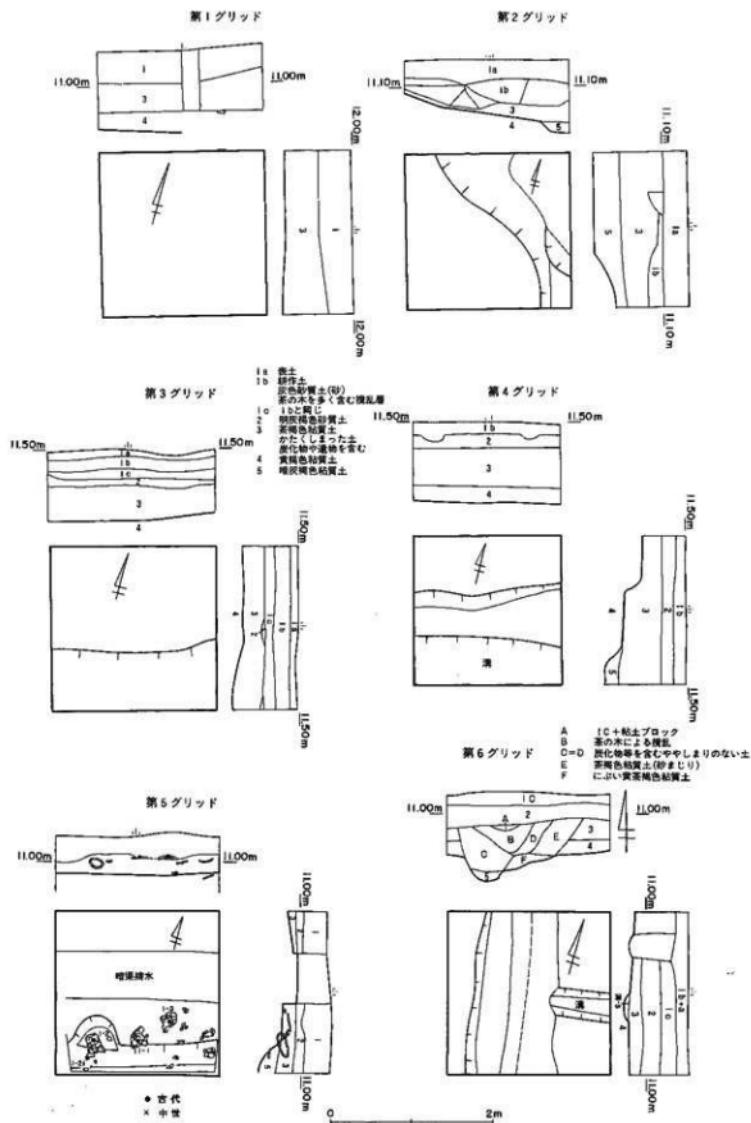
**第1グリット** 方形に巡らす土塁内側北西コーナー付近に2m×2mの大きさで設定したものである。調査区ではN12区に立地し、標高は11.52mで現況は茶畑となっている。土層は1・3層の2層からなり安定した土層帯で3層最下位より古墳時代の須恵器が出土している。遺構は確認されなかった。遺物は覆土より青磁蓮弁文碗12が1点出土している以外中世遺物は見当たらなかった。

**第2グリット** 第1グリットに対比する北東コーナーに2m×1.9mの規模で調査区を設定した。調査区はJ12区に立地する。標高は11.62mと土塁内側では最も高い地点となっているが、畑の耕作によつて平らな地形となっている。土層は1・3層の二層からなり3層上面に溝状掘削が検出され、複雑な堆積となっている。この遺構は中世以降のもので耕作等に関連する掘削と考えられる。遺物は奈良時代の須恵器や土師器などが出土しているほか、羽口破片など鍛冶関連の遺物もみられる。中世の遺物では、山茶碗が1点3層より出土している。また、計測できた奈良時代の須恵器壺蓋、灰釉碗6も3層より出土している。

**第3グリット** 第1グリットの直線上南へ30mの地点に2m×2mの規模で、茶畑に設定した。遺跡の中央の西側に位置し、調査区はM15区となっている。土層は1～4層が確認されているが、2層は10cm以下と薄い。3層は硬く絞まった土で、炭化物や古代から中世の遺物を含んでいる。遺構は調査区中央で東西に向かって4層上面より落ち込みが検出された。落ち込みは残存する部分で幅1.4m、深さは15cmを測る溝と考えられる。遺物は中世の時期の土器が21点出土している。土器は3層覆土より



第4図 第1次調査位置図



第5図 第1次調査第1～第6グリッド平面図

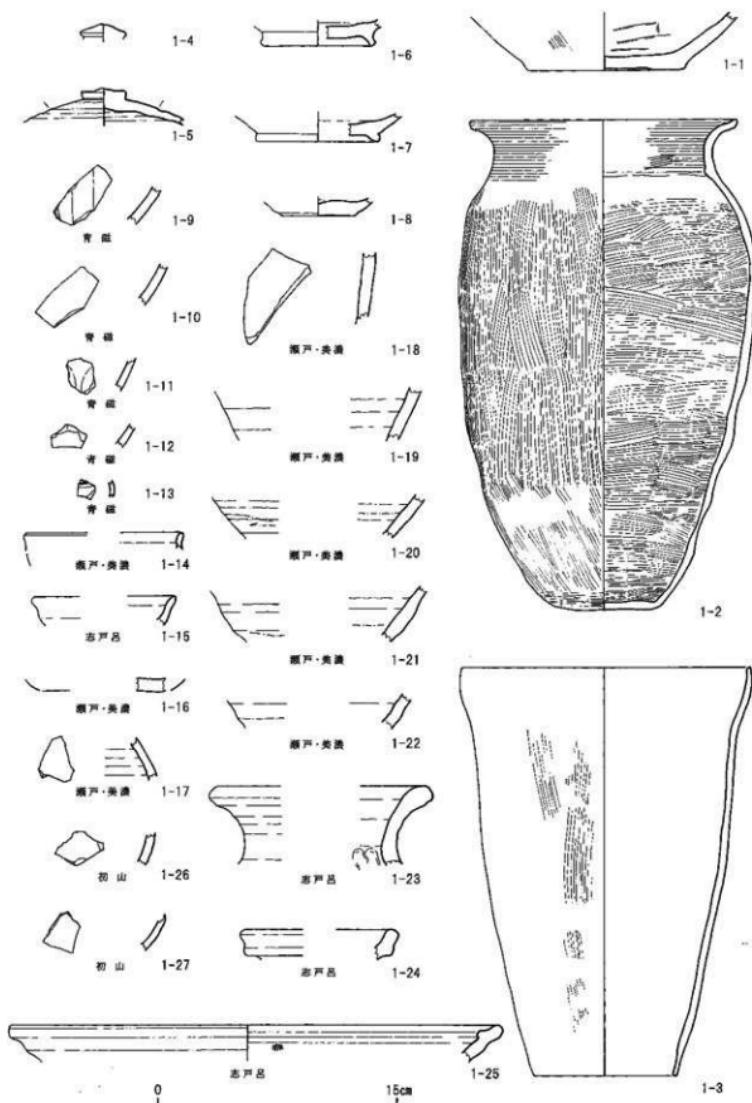
青磁蓮弁文碗9・10の2点と東遠系の小皿8、奈良時代須恵器壺蓋4ほか山茶碗などが出土している。また、耕作土1層内から古瀬戸天目茶碗14、縁軸小皿16と12~13世紀と15世紀の二時期に一定量まとまっている。

**第4グリット** 第3グリットの東へ12mの地点に2m×2mの規模で調査区を設定した。調査区は標高11.50mで遺跡の中央地点にあたり、周辺は水田なり1段低い地形となっている。土層は1~4の基本層序に溝遺構の包含層を5層として確認された。3層は表面より30cm下で厚さ約50cmと厚い土層となっている。遺構は3層下面より掘り込まれた溝が東西に走り、南に向かって傾斜している。溝が土器と20cm大の円碟が出土している。出土遺物は土器が主体で、古代の須恵器、土師器が半分以上を占め中世の遺物は47点と約21%となっている。中世の遺物は山茶碗・小皿が24点と13世紀前半の東遠系山茶碗類が出土しているほか、船載陶磁器や国産施釉陶器の瀬戸・美濃、初山、志戸呂産などがみられる。計測したのは4層より出土した東遠系山茶碗7、古瀬戸產灰釉壺か瓶17、祖母懐茶壺18、初山產天目茶碗26、溝からは古瀬戸盤類19・20、志戸呂産擂鉢25、2層より青磁蓮弁文碗11・13、志戸呂産天目茶碗15、表土で初山產天目茶碗27となっている。

**第5グリット** 第3・4グリットの東西直線上に並ぶグリットで第3グリットより東へ18.5mに位置する。標高は11.54mを測り茶畑で平らとなっている。調査区は中央に暗渠排水が東西に走り擾乱されていたが、南側では3層から5層にかけて土師器が多く出土している。上層部は耕作や後世の擾乱が著しく、表面より50cm程で安定した層となっている。遺構は土器を伴い南側に溝状の落ち込みが検出されている。遺物は奈良時代の土師器壺1、甕2、瓶3が溝より出土しているほか、古瀬戸盤類21・22、山茶碗・小皿などがある。

**第6グリット** 第1・3グリットと同じく南北直線上に配置する。調査区は、第3グリットより南へ8mの地点で2m×2mの規模となっている。土層は1~4層を基本層序として平均的に堆積している。遺構はグリットの中央に幅1m前後、深さ60cmの規模で溝が南北に延びるほか、この溝に直交する形で東側に幅30cm、深さ10cm程の溝が検出されている。前者の溝が2層下層から掘り込まれており、少なくとも2回以上の掘り方が認められる。覆土より中世以降の溝と考えられる。後者の溝は前者の溝によって一部削平されているが3層下層より掘り込まれている。この溝から須恵器や志戸呂産壺23が出土しており、中世の時期と判断される。遺物は2層及び溝覆土から近世土器に混じて山茶碗・小皿が出土している。

今回の調査は、第1に現状地形測量を実施し、全体の遺跡を捉えることが目的であった。地形測量によって土壘は、北側は非常に残りが良く標高も高く位置を示す。しかし、北東隅は一箇所後世の削平によって切れていた。西側と東側は耕作による擾乱により、高盛は低く数カ所切れていた。南側は、現踏査では南北側が不明な点がみられたが、空中測量によって全体像を見いだすことができた。この結果、土壘は方形に巡らされ土壘中心部で東西60m、南北88mの規模を有する城館遺構を設けている遺跡であることが鮮明となった。第2に確認調査で土層観察を中心に行い、中世の時期の生活面や遺構存在するかを把握することを主眼においた。第4・6グリットから溝状遺構、さらに第5グリットでは古代の遺物が一定量まとめて出土しており当遺跡が古代から中世に及ぶ遺跡であることが再確認された調査であった。出土遺物に中国陶磁器を含む中世土器がみられたことは、今後この遺跡の性格を考える一つの資料を提供するものと考えられる。なお、調査では遺跡の確認段階に留め保存する事を優先したため遺構の年代的な位置付けには問題は残ったが、当初の目的を達成することができたといえよう。



第6図 第1次調査出土遺物実測図

第3表 第1次調査出土土器観察表

図版 番号	登録番号	米源 番号	出土地点 グリット トンネル名	器種	法 帯 (mm)				残存率		差地	破片数	備考
					口径	器高	底部	高台高	L	底			
1-1	25	162	5グリット	土師器蓋	-	-	97		-	1/1		21	
1-2	24-32	181	5グリット	土師器蓋	168	306	60		1/3	1/1		97	
1-3	18-26	182	5グリット	土師器板	180	255	86		2/5	2/5		37	
1-4	6	295	3グリット	須恵器環蓋	-	-	-	フマミ 25×10	-	-		1	
1-5	30	292	2グリット	須恵器環蓋	-	-	-	フマミ 25×7	-	-		1	
1-6	30	293	2グリット	灰釉碗	-	-	66	5	-	1/3		1	
1-7	8	297	4グリット	山茶碗	-	-	76	4	-	1/4	東遠系	1	
1-8	6	294	3グリット	小皿	-	-	46	-	-	1/3	東遠系	1	
1-9	6	213	3グリット	青磁蓮弁文鏡	小片	-	-		-	-	中国	1	B1類
1-10	6	107	3グリット	青磁蓮弁文鏡	小片	-	-		-	-	中国	1	B1類
1-11	3	106	4グリット	青磁蓮弁文鏡	小片	-	-		-	-	中国	1	B1類
1-12	17	108	1グリット	青磁蓮弁文鏡	小片	-	-		-	-	中国	1	B1類
1-13	3	105	4グリット	青磁合子	小片	-	-		-	-	中国	1	
1-14	2	60	3グリット	天目茶碗	小片	-	-		-	-	福戸・美濃	1	古瀬戸 後期
1-15	3	52	4グリット	天目茶碗	小片	-	-		-	-	志戸呂	1	大4
1-16	2	76	3グリット	綠釉小皿	小片	-	-		-	-	福戸・美濃	1	古瀬戸 後期～前古
1-17	8	54	4グリット	灰釉瓶か瓶	小片	-	-		-	-	福戸・美濃	1	古瀬戸 後I～II
1-18	8	55	4グリット	粗母焼板	小片	-	-		-	-	福戸・美濃	1	古瀬戸 後周
1-19	5・9	67	4グリット	盤類	小片	-	-		-	-	福戸・美濃	2	古瀬戸 後I～II
1-20	8・9	70	4グリット	舞葉	小片	-	-		-	-	福戸・美濃	2	古瀬戸 後III
1-21	32	69	5グリット	盤類	小片	-	-		-	-	福戸・美濃	1	古瀬戸 後II～III
1-22	12	68	5グリット	盤類	小片	-	-		-	-	福戸・美濃	1	古瀬戸 後周
1-23	15	53	6グリット	壺	小片	-	-		-	-	志戸呂	1	後Ⅳ
1-24	3	99	4グリット	壺鉢	小片	-	-		-	-	志戸呂	1	大3後半
1-25	9	100	4グリット	壺鉢	318	-	-		1/20	-	志戸呂	2	後IV新
1-26	8	50	4グリット	天目茶碗	小片	-	-		-	-	初山	1	大3後半
1-27	1	51	4グリット	天目茶碗	小片	-	-		-	-	初山	1	大3後半

## 高田大屋敷遺跡出土鉄滓の金属学的調査

株九州テクノリサーチ 技術顧問 大澤正己

### 概要

中世の館跡、高田大屋敷遺跡出土の3点の鉄滓を調査して次の点が明らかになった。

- (1) 3点の出土鉄滓は鍛冶炉の炉底に堆積形成された楕円形鍛冶滓である。鉄器制作の沸し鍛接すなわち高温繰り返し折り曲げ、鍛接時に派生した鍛錬鍛冶滓に分類される。
- (2) 鉄滓の鉱物組成は白色粒状結晶のウスタイト (Wustite: FeO) とファイヤライト (Fayalite : 2 FeO · SiO<sub>2</sub>) を晶出する。科学組成は鉄分 (Total Fe) 50~60%と多く、これに対してガラス質成分 (SiO<sub>2</sub> + Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> + CaO + MgO + K<sub>2</sub>O + Na<sub>2</sub>O) は 18~26%と少ない。鍛冶に供された鉄素材は砂鉄系であり砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) 0.34~0.51%と少量含む。
- (3) 出土鉄鎌は館内の自家用鉄器の制作に当たり、排出された鍛冶滓である。鍛冶原料鉄は、処女鉄と共に一部に廢鉄器の充当の可能性も指摘できる。鉄滓 F-912 の酸化マンガン (MnO) が 0.04% と低値がそれを示唆する。

試料番号	遺跡名	出土位置	遺跡名称	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化 第1鉄 (FeO)	酸化 第2鉄 (FeO <sub>2</sub> )	二酸化 硅素 (SiO <sub>2</sub> )	酸化 アルミニウム (Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	酸化 カルシウム (CaO)	酸化 マグネシウム (MgO)
F-911	高田大屋敷	2地点	鍛錬鍛冶滓	49.84	0.19	33.78	33.45	17.73	3.67	2.59	0.85
F-911	高田大屋敷	2地点	鍛錬鍛冶滓	59.91	0.12	58.00	21.03	12.71	2.52	1.55	0.66
YOKO-1	横地城南	3406-35 SD-64 C-8	鍛錬鍛冶滓	58.42	0.19	66.63	9.21	15.89	3.78	0.68	0.45
YOKO-2	横地城南	4588C-5	鍛錬鍛冶滓	53.79	0.20	52.90	17.83	16.22	4.30	1.30	0.58

酸化 カリウム (K <sub>2</sub> O)	酸化 ナトリウム (Na <sub>2</sub> O)	酸化 マンガン (MnO)	二酸化 チタン (TiO <sub>2</sub> )	酸化 クロム (Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	硫黄 (S)	五酸化 磷 (P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> )	辰灰 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造渣成分	TiO <sub>2</sub>	注
											Total Fe	
0.64	0.29	0.15	0.51	0.02	0.080	0.251	0.39	0.00	0.028	25.77	0.517	0.010
0.57	0.22	0.04	0.34	0.02	0.046	0.199	0.10	0.00	0.130	18.23	0.304	0.006
0.74	0.44	0.12	0.18	0.01	0.01	0.44	0.12	0.004	0.008	21.98	0.376	0.003
0.70	0.37	0.26	0.19	0.01	0.02	0.91	0.31	0.004	0.008	23.47	0.436	0.004

注1: 大澤正己「伊平野出土鉄滓の金属学的調査」横地城南遺跡発掘調査報告書 菊川町埋蔵文化財報告書第35集 静岡県小笠郡菊川町教育委員会 1995

第4表 菊川町出土鉄滓の化学組成

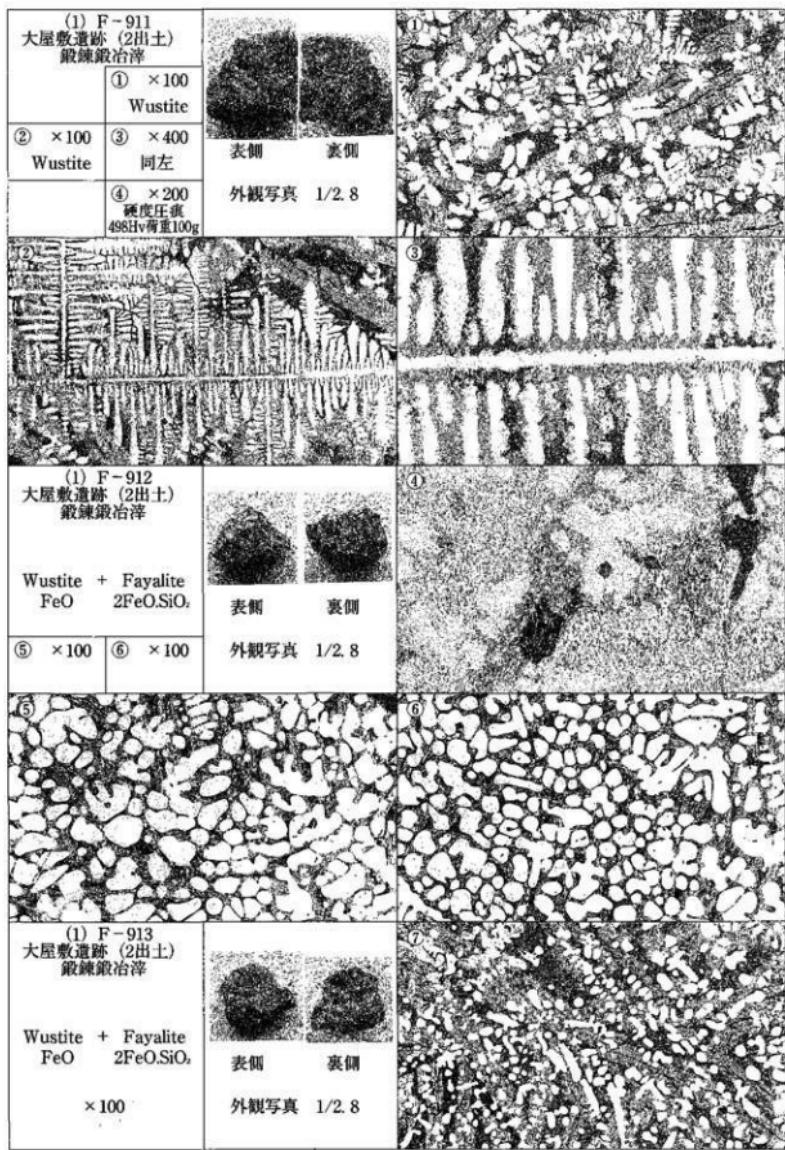


Photo. 1 鉄滓の顯微鏡組織

## 第2節 第2次調査

調査の目的 土壘の構築状況及び年代の把握。

土壘内側空間の遺構と土層観察。

北側範囲の確認。

調査期間 昭和63年11月28日～12月24日

調査面積 329.8m<sup>2</sup>

調査経過 11月28日 A・Bトレンチ掘削

29日 Cトレンチ掘削

12月2日～5日

D・Eトレンチ掘削

6日 F・Gトレンチ掘削

7日～8日 C・Gトレンチ完掘

9日～14日 A・Cトレンチ拡張

区掘削

15日～17日 Hトレンチ掘削

21日 Cトレンチ拡張区完掘

24日 Fトレンチ埋め戻し現地

調査完了

### 調査の概要（第7図～第14図）

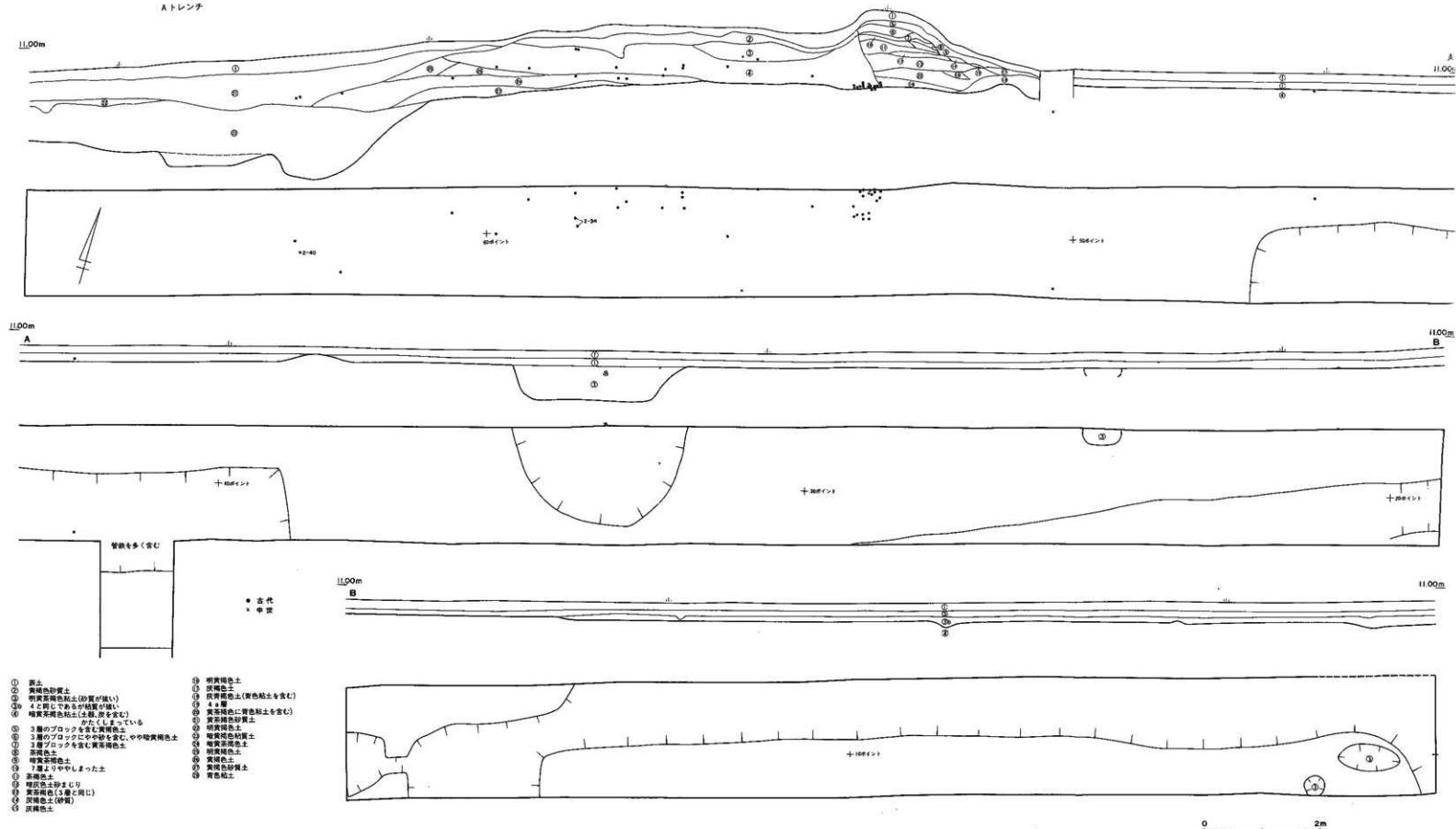
前回の調査で調査ができなかった水田面や土

壘調査について農作物の収穫を待って行うこととなった。調査区は7ヶ所のトレンチによって調査を進めた。トレンチ設定にあたり工事計画の区画内を横断するような形で東西・南北に直線上に配置し、土層状況を把握するよう努めた。またトレンチの名称については、第1次調査でのグリットを数字で記述したためアルファベットで命名することにした。調査にあたり、記録は平面図と土層図を20分の1で計測し、写真撮影は6×7版カメラと35mm版カメラを使用し、白黒フィルムとカラーを用いた。遺物の取り上げについては、第1次調査からの通し番号とした。

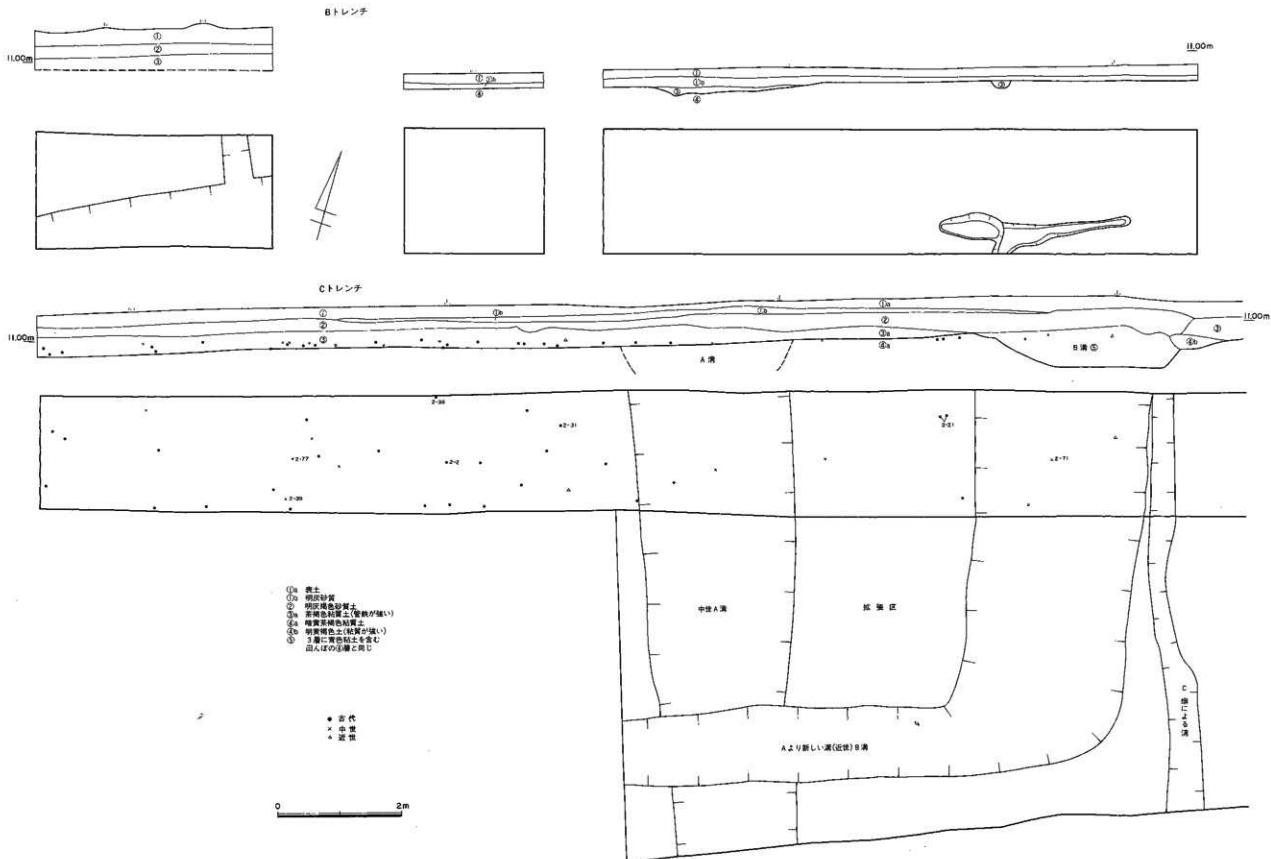
**Aトレンチ（第8図）** 第1グリットと第3グリットの中間に広がる水田域を基軸線に平行する形で調査区を設定した。調査区は全長68mで西側土壘を削平し外側の水田との境まで延長して土層観察を行った。水田部分は、表土1層と明黄茶褐色粘質土3層が15cm前後で安定した堆積となっている。遺構は、西側土壘より5m東で幅10m規模で落ち込みが検出されたが、覆土は1層+3層が混ざった絞りのない土となっている。遺物は、須恵器破片が出土している。中央付近で平面形が梢円形を呈する直径3m、検出面より深さ60cm規模の遺構が検出した。覆土は3層で上面より常滑焼破片が出土している。トレンチの東では、溝状遺構がトレンチと平行する形で検出されている。規模は2m前後で深さ10cmと浅い。覆土は3層としたが基本的には3層と同じである。各遺構は4層に掘り込まれ、出土遺物等から判断し古代以降のものと推測される。トレンチの西側に構築された土壘がみられる。土壘は中央部の最も高い所、標高11.93m、水田面より高さ1mを測り、構築面より1.33mとなっている。土壘の東側では水田面と接する地点では30cm程の掘り込みが確認できた。盛土の厚さは10～20cm程度を平原に固めて構築する版築状とし丁寧な作りとなっている。しかし、土壘の西側は削平を受けているが、7.5m付近まで平坦な地形が広がり基本的に4層の一層となっている。この層は硬く絞まり、炭化



第7図 第2次調査位置図



第8図 第2次調査Aトレンチ平面図 - 15・16 -



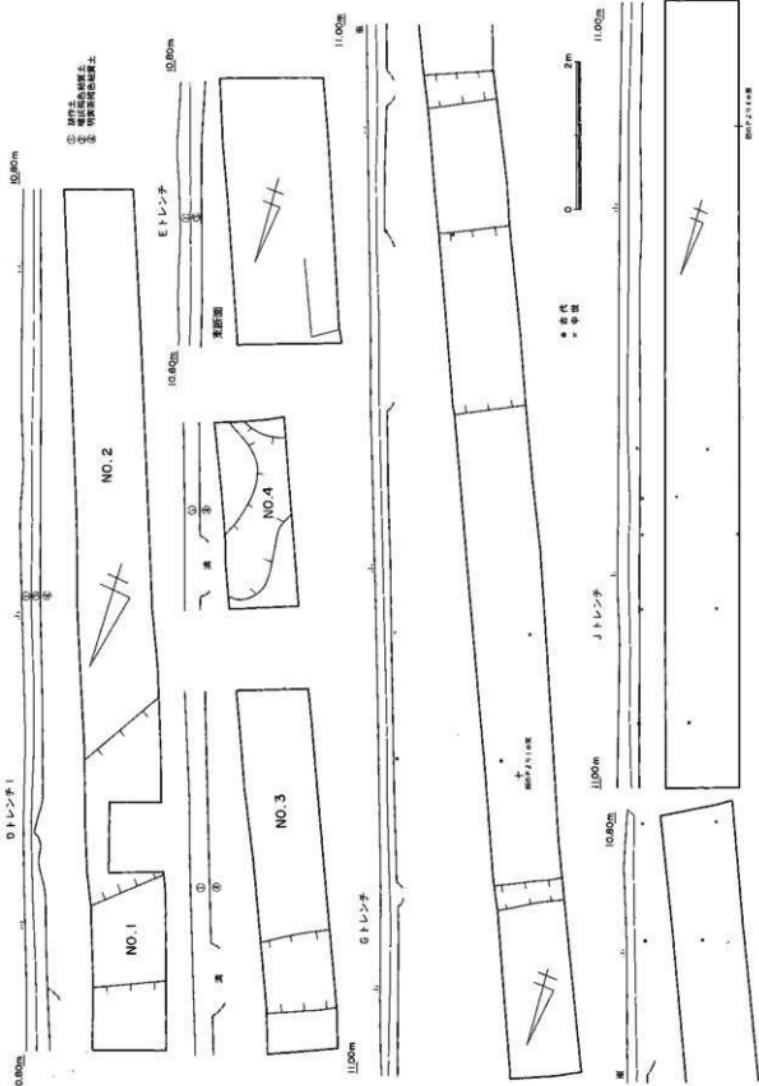
第9図 第2次調査B・Cトレンチ平面図 - 17・18 -

物や古墳～奈良時代の須恵器、土師器を含んだ土層となっている。土器は、ほとんどが破片で土壘中央部下層にまとまって出土しているほか、一定量下層に集中している。土壘の外側に落ち込みの東端が確認された。この落ち込みは検出面より2m西側で1.5m程深くなり、沖積地へと広がっている。遺構は土壘を構築した基盤層より掘り込まれており、この基盤層が沖積地の西にある古川神社境内付近で確認されており、同位層と考えられる。よって、今回検出された落ち込みは人工的な掘削ではないかと推測される。落ち込みの時期は出土量の少ない遺物の年代観では奈良時代より古くなるとは考えにくい。トレンチより出土した遺物は794点で、その内中世は20点(2.5%)と少ない。20点の内、12～13世紀の山茶碗、小碗、小皿、常滑窯で17点を数え、平安時代末から鎌倉初期にまとまっている。計測したのは山茶碗40、古瀬戸平碗53・折縁深皿51、入子51、志戸呂産播鉢75である。

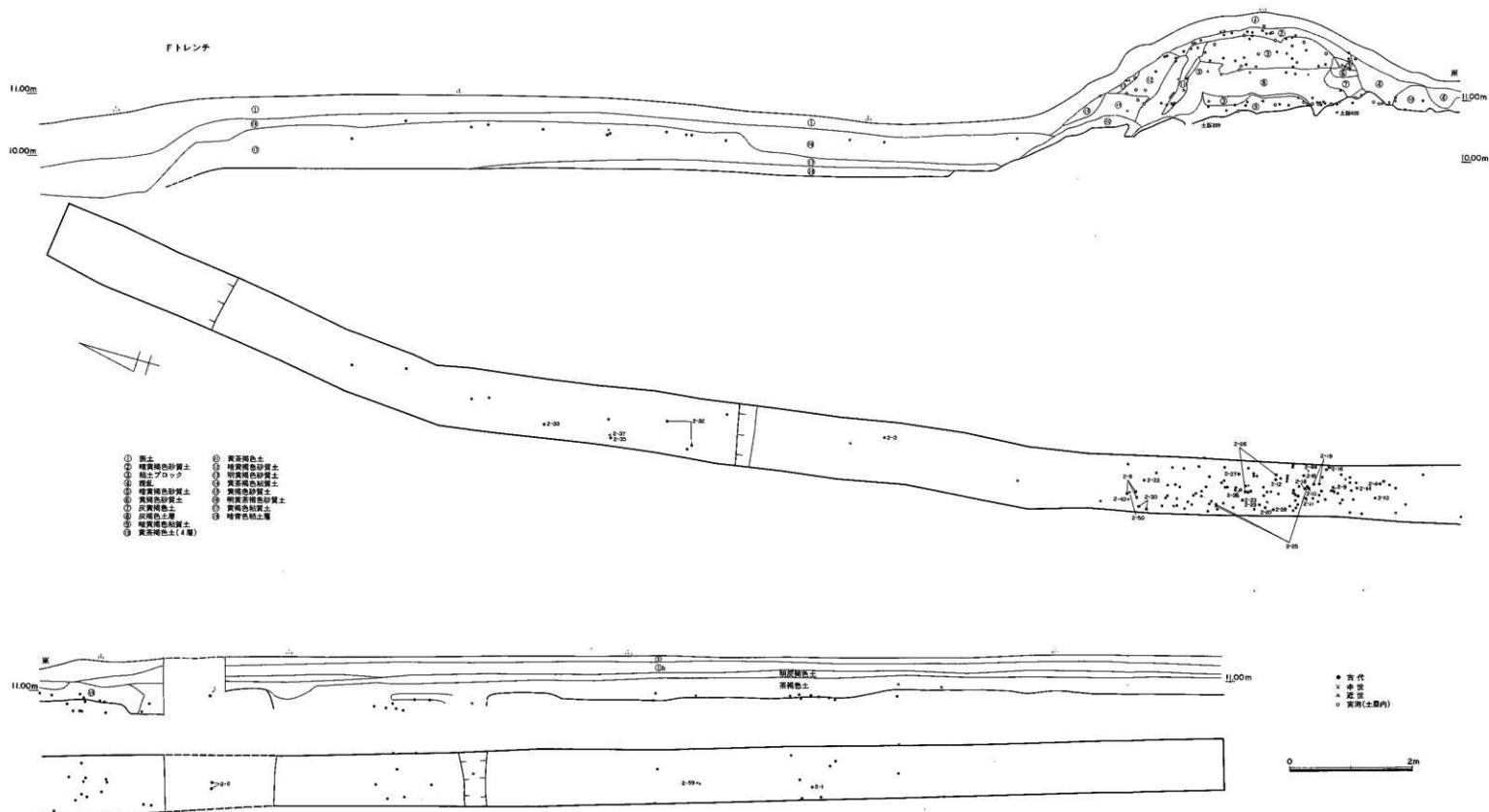
**Bトレンチ**(第9図) 遺跡のほぼ中央地点、第1次調査の第3グリットから第5グリットの線上の未調査地点の一部を除き15m×2mの規模で調査区を設定した。土層は水田部分では、耕作土を除けば4層となっており、一段高い畑地点の第3グリットから第5グリットと層位に違いが認められる。遺構は第3グリットで検出された落ち込みの続きが調査区の西側で確認されている。また、東側では不整形な溝状遺構が検出されている。この遺構は規模が最大幅で36cm、深さ10cmと浅く、覆土は3層となっている。遺物は土器が247点で、山茶碗を主体とする中世が29点となっている。計測できたのは、古瀬戸後期平碗52・灰釉土器39で東側の覆土より出土している。また、西側の覆土からは、船載陶磁器青磁碗8が見つかっている。

**Cトレンチ**(第9図) 第3グリットを中心に南北20m×2mの規模でトレンチを設定した。この地点は前回の調査で遺構が検出され、攪乱が少なく安定した土層状況がみられた位置である。土層は黄褐色粘質土の4a層を基盤層とし、ほぼ平らな地形となっている。基盤層の上面に堆積する3層は黄茶褐色粘質土で管鉄が強く北側で約30cmの厚さとなっているが、中央より南側では遺構による掘削で不明瞭となるが、南端で検出され安定した堆積となっている。3層には、古代から中世にかけての土器が多く含んでいた。遺構は中央より南側に3条の溝を検出した。この溝の規模を把握するため調査区を全長10m、西へ幅5mの規模でC区拡張区とした。調査区南端に検出されたC溝は幅40cm～50cm、深さ20cmの規模を有し、東西にはほまっすぐ延びる。溝はB溝を削削し掘り込まれており畑に伴う溝と考えられる。調査区中央の溝はA溝とした。この溝は東側で幅2.5mを囲むが、西側にいくに従って狭くなり2mとなっている。溝はトレンチに直交する方向で東西にまっすぐ延び、4層から掘り込まれている。C溝の北に逆L字形に溝が検出され、B溝とした。B溝は東側で幅2.6mで西に延び、北に直角に曲がり幅の規模を約半分の1.2mにして南北に走っている。溝は深さ60cmで底面は幅が広く1.7mで断面皿状を呈する。覆土より17世紀の志戸呂産播鉢75が出土しており、近世の溝と考えられる。溝の切り合によりA溝はB溝より古いことが明らかとなった。遺物は調査区北側に多く出土しており、中世土器69点と今回の調査区では最も出土量が多い地点となっている。計測したのは4a層上面で奈良時代の須恵器壺蓋21をはじめ、古墳時代後期の土師器高杯2、平安時代の須恵器壺31、山茶碗38・39、小皿45、古瀬戸後期天目茶碗46～48・縁釉小皿56・盤類60・62・63・播鉢65・69・花瓶52、大窓の小壺71、12世紀の常滑窯77、青磁割花文碗79の19点である。山茶碗を中心として12世紀後半から13世紀前半に一定のまとまりがみられるほか、14世紀後半から15世紀後半の一定量の出土量がみられる。特に14世紀後半から15世紀後半の古瀬戸製品では天目茶碗をはじめ皿類や盤類、播鉢など当時の生活用具を保有している。

**Dトレンチ**(第10図) 第3グリットと第4グリットが立地した畑の境に一段低い水田面が広がり、この水田面に南北方向に18m×1mの規模で調査区を設定した。調査区の北端はAトレンチに接し、



第10図 第2次調査D・E・G・Jトレンチ平面図



第11図 第2次調査Fトレンチ平面図 - 21・22 -

中央付近ではBトレンチと切り合う。Bトレンチと接する地点を境にやや東側に振れる形でトレンチが延びている。土層は他の水田面の調査区と比較して変化はみられない。遺構は北側に2条の溝、中央より南に1条の溝、不整形な溝1箇所が検出されている。北側の北端溝はAトレンチに延びており、幅1m前後の規模で東西に走る。この溝のすぐ南側に調査区を斜めに延びる大きさ18mの比較的大きな規模を有する溝が検出された。溝は4層へ掘り込まれているが深さは不明である。中央付近に検出された溝は東西に延び大きさ1mを測る。南側の溝は曲線的に検出され、溝が合流する地点と考えられる。出土土器は全体量で50点と少なく、中世の時期は5点を数える。この時期の土器は小片で北側覆土より古瀬戸擂鉢66が出土しているほか山茶碗・小皿がみられる。

Eトレンチ（第10図） Bトレンチの西側に直交する形で南に向かって3.5m×1.3mの規模のトレンチを設定した。調査区はBトレンチで東西方向の土層堆積を確認したが、水田部分が南北に広がっていることから、北側についてはAトレンチによって確認されているが資料的に少ないため、南側で南北の堆積と遺構の所在の把握を図った。結果的に遺構はなく、平坦な地形となっていた。遺物は山茶碗5点、小皿1点の中世時期の土器が覆土より出土しているが計測できものはなかった。

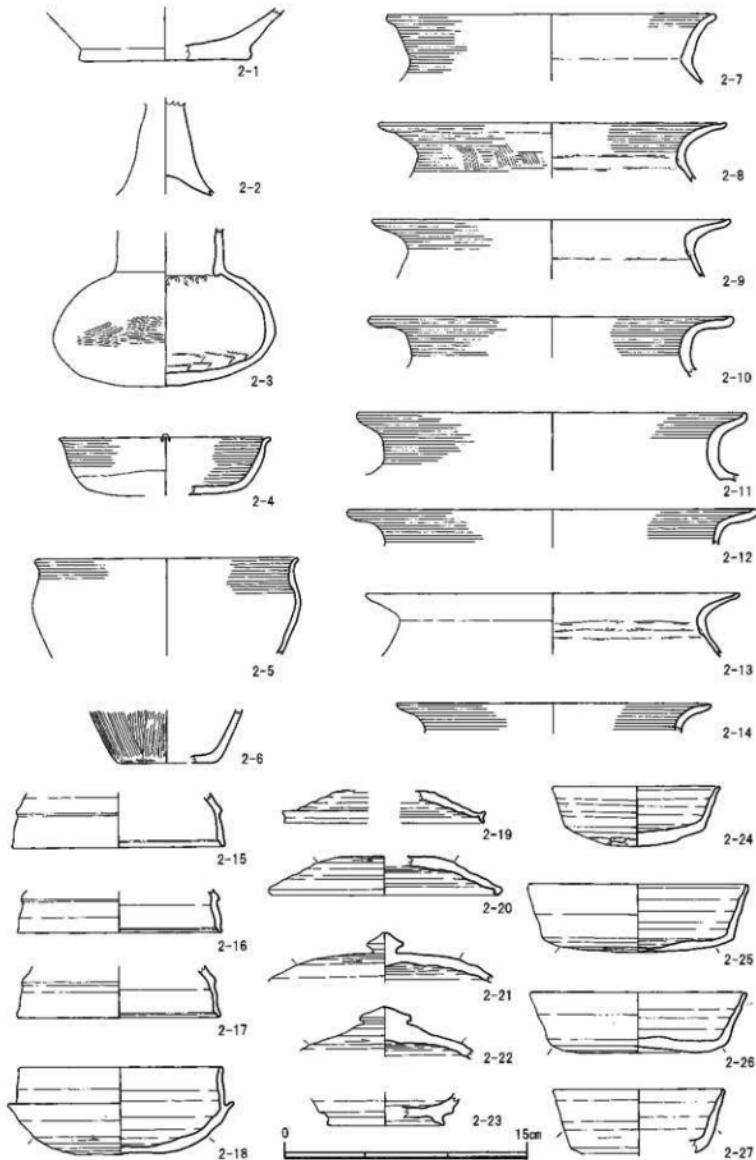
Gトレンチ（第10図） Cトレンチの南16mに南北に長く17.8m×1mの規模で調査区を設定した。調査区は水田で平らな地形となっている。土層は1層と3層が厚さ10cm程度で均一的に堆積している。遺構は4層上面で検出され、覆土は3層が主体となっている。遺構は溝が3条すべてトレンチに直交する形で方向がほぼ同じ溝がみられる。遺構状況よりこの二つの溝は、同時期のものと判断される。調査区中央には、幅2.3mの溝状遺構が検出されたが、深さは明らかでない。遺構上面より奈良時代の須恵器が出土している。遺物は、土器で30点程出土している。土器のうち中世時期は5点で小碗、小皿、常滑甌、古瀬戸折縁深皿、船載陶磁器青磁端反碗となっている。

Hトレンチ（第10図） Fトレンチの東15mの地点で平行する形で10.6m×1mの規模でトレンチを設定した。調査区は遺跡の北側で水田面が最も北に突出した位置にあたり、北端は第1グリットと第2グリットの線上となっている。表土の高さは標高10.8m前後ではほぼ平らとなっており、4層上面で10.5m前後となっている。表土から4層上面までは、二層に識別され厚さ10~15cmの堆積で、1層と3層となっている。遺構は4層上面までの調査では、確認できなかった。遺物は調査区北側の4層上面から山茶碗類がまとまって出土しているほかは覆土より古代から近世までの土器が306点となっている。小片の土器の中で中世時期は38点で山茶碗類が25点で圧倒的に多い。また古瀬戸製品では灰釉小皿55、盤類61、卸皿64、擂鉢67など後期の15世紀にまとまっている。船載陶磁器は鎌倉期の白磁口禿皿82、15世紀前半の白磁皿83と白磁が出土している。出土遺物から12世紀後半から13世紀と15世紀の二次期に中世遺物はまとめており、画期がみられる。

Fトレンチ（第11図） 遺跡の北西に南北に42m×0.8mの規模でトレンチを設定した。トレンチは南側ではCトレンチの延長線上とし、北側土壘手前では地形に合わせる形で東に振れながら旧流路に向かう方向で行った。現況は立木や篠などが生い茂り、他の調査区に比べて掘削には困難な部分もあり、最小限の幅で調査した。土壘より南側の土層は、標高11m上面を三層に識別して区分したが第1グリットの1層に対比されるものである。表土より4番目の層は黄茶褐色粘質土で3層となっている。この層は水田や畑で遺物包含層として確認されているもので土層状態は安定した堆積を示している。3層の下位は4層黄褐色土で、遺構はこの層の上面で確認できる。また北側土壘の下層にこの層が続いている。遺構は、土壘山頂部より南へ10m付近に幅40cmの溝が東西に延びている。調査区北端より2m手前で落ち込みがみられ旧流路の右岸と確認された。この落ち込みより

土壘までの約8m間は平らとなっている。土壘は最も高い位置では標高12.4mで南の畠より90cmの高さとなっているが、北の旧流路側では1.8mと非常に高く見上げるような状態にある。土壘は版築より硬く締められ構築されている。Aトレンチで確認された西側土壘より土層は、木の根による攪乱も加わり複雑となっている。盛土の中央部は大きく最下位の9層、中位の8層、上層位3層の三段階で大きく積み上げた変化がみられる。中位の8層は遺物を含むが比較的少なく逆に上層と下層には土器破片を多く含んでいる。9層と8層は平らに土が盛土しているのに対して3層では粘土の塊をブロック状に積み上げ硬く締められている。木の根による攪乱によって一部崩れているものの非常に残りの良い土壘である。土壘の外側北と南側には掘り込みが検出されている。遺物は土壘内より多量の土器が出土しており、その主体は古墳時代から奈良時代の須恵器2~20、22~30、土師器4・8~14で山茶碗類も少量出土している。土壘の外側北では平安時代の土器32・33・35・37が比較的目立っている。中世土器は45点出土しており、その内30点が山茶碗類となっている。瀬戸・美濃製品は10点で表土や土壘外側の北側より出土しており、その内後期の天目茶碗49・50、中期の折縁深皿58、後期の卸目付大皿59、後期から大窯の播鉢68が計測できた。また北側より大窯3期後半の初山鉄釉皿76が1点出土している。

今回の調査で水田面の遺構と土層の状態を確認することができた。土層は4層遺構の検出面にあたり西側土壘で10.6m、北側土壘10.8m、Cトレンチ周辺の畠で10.8m、Bトレンチ周辺の水田で10.5mを測り、現在、水田で区画された畠も含めほとんど4層の確認面の高さは一定となっており、水田部分が数十cm低くなっていることになる。本来、畠の高さで平らとなっていた遺跡周辺は、水田耕作の確保による掘削で削平され低くなったものと考えたい。但し、この水田面がいつ頃整備されたものか明らかでないが、出土遺物から中世以降と判断される。土壘は西側と北側の二箇所の立ち割りを試み上層観察の結果、版築工法によるものであることが明らかとなった。また西側と北側の土壘の構築に特徴がみられ、北側はより堅固な作りとなっており、背後に流路が流れる環境を意識した作りとなっていた。Cトレンチ周辺では、中世遺物や遺構が検出され他の調査区に比べ興味深い地点となっている。今後の面的な調査で明らかになることであろう。出土遺物から古墳時代から中世にかけての土器がみられ、古代の土器は量的に多く、この時期に当遺跡が繁栄していたことを推測される。さらに中世の遺物では、12世紀後半から13世紀、14世紀後半から15世紀にまとまりがみられ、大きな画期を見いだすことができる。古墳時代から当遺跡が生活域として使用されたのを始め、中世に至るまで継続していくことが改めて認識する結果となった。



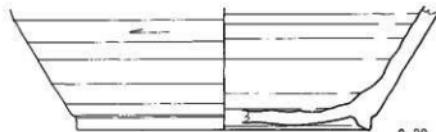
第12図 第2次調査出土遺物実測図1

第5表 第2次調査出土器観察表

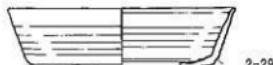
図版番号	登録番号	実測番号	出上地名 グリット・トレンチ名	遺構名	器種	法 量 (mm)				残存率	产地	破片数	備考
						口径	器高	底厚	高台高				
2-1	210	161	Fトレンチ		土師器壺	-	-	103		-	2/9	1	
2-2	102	157	Cトレンチ		土師器窓環	-	-	-	-	頃部 23	-	-	1
2-3	339	177	Fトレンチ		土師器丸底壺	-	-	-	-	最大幅 139	-	-	1
2-4	352	159	Fトレンチ	土器	土師器环	130	35	-			2/5	-	11
2-5	259	165	Fトレンチ		土師器鉢	162	-	-			1/8	-	12
2-6	223	180	Fトレンチ		土師器甕	-	-	60			-	1/7	3
2-7	338	230	Fトレンチ		土師器甕	203	-	-			1/9	-	1
2-8	251-253	173	Fトレンチ	土器	土師器甕	214	-	-			1/6	-	2
2-9	387	171	Fトレンチ	土器	土師器甕	222	-	-			1/6	-	1
2-10	382	172	Fトレンチ	土器	土師器甕	226	-	-			1/8	-	6
2-11	381	234	Fトレンチ	土器	土師器甕	238	-	-			1/10	-	1



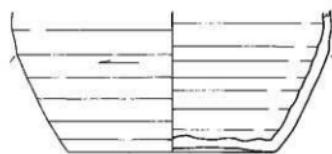
2-28



2-32



2-29



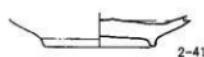
2-33



2-30



2-31



2-41



2-35



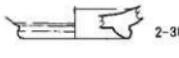
2-34



2-42



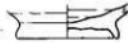
2-36



2-38



2-43



2-37



2-39



2-44

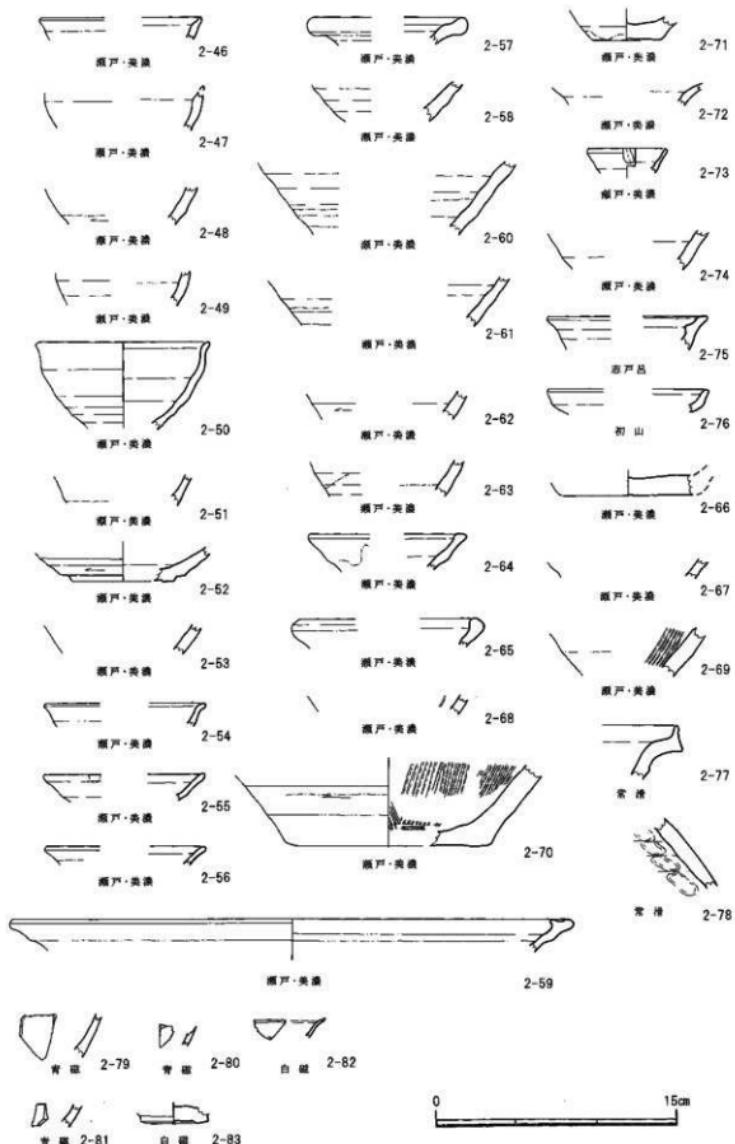


2-40



2-45

第13図 第2次調査出土遺物実測図 2



第14図 第2次調査出土遺物実測図3

出典 番号	登録番号	実測 番号	出土地点 グリッド・ トレンチ名	器種	法 量(cm)				残存率	产地	破片数	備考	
					口径	器高	底部	高台高					
2-12	378	175	Fトレンチ	土壘	土師器蓋	250	-	-		1/15	-	3	
2-13	350	176	Fトレンチ	土壘	土師器蓋	229	-	-		1/9	-	14	
2-14	355	174	Fトレンチ	土壘	土師器蓋	192	-	-		1/9	-	1	
2-15	340	258	Fトレンチ	土壘	須恵器环蓋	130	-	-		1/14	-	1	TK10
2-16	270	257	Fトレンチ	土壘	須恵器环蓋	126	-	-		1/10	-	1	TK10
2-17	366	256	Fトレンチ	土壘	須恵器环蓋	124	-	-		1/13	-	1	TK10
2-18	338-340	229	Fトレンチ	土壘	須恵器环身	125	54	-		1/4	1/2	2	TK10
2-19	232	242	Fトレンチ	土壘	須恵器环蓋	小片	-	-		-	-	1	
2-20	182	233	Fトレンチ	土壘	須恵器环蓋	140	-	-		1/4	-	2	
2-21	117	231	Cトレンチ		須恵器环蓋	-	-	-	アマミ 23-13	-	-	2	
2-22	362	233	Fトレンチ	土壘	須恵器环蓋	-	-	-	アマミ 32-11	-	-	1	
2-23	327	266	Fトレンチ	土壘	須恵器环身	-	-	72		-	1/8	1	
2-24	336	298	Fトレンチ	七号	須恵器环身	104	37	-		1/1	-	7	
2-25	263-233	236	Fトレンチ	土壘	須恵器环身	135	42	-		1/4	1/2	4	
2-26	241-267	263	Fトレンチ	土壘	須恵器环身	132	37	-		1/4	-	2	
2-27	376	291	Fトレンチ	土壘	須恵器环身	106	-	-		1/11	-	1	
2-28	237	262	Fトレンチ	土壘	須恵器环身	130	-	-		1/8	-	1	
2-29	296	237	Fトレンチ	土壘	須恵器环身	140	-	-		1/5	-	1	
2-30	364-361	238	Fトレンチ	土壘	須恵器蓋	166	25	-		1/25	-	2	
2-31	110	227	Cトレンチ		須恵器蓋	-	-	125	4	-	1/1	1	
2-32	284-282	198	Fトレンチ		須恵器蓋	-	-	180	9	-	1/2	3	
2-33	288	260	Fトレンチ		須恵器蓋	-	-	128	-	-	1/1	1	
2-34	74	259	Aトレンチ		須恵器小型蓋	-	-	53	体部幅 78	-	1/1	4	
2-35	285	239	Fトレンチ		灰釉鏡	150	-	-		1/4	-	1	
2-36	339	240	Fトレンチ		灰釉鏡	-	-	60	9	-	1/4	1	
2-37	286	268	Fトレンチ		山茶碗	-	-	68	5	-	2/5	東進系	2
2-38	124	286	Cトレンチ		山茶碗	-	-	70	7	-	1/3	東進系	1
2-39	92	289	Cトレンチ		山茶碗	-	-	61	5	-	1/4	東進系	1
2-40	135	287	Aトレンチ		山茶碗	-	-	62	5	-	1/4	東進系	1
2-41	82	241	Fトレンチ		山茶碗	-	-	67	5	-	2/3	東進系	1
2-42	313	288	Jトレンチ		小瓶	-	-	53	5	-	1/4	東進系	1
2-43	360	264	Fトレンチ	土壘	小瓶	-	-	57	5	-	1/1	東進系	1
2-44	319	265	Fトレンチ	土壘	小瓶	-	-	44	4	-	1/1	東進系	1
2-45	62	296	Cトレンチ		小瓶	-	-	49	-	-	1/2	東進系	1
2-46	44	61	Cトレンチ		天日茶碗	小片	-	-		-	-	御内・美濃	1 古瀬戸 後丁～三
2-47	52	62	Cトレンチ		天日茶碗	小片	-	-		-	-	御内・美濃	1 古瀬戸 後丁～四古

括弧番号	登録番号	実測番号	出土地点 グリット・ トレーナ名	器種 遺物名	法 量(mm)					残存率		產地	破片数	備考
					口径	器高	底部	高台高		LJ	底			
2-48	77	63	Cトレンチ	天日茶碗	小片	-	-			-	-	瀬戸・美濃	1	古瀬戸 後期
2-49	154	64	Fトレンチ	天日茶碗	小片	-	-			-	-	瀬戸・美濃	1	古瀬戸 後期
2-50	190	267	Fトレンチ	土器	天日茶碗	105	-	-		1/4	-	瀬戸・美濃	3	人1
2-51	167	65	Fトレンチ	天日茶碗	小片	-	-			-	-	瀬戸・美濃	1	大1~2
2-52	39	77	Bトレンチ	平碗	-	-	64	3		-	1/5	瀬戸・美濃	1	古瀬戸 後古
2-53	37	83	Aトレンチ	平碗	小片	-	-			-	-	瀬戸・美濃	1	古瀬戸 後古
2-54	39	75	Bトレンチ	鐵輪碗	小片	-	-			-	-	瀬戸・長瀬	1	17C
2-55	203	85	Hトレンチ	灰釉小皿	小片	-	-			-	-	瀬戸・美濃	1	古瀬戸 後Ⅲ
2-56	44	78	Cトレンチ	綠釉小皿	小片	-	-			-	-	瀬戸・美濃	1	古瀬戸 後Ⅲ
2-57	51	79	Aトレンチ	折縁深皿	小片	-	-			-	-	瀬戸・美濃	1	古瀬戸 中期
2-58	128	84	Fトレンチ	折縁深皿	小片	-	-			-	-	瀬戸・美濃	1	古瀬戸 中期
2-59	214	212	Fトレンチ	御付大皿	348	-	-			1/20	-	瀬戸・美濃	2	古瀬戸 後古新
2-60	343	72	Cトレンチ	盤類	小片	-	-			-	-	瀬戸・美濃	1	古瀬戸 後Ⅰ~Ⅱ
2-61	199	71	Hトレンチ	盤類	小片	-	-			-	-	瀬戸・美濃	1	古瀬戸 後Ⅲ~Ⅳ
2-62	52	73	Cトレンチ	盤類	小片	-	-			-	-	瀬戸・美濃	1	古瀬戸 後期
2-63	52	82	Cトレンチ	盤類	小片	-	-			-	-	瀬戸・美濃	1	古瀬戸 後Ⅲ
2-64	337	86	Hトレンチ	鉢皿	小片	-	-			-	-	瀬戸・美濃	1	古瀬戸 後Ⅲ
2-65	52	89	Cトレンチ	擂鉢	小片	-	-			-	-	瀬戸・美濃	1	古瀬戸 後古新
2-66	69	98	Dトレンチ	擂鉢	-	-	小片			-	-	瀬戸・美濃	1	古瀬戸 後Ⅳ
2-67	199	91	Hトレンチ	擂鉢	小片	-	-			-	-	瀬戸・美濃	1	古瀬戸 後Ⅳ~大1
2-68	149	92	Fトレンチ	擂鉢	小片	-	-			-	-	瀬戸・美濃	1	古瀬戸 後期~大室
2-69	44	88	Cトレンチ	擂鉢	小片	-	-			-	-	瀬戸・美濃	1	大室
2-70	147	90	Fトレンチ	擂鉢	-	-	128			-	1/4	瀬戸・美濃	1	17C
2-71	121	43	Cトレンチ	小壺	-	-	44			-	1/1	瀬戸・美濃	1	大1
2-72	52	80	Cトレンチ	花瓶	小片	-	-			-	-	瀬戸・美濃	1	古瀬戸 後期
2-73	51	81	Aトレンチ	人子	50	-	-			1/5	-	瀬戸・美濃	1	古瀬戸 中Ⅰ~Ⅱ
2-74	39	74	Bトレンチ	灰釉不明	小片	-	-			-	-	瀬戸・美濃	3	古瀬戸 後期
2-75	37	101	Aトレンチ	擂鉢	小片	-	-			-	-	志戸島	1	17C前
2-76	277	49	Fトレンチ	鐵輪皿	小片	-	-			-	-	初山	1	大3後半
2-77	93	194	Cトレンチ	甕	小片	-	-			-	-	常滑	1	
2-78	-	44		甕	小片	-	-			-	-	常滑	2	
2-79	52	110	Cトレンチ	青磁鶴花文碗	小片	-	-			-	-	中国	2	A2~A3頃
2-80	128	111	Gトレンチ	青磁暗反碗	小片	-	-			-	-	中国	1	15C前半
2-81	42	109	Bトレンチ	青磁碗	小片	-	-			-	-	中国	1	
2-82	203	112	Hトレンチ	白磁口禿皿	小片	-	-			-	-	中国	1	IX頃
2-83	280	113	Hトレンチ	白磁皿	-	-	42	4		-	1/1	中国	1	15C後半

### 第3節 第3次調査

**調査の目的** 圃場整備事業計画に基づく道路敷内の遺構状況と古川神社との間に広がる沖積地の土層観察。

**調査期間** 平成2年6月4日～7月20日

**調査面積** 220m<sup>2</sup>

**調査経過** 6月4日 第1トレンチ掘削

11日 西側土壠掘削

14日 田辺昭三氏現地指導

18日 東側土壠掘削

27日 第1トレンチ完掘、  
第2トレンチ掘削

28日 西側土壠掘削

29日 沖積地掘削

7月6日 加藤芳朗静岡大学名誉  
教授の地質調査

7日 第2トレンチ完掘

20日 調査区埋め戻し完了

**調査の概要** (第15図～第19図)

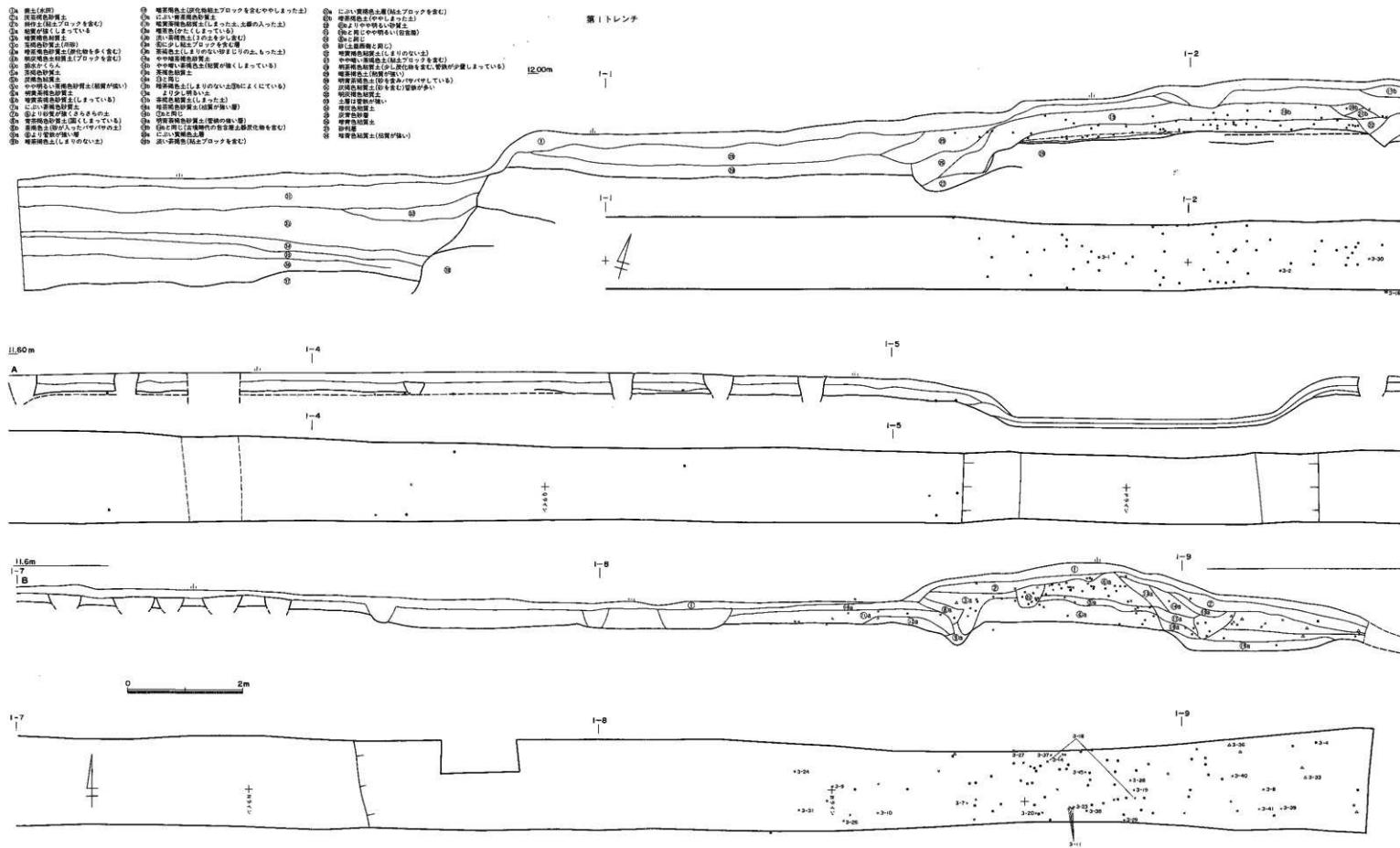
第2次調査では西と北側土壠と遺跡内の水田

部分の基礎的な資料を得た。この資料をもとに遺跡内に2本のトレンチを設定し遺跡内の東西方向の土層状態、古川神社と西側土壠との間に広がる沖積地の性格をさらに鮮明にすることに努めた。東西の土層状態の把握にあたっては、第1トレンチによって東と西側の土壠の状態や土壠外側に至る広範囲とした。古川神社境内東に広がる沖積地の調査は第2トレンチによって両岸を結ぶように設置した。各トレンチともに前回までの調査区と関連性をもたせて調査区の設置を試みた。また基本的に保存することが目的で、遺構は確認に留め削平する部分は最小限の範囲に努めた。計測にあたっては、20分の1を基本とし、遺構等は写真等の記録を作成した。土壤調査にあたり、静岡大学名誉教授加藤芳朗氏に現地調査をお願いした。その結果については加藤氏の論考を参照して戴きたい。

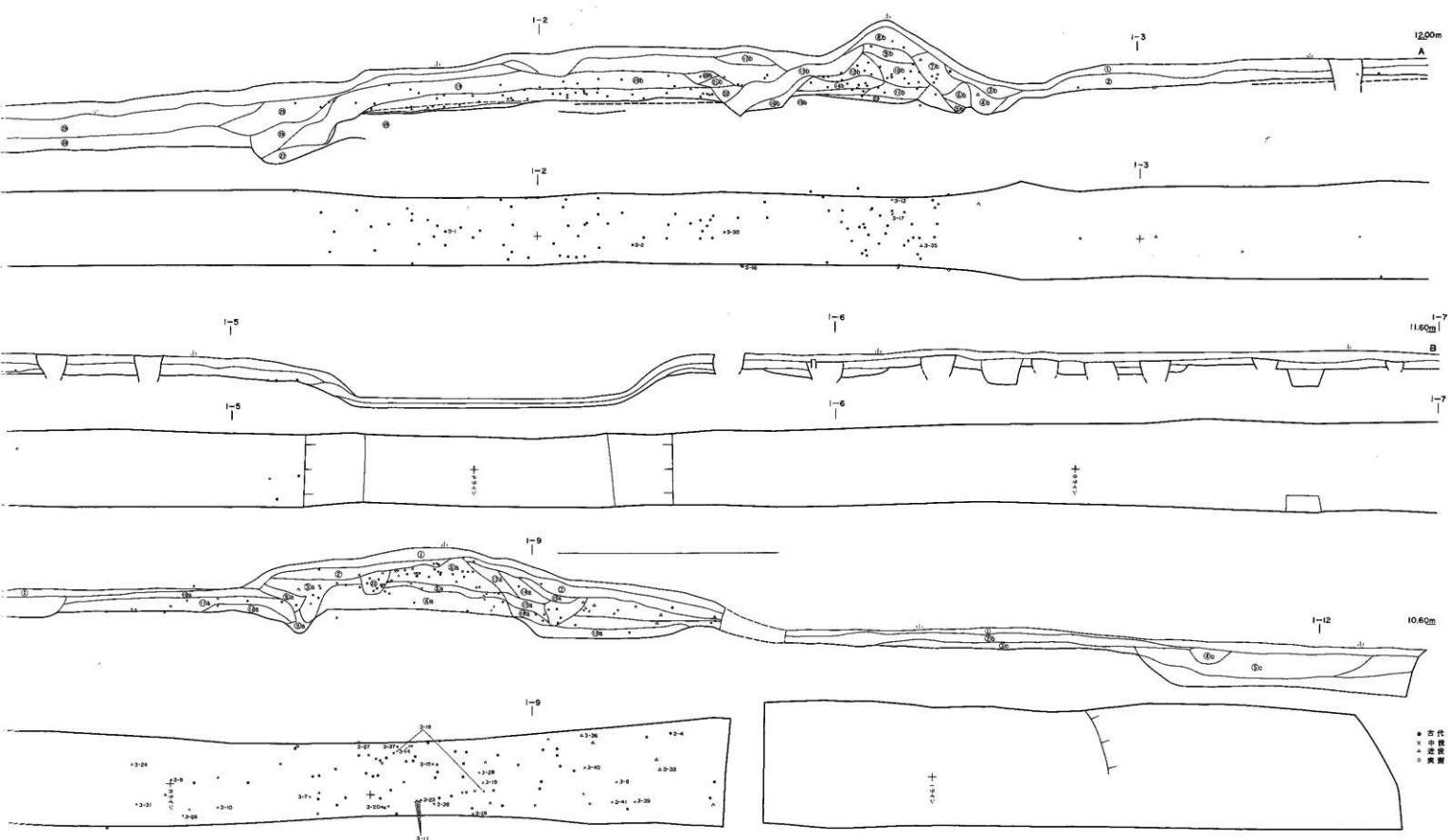
**第1トレンチ** (第16図) 第2次調査のAトレンチの約4m北側に平行する形で第1トレンチを設定した。第1トレンチは西側が沖積地中央付近まで、東側は東側土壠よりさらに外側の畑部分、全長105mで幅は1.5m～2mの規模である。土層は東と西に築かれた土壠の内側に広がる畑部分、約57m区間は茶園の耕作による擾乱が著しく、上層の遺跡の保存状態は良くない。また、基盤層の4層は部分的に掘削を受けているもの標高10.8m～11mとなっている。遺物は擾乱によって表土に混じって土器が出土しているが、土壠内に比べて極端に少なくなっている。西土壠は、西側上層では耕作による擾乱により削平され残存状態は良くない。残存する土壠の標高は11.65mで茶畠より40cm高くなっている。土壠の断面観察で基盤層より1.2m盛土し、土壠は構築されており構成する土壤が粘質性の強い土となっている。遺物は、特定の範囲にまとまることなく各層ごとに認められる。土器は、古代の須恵器・土師器が主体で山茶碗12・17など中世土器が10b層より上層から出土している。また、近世土器の美濃片口鉢35をはじめ東側の上層で確認され、土壠が後世補修されることを示唆している。盛土は土壠中



第15図 第3次調査位置図



第16図 第3次調査第1トレンチ平面図 - 31・32 -



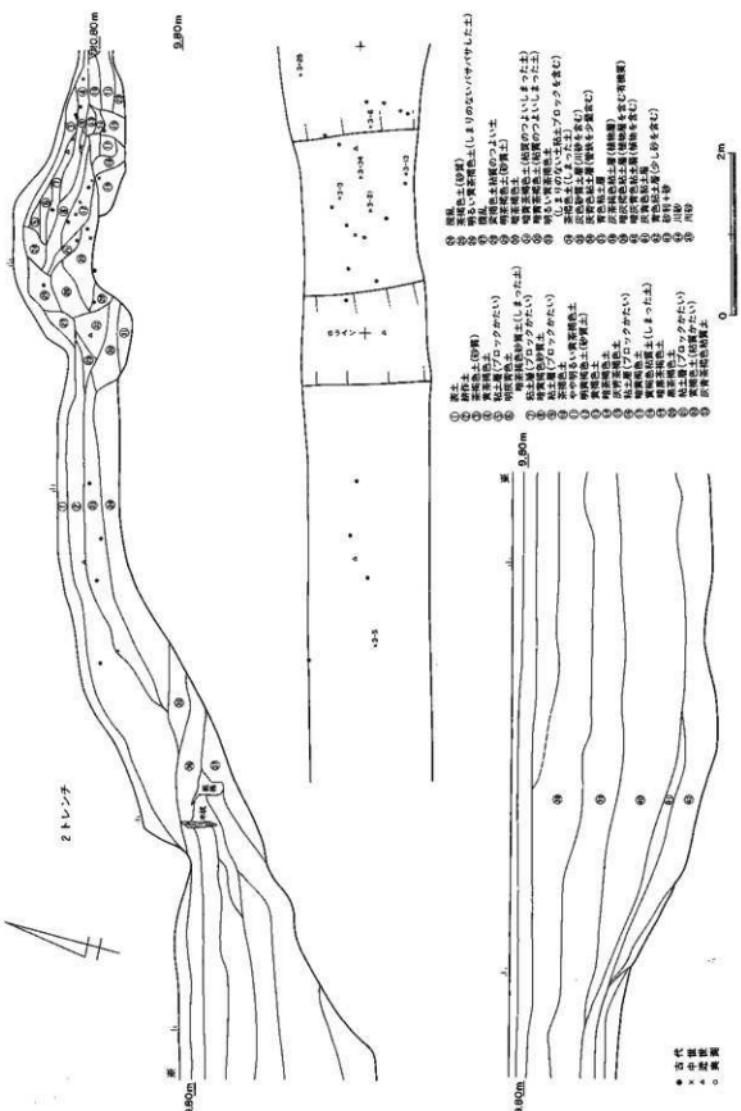
第16図 第3次調査第1トレンチ平面図 - 31・32 -

央やや西側を境に交互に一定の厚さで平らに盛土し、硬め積み上げている版築状態が確認される。このような特徴は、当然隣接するAトレンチの土壘調査でも同様の成果を得ており再確認する結果となった。西側土壘の外側の平坦な畠約5mの範囲では、19b層の上面が赤く焼け、住居跡の貼床のように硬く絞まつておらず、この層の覆土には古代の土器がまとまって出土している。この平坦な地形が西端で急激に落ち込んでいる。落ち込みは幅2mで表面より深さ1.3mを測り、西に向かって堆積している。この落ち込みよりさらに西へ6mの地点で沖積地の落ち込みを確認できた。沖積地は28層地点より削平が始まり緩やかな傾斜をなす。沖積地は水田として耕作され平らとなっている。水田面より2m下で砂利層となり人力による調査での確認はここで留めた。確認した土層は、ほぼ一定の厚さで堆積しており変化の少ない状態である。また、土壤は粘土層で混じりのない土となっていた。遺物は、奈良時代の須恵器と土師器の破片が22点出土している。東側の土壘は、標高12mで西側畠より70cm高くなっている。土壘は後世の削平によって平らとなり、断面形が逆台形をしている。7層上面が基盤面で幅2.6mを測り、この上に約1m盛土して土壘は構築されている。土壘の土壤は粘土のブロックが混ざる砂質土となっている。土層観察では、基盤面より上へ4層へ6層の三層から構成され、いずれも平らに盛土され、西側土壘と比べあまり堅固な作りとはいえない。遺物は、上層の6層からまとまって土器が出土している。土器は古墳時代から近世のものまでみられた。計測できた土器は、東土壘で山茶碗7・11・14・15・18・19・20・23、小皿27~29、古瀬戸後期の志戸呂産播鉢37、16世紀前半の常滑片口鉢38、12世紀から16世紀にかけての壺39~41となっている。土器では常滑産の山茶碗、片口鉢、壺と当生産地の製品を含んだ土壘であった。東側土壘外側の東地点の調査区では、特に遺構等は検出されなかった。出土遺物は近世陶器が数点出土した以外はなかった。

第1トレンチより出土した遺物は1016点で、そのほとんどが土壘にまとまっている。中世の土器は78点となっており、その内山茶碗類が60点となっている。中世の土器は東側土壘に多く西側土壘では古代の土器が主体となるなど盛土された土の特徴がそのまま反映されたものであろう。

第2トレンチ（第17図） 第1トレンチより38m南地点に東西方向に20m×2mの規模でトレンチを設定した。トレンチの東端は西側土壘とし、水田面を横断し古川神社境内に延びるものである。西側土壘は第1トレンチ、Aトレンチの断面観察での所見とは構築方法に新たな見解は見当たらない。土壘の標高は12mと残りが良く、断面はカマボコ状を呈する。盛土の土壤は、粘土ブロックを混ぜ硬く絞まつた砂質土となっており、土器を少量含んでいる。土器は羽釜3、山茶碗13・21、古瀬戸後期の折縁皿34が出土している。西側土壘外側は緩やかに西に向かって傾斜し、4m付近で沖積地の堆積層と混ざる。34層は土壘の外側の掘り込まれた溝状遺構（堀）より8m西地点で高低差3mを測り斜めにまっすぐ延びている。水田部分と畠の境には木杭が打たれ土溜めを行っている状態が水田東端で確認されており、現在の地境は土の流出より西に移行している。水田部分の中央付近では、表土より2.4m下で砂利層となっている。この砂利層から表土の間の堆積土は概ね六層に区分することができる、上層の耕作土+表土を除くと38層・39層・40層はいずれも植物層が厚く堆積した安定した堆積状況を示している。最下層の42層には小粒な砂を含む粘土層となっている。土層観察では西側の古川神社の落ち込みがはっきりしないものの流路幅は上場で約11mであったと考えられる。土層中遺物は特に認められず砂利層に土師器の破片が数点出土している。

今回の調査では、東西方向にトレンチを設定し東と西側の土壘の観察を行った。さらに沖積地の水田部分の性格について検討をはかった。土壘については前回までの調査成果に新たな所見はなかったが、第2トレンチの西側の土壘から鎌倉期の土器が良好な状態で出土していることは土壘の築造年代を知る新たな資料となるものであった。さらに第1トレンチによる東側土壘が再構築の可能性を窺わ

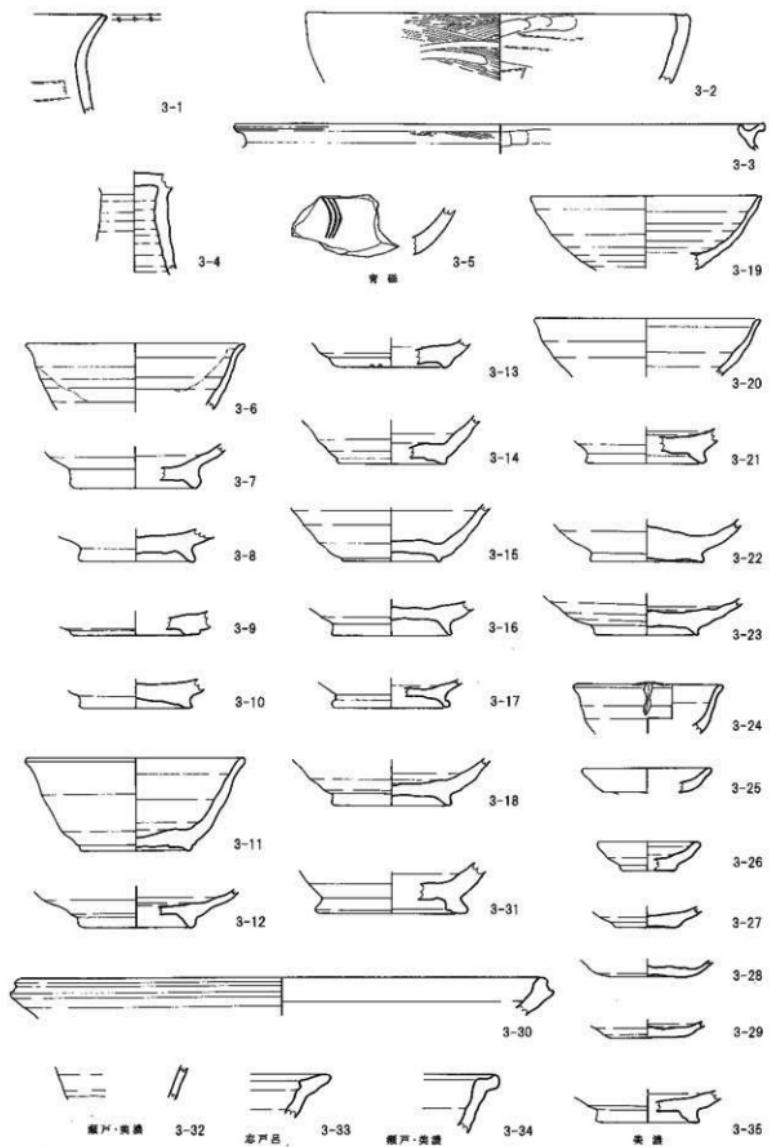


第17図 第3次調査第2トレンチ平面図

せる後世の遺物を含んでおり、土壘が補修され使用されたことが明らかとなった。沖積地の水田部分は、第2トレンチでは土層と観察した加藤教授の所見で古上小笠川の流路跡でなく人工作用の介入の可能性を指摘している。また第1トレンチでの落ち込み状態や出土遺物などを考慮すれば、やはりこの水田部分は古代以降に掘り込まれた可能性が高く、大屋敷遺跡の成立と深く関わるものと考えられる。特に方形を巡らす土壘の構築など城館遺跡としての性格がより強い場所であり、この人工的な沖積地が堀とするならば城館の外堀としての役割を担う重要な地点であったと推測される。今後、この沖積地の構造が明らかになることが、この遺跡の重要性が高まるものとなろう。

第6表 第3次調査出土土器観察表

出取番号	登録番号	実測番号	出土地点 グリットトレンチ名	遺構名	器種	法量(cm)				残存率	産地	破片数	備考	
						口径	器底	底部	高台高					
3-1	521	168	1トレンチ	弥生甕	小片	-	-			-	-	1		
3-2	503	2	1トレンチ	土器容器	239	-	-			1/6	-	2		
3-3	667	9	2トレンチ	土器	羽茎	300	-	-		1/12	-	1		
3-4	572	299	1トレンチ	須恵器高环	-	-	-			頭部 40	-	-	1	
3-5	686	214	2トレンチ	青磁斜花文鏡	小片	-	-			-	-	中國	A2類	
3-6	678	269	2トレンチ	土器	灰陶碗	132	-	-		1/14		1	053	
3-7	619	279	1トレンチ	東土器	山茶碗	-	-	80	5		-	1/5	瀬戸系	
3-8	569	278	1トレンチ		山茶碗	-	-	71	5		-	3/4	瀬戸系	
3-9	586	6	1トレンチ		山茶碗	-	-	78	3		-	1/8	瀬戸系	
3-10	577	281	1トレンチ		山茶碗	-	-	69	5		-	1/3	瀬戸系	
3-11	555-599	261	1トレンチ	東土器	山茶碗	134	57	65	3		1/20	1/1	常滑系	9 5型式
3-12	427	121	1トレンチ	西土器	山茶碗	-	-	70	6		-	1/8	常滑系	1
3-13	664	8	2トレンチ	土器	山茶碗	-	-	72	3		-	1/6	常滑系	1
3-14	553	274	1トレンチ	東土器	山茶碗	-	-	67	4		-	2/5	常滑系	1 6a型式
3-15	562	277	1トレンチ	東土器	山茶碗	-	-	59	5		-	2/3	常滑系	1 6a型式
3-16	536	235	1トレンチ		山茶碗	-	-	74	10		-	1/4	東道系	1
3-17	421	290	1トレンチ	西土器	山茶碗	-	-	72	6		-	1/4	東道系	1
3-18	551-629	276	1トレンチ	東土器	山茶碗	-	-	73	6		-	1/2	東道系	2
3-19	628	285	1トレンチ	東土器	山茶碗	142	-	-			1/7	-	東道系	1
3-20	547	284	1トレンチ	東土器	山茶碗	138	-	-			1/9	-	東道系	1
3-21	669	11	2トレンチ	土器	山茶碗	-	-	73	7		-	1/4	東道系	1

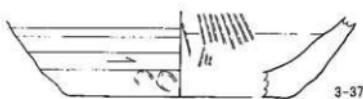


第18図 第3次調査出土遺物実測図 1

図版番号	登録番号	実測番号	出土地点		器種	法 葉 (mm)					残存率	产地	破片数	備考	
			グリット・ トレーナー名	遺構名		口径	器高	底部	高台高	口					
3-22	689	280	2H42		山茶碗	-	-	70	5	-	1/1	東遼系	1		
3-23	690	275	1H42	東土器	山茶碗	-	-	64	5	-	1/1	東遼系	1		
3-24	585	271	1H42		輪花小瓶	92	-	-	-	-	1/7	-	東遼系	1	
3-25	657	270	2H42	土器	小皿	80	-	-	-	-	1/8	-	東遼系	1	
3-26	575	5	1H42		小皿	63	15	34	-	-	1/8	1/8	東遼系	1	
3-27	645	282	1H42		小皿	-	-	38	-	-	1/2	-	東遼系	1	
3-28	605	283	1H42	東土器	小皿	-	-	43	-	-	1/2	-	東遼系	1	
3-29	565	4	1H42	東土器	小皿	-	-	46	-	-	1/3	-	東遼系	1	
3-30	450	1	1H42	東土器	片口鉢 I 種	332	-	-	-	-	1/16	-	常滑系	1	6a型式
3-31	584	272	1H42		盤	-	-	93	9	-	1/4	-	東遼系	1	山茶碗 1周
3-32	402	66	1H42		天目茶碗	小片	-	-	-	-	-	-	瀬戸・美濃	1	古瀬戸 後期
3-33	571	195	1H42		擂鉢	小片	-	-	-	-	-	-	志戸呂	1	17C
3-34	666	273	2H42	土器	折縁深皿	332	-	-	-	-	1/35	-	瀬戸・美濃	1	古瀬戸 後期 N占
3-35	425	210	1H42	西土器	片口鉢	-	-	64	7	-	2/5	-	美濃	1	18C
3-36	567	45	1H42	東土器	壺	136	-	-	-	-	1/12	-	志戸呂	1	17C
3-37	552	102	1H42	東土器	擂鉢	-	-	140	-	-	1/12	-	志戸呂	1	古瀬戸 後期
3-38	556	3	1H42	東土器	片口鉢 II 種	368	-	-	-	-	1/8	-	常滑	1	11型式
3-39	570	197	1H42	東土器	壺	-	-	149	-	-	1/9	-	常滑	1	15~16C
3-40	610	7	1H42	東土器	壺	-	-	-	-	-	-	-	常滑	1	13C後~13C
3-41	611	10	1H42	東土器	壺	-	-	-	-	-	-	-	常滑	1	



3-36



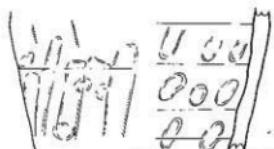
3-37



3-38



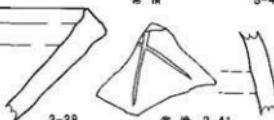
3-39



3-40



常滑



常滑 3-41

第19図 第3次調査出土遺物実測図2

## 菊川町高田大屋敷遺跡の「堀」状凹地に関する地学的検討

加藤芳朗（静岡大学名誉教授）

### 1. まえがき

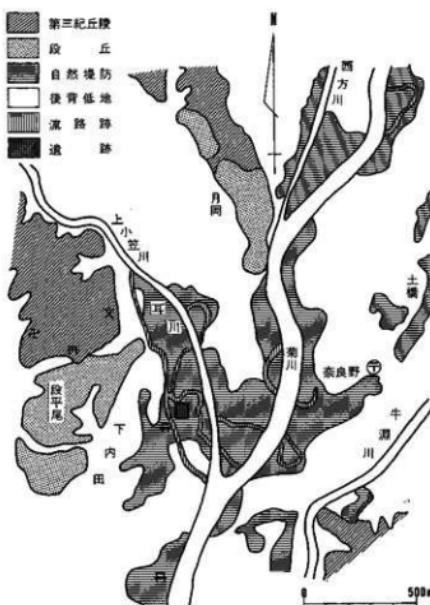
この凹地は方形をなす高田大屋敷遺跡と古川神社との間を南北に細長く延びる。両側との高度差は0.7~1.6mほどである。現在は水田であるが、その表面の海拔高は北端で10.0m、南端で9.85mとほとんど差がないといってよいほど平坦である。以下の説明では、この凹地を単に「堀」と呼ぶこととする。また、発掘担当者（塚本氏）を「担当者」、同氏作製の土層断面図を「断面図」と称する。

### 2. 遺跡周辺の地学的環境

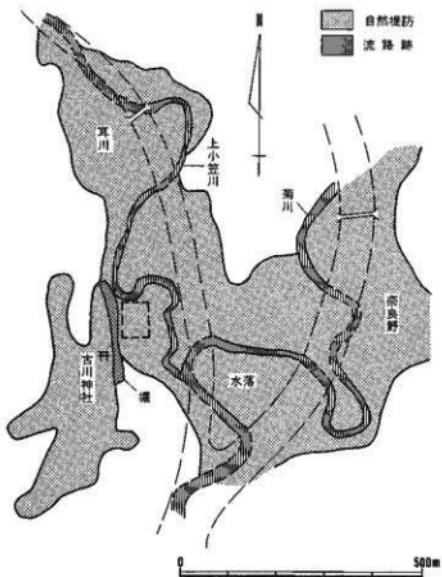
この遺跡は菊川の下流平野（東海道線以南）の上半部に属し、菊川と上小笠川の合流点付近の自然堤防に立地する（図20）。

- (1) 菊川 掛川市北東端栗ヶ岳に源を発し、新生代第三紀中新世の倉真層群、同漸新世の瀬戸川層群、同鮮新世の掛川層群からなる丘陵を順次流下する。菊川の町並を通りすぎると、改修で緩やかな曲線を描くようになった川筋の両側に、かつての蛇行流路の跡が散見される。この蛇行流路に付随して自然堤防が発達する。
- (2) 上小笠川 小笠山北東麓に発し、新生代第四紀更新世小笠山疊層（小笠累層）掛川層群からなる丘陵を貫通し、本遺跡の東側を経て菊川に注ぐ。蛇行と自然堤防は菊川との合流点付近にしか見られない。菊川の自然堤防に行く手を阻まれて流れが停滞した結果であろう。
- (3) 西方川 源流は本町北西部の丘陵地帯（中新世満水層、掛川層群よりなる）である。上記合流点のさらに上流で菊川と合流する。
- (4) 遺跡周囲の状況 改修前の蛇行流路を復元したのが図21である。菊川は、奈良野で著しく蛇行した後、本遺跡に向かって西進し、そこから急に南東方向に流れを転ずる。この転換点を過ぎた所で上小笠川の蛇行流路と合流する。

上小笠川は耳川橋付近で蛇行しはじめ、遺跡方向に南西の流れをとり、遺跡北西縁に達すると、その外周を巡るように屈曲しながら上記の合流点に向かう。これらの蛇行は明治22年の静岡県編「静岡県管内全国」



第20図 高田大屋敷遺跡付近の地形分類図  
(2.5万分の1 土地条件図「掛川」により作図)



第21図 菊川と上小笠川の蛇行道路復元図

(25万分の1 土地条件図「番川」及び静岡県管内全圖(明治22年刊)による)

ら弥生土器片が、「91-T」の西側自然堤防のシルト層下部から弥生～古墳の遺物が出土し、自然堤防上の土壘の年代は鎌倉以後のことである。

(2) '91-1-T 上と同様に、自然堤防の土層を切って堀の土層が堆積する。これが植物層、植物片を含む粘土層からなることも変わらない。が、それらの下部に礫層（礫層2と呼ぶ）が存在することが違う。この層の下限は未確認であるが、断面図によれば、海拔高は7.85m以下になる見込みである。ここから摩滅した奈良・平安時代の土器が出たという。

(3) '91-6-1-T これも同様であるが、礫層2（厚さ最大0.8m）の出現が浅くなり、かつ、その下位に植物層のあることが確認された。従って、静水状態にあった堀の水域に突然砂礫の流入があり、堀底を削って、いわば、第2の堀を作ったことになる。しかし、その後も植物層、粘土層の堆積が続くので第2の堀も静水状態を保ったと考えられる。このトレンチの礫層2の下底は海拔高が7.9mで'91-Tより高いことが注目される（下述）。[この項のみ断面図によって記した]

(4) '91-6-2-T このトレンチと隣接の6-1-Tにかけて、第2の堀の土層を切って深さ約1.3m、幅約15m（断面図による）の、いわば第3の堀が検出された。その覆土の下部に厚さ最大1.1mの礫層（礫層3と呼ぶ）がある。この上部はトレンチ南壁では礫層だが、わずか1m隔てた北壁では細礫、砂、粘土の互層に変化する。これらには木の葉、枝が含まれ、その上位にも植物層があるので、第2の堀と同様に、第3の堀も、一時は砂礫の流入があったが、依然として静水状態は維持されたとみてよからう。

に記されているので河川改修はそれ以後ということになる。また、耳川橋のやや上流から、遺跡西側の自然堤防の背後を南進する流れがあったようである。

### 3. 発掘トレンチでの観察

堀を横断するトレンチ（図22）での観察結果は以下のとくである。

(1) '90-2T、'91-9T 堀とその両側の自然堤防を貫く断面である。自然堤防は黄褐色のシルトないし砂質シルト、その下位の粘土層、礫層（礫層1と呼ぶ）からなる。両自然堤防に共通の粘土層が現れるのでこれらは一連のものとみなされる。これらを大きく削り込んで堀の土層（青色を帯びる粘土層と植物層の互層）が重なる。植物層は広葉樹の木の葉、枝の密集層である。粘土層にもこれらが含まれる。このことから、堀の土層は水の流れがほとんどない（静水）水域で堆積したと推定される。その岸辺には広葉樹がうっとうと繁がっていたであろう。なお、担当者によると、「90-2T」の礫層1から弥生土器片が、「91-9T」の西側自然堤防のシルト層下部から弥生～古墳の遺物が出土し、自然堤防上の土壘の年代は鎌倉以後のことである。

(2) '91-6-1-T 上と同様に、自然堤防の土層を切って堀の土層が堆積する。これが植物層、植物片を含む粘土層からなることも変わらない。が、それらの下部に礫層（礫層2と呼ぶ）が存在することが違う。この層の下限は未確認であるが、断面図によれば、海拔高は7.85m以下になる見込みである。ここから摩滅した奈良・平安時代の土器が出たという。

(3) '91-6-1-T これも同様であるが、礫層2（厚さ最大0.8m）の出現が浅くなり、かつ、その下位に植物層のあることが確認された。従って、静水状態にあった堀の水域に突然砂礫の流入があり、堀底を削って、いわば、第2の堀を作ったことになる。しかし、その後も植物層、粘土層の堆積が続くので第2の堀も静水状態を保ったと考えられる。このトレンチの礫層2の下底は海拔高が7.9mで'91-Tより高いことが注目される（下述）。[この項のみ断面図によって記した]

(4) '91-6-2-T このトレンチと隣接の6-1-Tにかけて、第2の堀の土層を切って深さ約1.3m、幅約15m（断面図による）の、いわば第3の堀が検出された。その覆土の下部に厚さ最大1.1mの礫層（礫層3と呼ぶ）がある。この上部はトレンチ南壁では礫層だが、わずか1m隔てた北壁では細礫、砂、粘土の互層に変化する。これらには木の葉、枝が含まれ、その上位にも植物層があるので、第2の堀と同様に、第3の堀も、一時は砂礫の流入があったが、依然として静水状態は維持されたとみてよからう。

### 3. トレンチ内の礫層の性格

- (1) 岩質組成 級層 1～3 の礫および、対照として菊川、上小笠川、西方川の川床の礫を採取し、径 16～32mm の部分の岩質を調べた（表 1）。これによるとトレンチ礫は、互いに類似し菊川礫、上小笠川礫の中間的特徴を示す、つまり亜円～亜角礫の砂岩が多い（菊川の特徴）、円礫の砂岩、礫質の砂岩、火成岩を含む（上小笠川の特徴）ので、両川の礫の混合したものと推定される。トレンチ礫 3 点の平均組成は菊川、上小笠川礫 2：1 の混合割合の組成と似ている。従って、両川の流域規模に相応して、優勢な菊川礫の副次的な上小笠川礫が混じったと解釈される。菊川礫は主に上流の倉真層群、瀬戸川層群から、上小笠川礫は小笠山礫層（古大井川の運搬物で、円礫が優勢）から供給された。流域の小さい後者に円礫の砂岩が多いのはこのためである。西方川の礫は満水層、掛川層群の軟質岩に由来するので、上と全く違った組成である。
- (2) 自然堤防下の礫層 1 ('91-1T) これが上記の混合組成をもつことから、遺跡付近の自然堤防が菊川、上小笠川の合成であることがより確からしくなり、この辺りでかつて（弥生時代？）両川が盛んに氾濫したと想定される。
- (3) 堀の中の礫層 2、3 ('91-1T, '91-6-2T) これらが最北の 90-2T の堀の土層ないこと、礫層 2 の出る位置が北の '91-1T よりも南の '91-6-1T の方が浅いこと、「91-6-2T の礫層 3 は南壁の方が来た壁より粗粒なこと（既述）に注目すると、礫が南から撤入された可能性が浮かび上がってくる。礫の岩質組成から、その供給源は当然、上小笠川を合流下ばかりの菊川に求められるであろう。

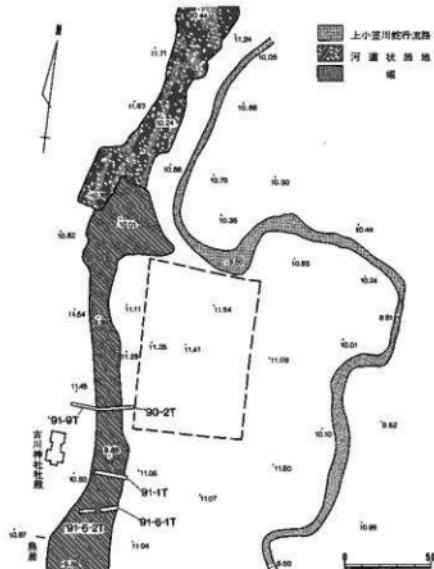
### 4. 堀の性格

- (1) 地表勾配 図 3 によると、堀（斜線部）の中の高低差は 15cm（既述）だが、それに接続すると思われる河道状凹地（斜め破線部）では堀の半分の距離で 30cm の高低差、つまり 4 倍の勾配を有する。また、上小笠川の蛇行旧流路（縦密線部）の海拔高度は図の上端で 10.5m、下端で 8.50m（距離は堀の延長の約 2 倍）であるから、平均勾配は堀の 5 倍強である。堀の地表がいかに平坦かが判る。これは、上述のように、堀が静水域（水溜まり）であったことを反映する。
- (2) 堀底の勾配 断面図によると、堀底の海拔高が、北側の 90-2T で 7.5m などに対し、南側の '91-1T, '91-6-1T では 7.85～7.9m と、南に行くにつれて高まる。もっとも南側の両トレンチとも堀底が確認されていないので、これよりやや低めになるかもしれないが、北側のそれより低くなるとは考えにくい。前項の堀の北側の河道状凹地（斜め破線部）が、堀の部分に伸びていたとすると、当然、堀底は南下がりになるはずである。
- (3) 堀の幅 図 22 の上小笠川の蛇行旧流路（縦密線部）の幅は堀の半分である。従って、これが堀の伸びていたとは思われない。上記の河道状凹地の幅は堀のそれと似ているので、その可能性がありそうだが、前項の事実や礫の岩質組成（菊川礫優勢）からみて、これも難点がある。
- (4) まとめ 以上を総合的に判断すると、人工掘削によって堀が出来たと考えたくなる。かりにそうでなく以前の川を踏襲したとしてもかなり改変して、静水域（水溜まり）に作り上げたものと判断される。南からの礫の流入が間違いなければ、この水溜まりは南の菊川に向かって開いていたことになり、堀が船着き場として利用された可能性が出てくる。時々、礫の流入を見たが各期の堀が静水（水溜まり）状態を保った背後には人為的管理があったものと思われる。堀の開設の時期は、堀に切られる自然堤防のシルト層の時代（弥生～古墳）以後、また堀の礫層 2 の中に含まれる土器の年代（奈良・平安）以前ということになろう。以後、第 3 の堀（江戸時代）まで存続した。

第7表 碎(16~32mm)の岩質組成

(個体数 %)

砂の岩質	川床堆			トレンチ層			混合川床堆	トレンチ堆 平均
	衛川	上小笠川	西方川	堆層1	堆層2	堆層3		
礫質砂岩	1.0	4.0	-	5.3	29	3.6	20	3.9
砂岩(内輪)	6.2	27.7	6.8	12.3	11.5	12.9	13.4	12.3
砂岩(東角~中内輪)	54.6	8.9	2.7	44.6	33.1	32.1	39.4	36.5
シルト岩	15.5	19.8	31.5	10.5	28.1	19.3	16.9	19.3
泥岩(頁岩)	3.1	3.0	46.6	1.1	0.7	0.7	3.1	0.8
チャート	9.3	7.9	-	15.8	13.7	12.1	8.8	13.9
珪質頁岩	3.1	9.9	8.2	5.3	3.6	7.9	5.4	5.6
珪質砂岩	6.2	13.9	-	4.2	3.6	9.3	8.8	5.7
火成岩	-	4.0	-	1.1	2.9	2.1	1.3	2.0
その他	1.0	1.0	4.1	-	-	-	1.0	-
主な礫の供給地質他	倉真層	小笠山巖層	掛川・調水層	'90-2T	'91-1T	'91-6-2T	葛川:上小笠川=2:1	

第22図 「堤」及び周辺の海拔高度(m) トレンチの位置  
(中遠農林事務所作成の1:1000「現況平面図」による)

#### 第4節 第4次調査

調査の目的 東側土塁より外側東地区の遺跡範囲の把握  
調査期間 平成2年10月29日・30日  
調査面積 113m<sup>2</sup>  
調査経過 10月29日 A・C～Iトレント掘削し完掘  
10月30日 B・Jトレント掘削し完掘

#### 調査の概要（第23図・第24図）

高田大屋敷遺跡の範囲は、西側が水田部分が堀として確認され、古川神社境内付近となつたが、東側の土塁の外側の範囲については第3次の第1トレントで一部掘削を行った程度で明らかとなつていなかったため工事計画の線引きの関わりで緊急な調査を実施することになった。調査は重機を用いて旧流路範囲の遺構の確認に努めた。調査は工事との関係で緊急な対応が必要であったため地形を考慮しながら任意にトレントを設定して行った。トレントは調査区の設置に合わせてアルファベットで記述した。記録にあたって、限られた時間の中で平面図は略図によって対応した。写真は35mm版カメラを用い、写真はカラーで撮影した。

Aトレント 第3次調査の第1トレントに平行する形で22m×1mの規模で設定した。西端は耕作道から調査区を始め途中未調査区を経て東へ28m付近で確認を行った。土層は耕作土20cmより下層は変化なく、4層となっている。遺構はこの4層上面で検出される。調査区の西側から中央にかけて柱穴が6本確認され、その内3本が方形な平面形を呈する。柱は1.8m間隔に配置しており、掘立柱建物跡が想定される。遺構

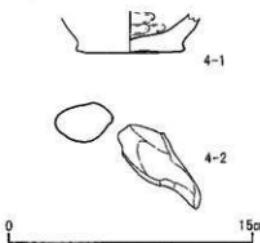
の年代は明らかでないが、周辺出土遺物から古墳時代～奈良時代のものと判断される。また、東へ26.3m付近で落ち込みが検出され旧流路の護岸と考えられる。遺物は土師器1・2が出土している。

Bトレント Aトレントの7m南側に7m×1mの規模で設定した。遺構や遺物は検出されなかった。旧流路の落ち込みは耕作道より24.5m付近で確認された。

Cトレント Aトレントより北へ28.3m地点から北に向かって南北に17m×1mの大きさで設定した。この地点は4層上面に10cm程砂層が堆積し深くなっている。調査区の北12.5m付近で直径20cm程の柱穴



第23図 第4次調査位置図



第24図 第4次調査出土遺物実測図

が3本検出している。柱穴より1m程北で落ち込みが確認され旧流路となっている。遺物は調査区の北10mの所で古墳時代の土師器が1個体分出土している。

Dトレーナー Aトレーナーより南へ25m地点に34m×1mの規模で東西に設置した。調査区西端より10m×15m東付近で柱穴と溝が検出された。溝は南北に延び深さ18cmと浅く、盛土から地境溝と思われる。東端では旧流路を確認した。遺物は特に出土していない。

Eトレーナー Dトレーナーの東端より9m南に3.5m×1mの大きさで南北に設置した。調査区の南端より80cm北で旧流路を確認した。

Fトレーナー Dトレーナーの東側30m付近に直交する形で北側に5m×1mの規模で設置した。調査区は平坦な地形となっており、北端1m手前で落ち込みを検出した以外は遺構はなかった。出土遺物もなかった。

Gトレーナー Eトレーナーの10mほど南に2m×2mの規模で設定した。この地点は工事計画の排水路の範囲にあたり遺構の確認を行った。旧流路が確認された以外は遺構は見当たらなかった。出土遺物も特に出土していない。

Hトレーナー Aトレーナーより北へ20mの茶畠境に南北方向に4.5m×1mの規模で設定した。調査区中央に柱穴が3本検出された。さらに3.5m東地点で旧流路が確認された。柱穴は平面形円形を呈する。出土遺物はなかった。

Iトレーナー Hトレーナーより北東へ16m程の地点に南北方向に2m×1mのトレーナーを設定した。この地点では砂層が1m以上堆積した状態を示し、旧流路内と判断される。

Jトレーナー Aトレーナーより北へ約40mでCトレーナーに直交する形で東西にトレーナーを設置した。調査区は最も北東位置にあたり、現況は茶畠となっている。土壤は砂層で河川による二次堆積がなく、1m以上となっている。西端より2m東で旧流路が検出された。他に遺構や遺物は認められない。

今回の調査は、工事排水路の東側の造成に伴い、遺跡の範囲を明らかにすることが求められた。調査ではAトレーナーの調査結果を踏まえ、トレーナーの配置を考えながら旧流路の範囲を明らかにしていった。その結果、Cトレーナーの北側からHトレーナーの東側を経て、Aトレーナーの東端に至り、その後少し湾曲しながらF・D・Eトレーナーの東端の範囲と推定される。この範囲は微高地の端部であり、遺跡を包含層の端部であることも確認された。またA・C・Hトレーナーで柱穴が検出され、遺跡が土壌の外側東に広がっていることが明らかとなった。ただし、この遺跡の時期は不明であり大屋敷遺跡が主体とする中世とは限定されるものではなく、過去の調査成果から古い段階の可能性が高い。今後の課題としよう。

回収番号	登録番号	実測番号	出土地点		器種	法量(m)				残存率		产地	破片数	備考
			グリット・ トレーナー名	遺構名		口径	器高	底部	高台高	口	底			
4-1	1001	12	AH-12		土師器壺	-	-	66		-	1/4		1	
4-2	1002	13	AH-13		土師器壺	-	-	-		-	-		1	

第8表 第4次調査出土土器観察表

## 第5節 第5次調査

調査の目的 東側の遺跡範囲の調査

調査期間 平成2年11月27日

調査面積 612m<sup>2</sup>

### 調査の概要

第4次調査に引き続き、東側の遺跡範囲について確認調査を実施した。調査は、重機を用いてトレント掘削した後、人力で精査を行い遺構の確認に努めた。特に前回の調査で旧流路の範囲を明らかにした点に主眼し、今回の調査地点がその流路の南下位置にある。調査区はGトレントより南から町道の間に5箇所トレントを設定した。トレントはまず前回の調査の流路地点との関連を把握するため20m南にまずトレントを設定し、その後地形に合わせ順次調査を行った。各トレントは前回の調査に従ってアルファベットでKから順番に記述した。

**Kトレント** 最も北側に屋敷地から畠にかけて東西方向に設定したもので、10m×1mの規模である。特に遺跡としての生活面は確認されなかった。旧流路は調査区西端で屋敷としの境付近から落ち込みを確認した。

**Lトレント** 道と平行する形で南北に25m×1mの規模で最も西側に設定した。この地点は、周囲より少し低く、南に向かって傾斜する地形となっている。表土より50cm程下より赤褐色土が検出され、覆土から炭化物や弥生時代～中世にかけて遺物が数点出土した。また、この層は南に延びており畠の境近くで落ち込みの確認と同じく層は消滅している。旧流路は用排水路付近と考えられる。

**Mトレント** トレントはLトレントで東側での落ち込みが明らかでないことから、Lトレントに直交する形で4m×1mの規模で設定した。その結果、東の畠との地境付近で赤褐色土層が落ち込んでしまい、黄褐色土の砂土となる。この地点が旧流路の落ち込みと思われる。落ち込みが確認されている。

**Nトレント** Mトレントの北10m地点に平行する形で10m×1mの大きさで、調査区の中央地点、ちょうどMトレントと同様の地境付近で落ち込みが確認された。

**Oトレント** KとNトレントの中間地点に13m×1mの規模で南北方向に設定した。現況では畠と畠の境が段となっており、この境より南側で落ち込みが確認された。

今回の調査で、K・O・Nトレントによって屋敷地に付いた地点で1段低くなった標高10m前後の場所が旧流路跡にあたり、L・Mトレントで南側部分の旧流路が確認された。その結果、現在の地境がそのまま旧地形を反映していることが明らかとなった。第4次調査で一端東側に流れた流路は西に流れを変えしトレントの南端へと南下したと考えられ、この範囲の内側が遺跡の範囲と判断される。



第25図 第5次調査位置図

## 第6節 第6次調査

調査の目的	遺跡の範囲に計画された排水路の部分の本調査
調査期間	平成2年12月15日～平成3年1月21日
調査面積	396m <sup>2</sup>
調査経過	12月15日～18日 調査区掘削 19日・20日 S K-1、S D-1掘削 21日～28日 土器溜掘削 29日 調査区埋め戻し 北地区 12月20日～22日 表土掘削 25日～28日 土壘、水田部分掘削 1月7日～12日 上面掘削 14日～18日 S D-2と上面完掘 19日 土壘掘削、計測 21日 調査区の埋め戻し

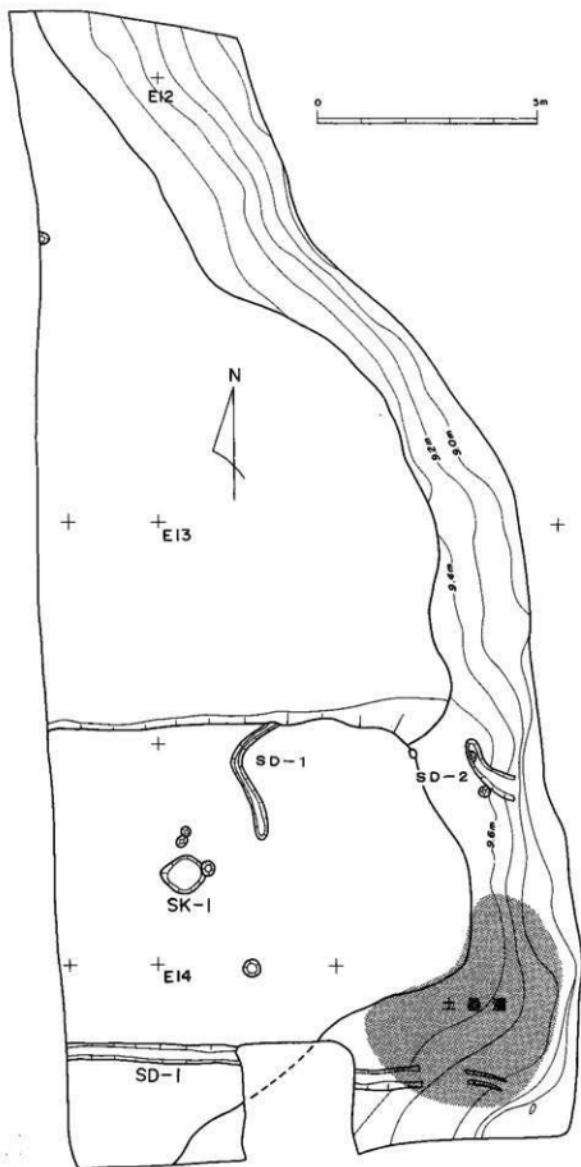
調査の概要（第26図～第33図）

第4次・5次調査で東の遺跡範囲を把握する

ことができた。その結果を受け、圃場整備事業工事計画とのすり合わせを行い、城郭部分に影響のない地点について事業を進めることとなった。まず、遺跡を取り囲むよう外側に用排水路工事を計画した。この工事計画では、東側で第4次調査D・Eトレンチで確認された遺跡の一部があつたため本調査を実施することとなった。また北側の水路工事では、方形に巡らす土壘の北西隅から西に延びる堤状遺構を横断する形で工事計画されていたため、堤状遺構の年代確認も兼ねて本調査を実施した。なお、この地点は古川遺跡の周知として登録されていた。調査区は東側水路工事地点を東区とし、北側の工事計画地点を北区として区分した。調査方法は、東地区では表土及び無遺物層を重機を用いて除去した後、人力で粗掘、精査、写真撮影、計測の順に従って繰り返し作業を行う。粗掘にあたり、唐鋤、鋤簾を使って深さ数cm程度掘削する。精査は粗掘が完了した地点より鋤簾、ネジリ鎌を使って数mmの厚さで平らに数回掘り込み、遺構検出を行う。検出された遺構は土層で確認後、小道具を使用し掘削する。遺物が出土した場合はできるだけ現地に残した。撮影はローリングタワーを使って3段構を組み、上から撮影を行う。撮影に使うカメラは、6×7版カメラ（白黒フィルム）と3台の35mm版カメラ（白黒・カラー・リバーサル）を使用した。計測はグリットに合わせ1m方眼に水糸を張り、全体図を縮尺20分の1、各遺構の遺物出土状態は基本的に10分の1の縮尺で行った。また、覆土出土の土器はドットで取り上げを行った。遺物の取り上げにあたり、土器溜出土遺物は保存状態が悪く現状のままでは取り上げが困難であったため表面をパラロイド液又はパインダー液で固めながら作業を行った。そのため、調査区の一部をビニールハウスで囲い、雨対策を行った上で調査を進めた。北地区では、重機で排水除去する以外はすべて人力で行った。調査手順は東地区と同じで堤状遺構の掘削にあたり断面観察後、層位に従って掘削、写真撮影、計測を繰り返し行った。なお、堤状遺構は遺跡



第26図 第6次調査位置図



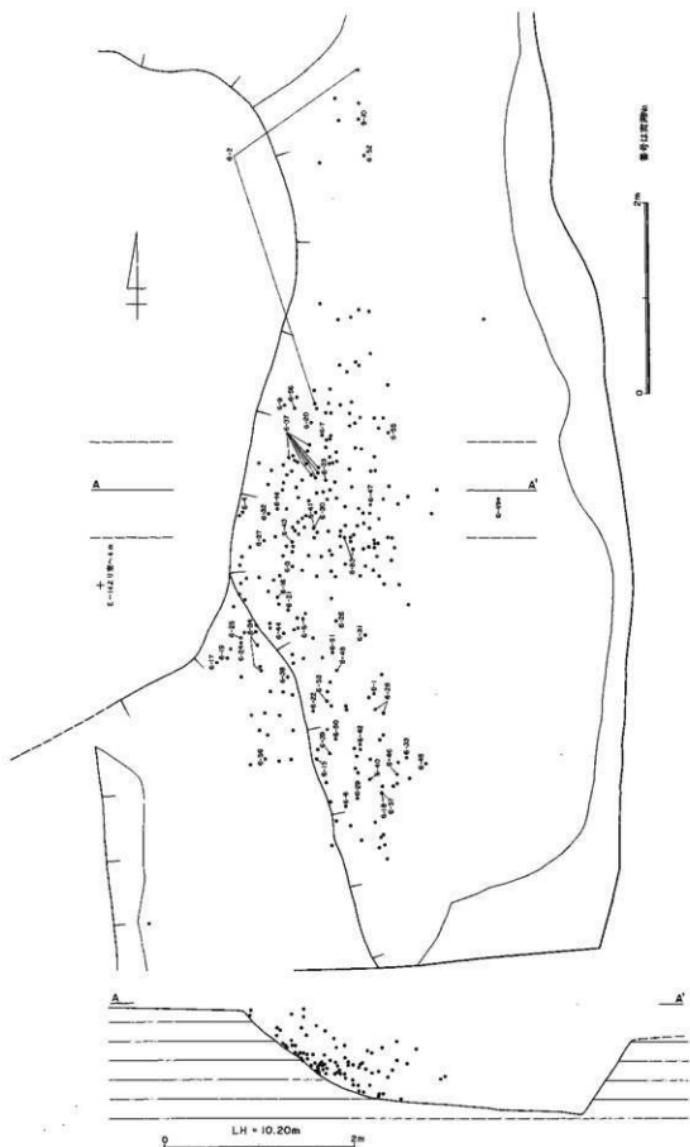
第27図 第6次調査平面図

の本体にあたる方形に巡らす土壘と区分するため北拡張土壘と呼ぶことにする。

#### 東地区（第27・28図）

調査区は第4次調査のDトレンチの東側部分を中心にFトレンチとEトレンチの間に用排水路計画範囲とした。ただし、遺跡範囲が工事計画よりさらに東側に広がっていたため、その範囲まで調査区とした。調査区は、旧流路の落ち込みまでとし東西11.8m、南北26mの規模で総面積238m<sup>2</sup>を対象とした。調査区は中央部D・E13区が最も広く平坦面が東西に9mの幅となっているほか、中央付近で段となり北側が少し低くなっている。全体に東に向かって傾斜し、旧流路へと続く。旧流路は調査区北端のE11区から始まり南北方向にみられるが、13ライン付近で方向を変え14ラインまで南下する。その後、大きく西に流れを変化させている。そのため、この地点が東に突出した地形となっており旧流路の流れが大きく変化する場所もある。調査で検出された遺構は、土坑（SK）1箇所、溝（SD）3箇所、柱穴7本、土器窪1箇所が確認された。SK1は、D13区の西側平坦部に位置する。平面形は西側では尖っており、東側は柱穴と切り合う状態であるが、コーナーは丸味をもち方形となっている。底面は平らで検出面からの深さは5cmと厚く掘削時の形状とは異なっている。覆土は茶褐色土の1層となっている出土遺物は見当たらない。遺構の時期は覆土より中世以前と考えられるが年代を決定する資料がないため不明である。溝は3箇所が検出され調査区南側半分にまとまっている。SD1は14ラインの2m南に位置し、D14区からE14区にかけて東西に直線的に延びている。大きさは幅40cm前後で深さ20cmを測る。溝の南側上場は北側上場より10cm程低く、周辺地形も同じ状態となり平らである。この溝の覆土は黄褐色砂質土で絞まりのない土となっている。遺物は出土していない。溝の年代については、当溝より7m北地点で10cm程低くなり段をなす落ち込みがあり、この落ち込みのラインとSD1が平行する形で立地しており同時期の遺構と考えられる。この溝は中世以降の地境に伴う遺構であろう。SD2はSK1の北、D13区内に位置する。溝の北側は後世の掘削によって全体規模は明らかでないが、残存する大きさは全長2.2m、幅20cmを測る。深さは南端で10cmであったものが北にいくに従って浅くなり、標高も同じ高さとなる。掘り方は南端より2m北にいった所で折れし字形を呈し、北に向かって傾斜する。遺物は出土していない。この溝の年代は不明である。SD3は旧流路の落ち込み傾斜で検出された。D13区の中央東側で平面形は緩やかなカーブを描く。規模は長さ1.7m、幅25cm~50cmを測る。深さは北端で6cmを測るが東にいくに従って30cm以上と深くなり、傾斜地形と連動する形となっている。溝の覆土は暗黃茶褐色砂質土で土器窪周辺の覆土と同じである。遺物は出土していない。遺構の年代については出土遺物がないため不明な点も多いが、土器窪の年代と平行する時期のものと推測される。柱穴はSK1付近に3本、SD3周辺の2本、14ライン上に1本、E12区に1本の計7本が検出している。柱穴の規模は直径25cm~30cmで、平面形は円形を呈する。各柱は建物としての並びは確認できなかった。土器窪は調査区の南西隅の平坦面から落ち込みにかけて検出された。範囲は、D13とD14区に跨っており、東西幅2m、南北6mとなっている。土器は土師器、須恵器など古墳時代の土器がまとまって出土している。出土状態では比較的狭い範囲で地形に沿う形で基盤層付近から出土している。また、土器は破れているものの1個体がまとまっており、当初は完全に近い状態であったと思われる。また、旧流路の落ち込み地点に集中することから2次堆積によるものと考えられが、個々の土器の状態から一括廃棄されたものと思われる。また、覆土には炭化物や赤く焼けた粘土ブロックを多く含んでいた。土器は須恵器と土師器が出土し、そのうち土師器が主体となっている。器種としては壺類、高壺、甕、壺、甕、瓶があり壺類が半数以上占めるほか高壺が目立っている。

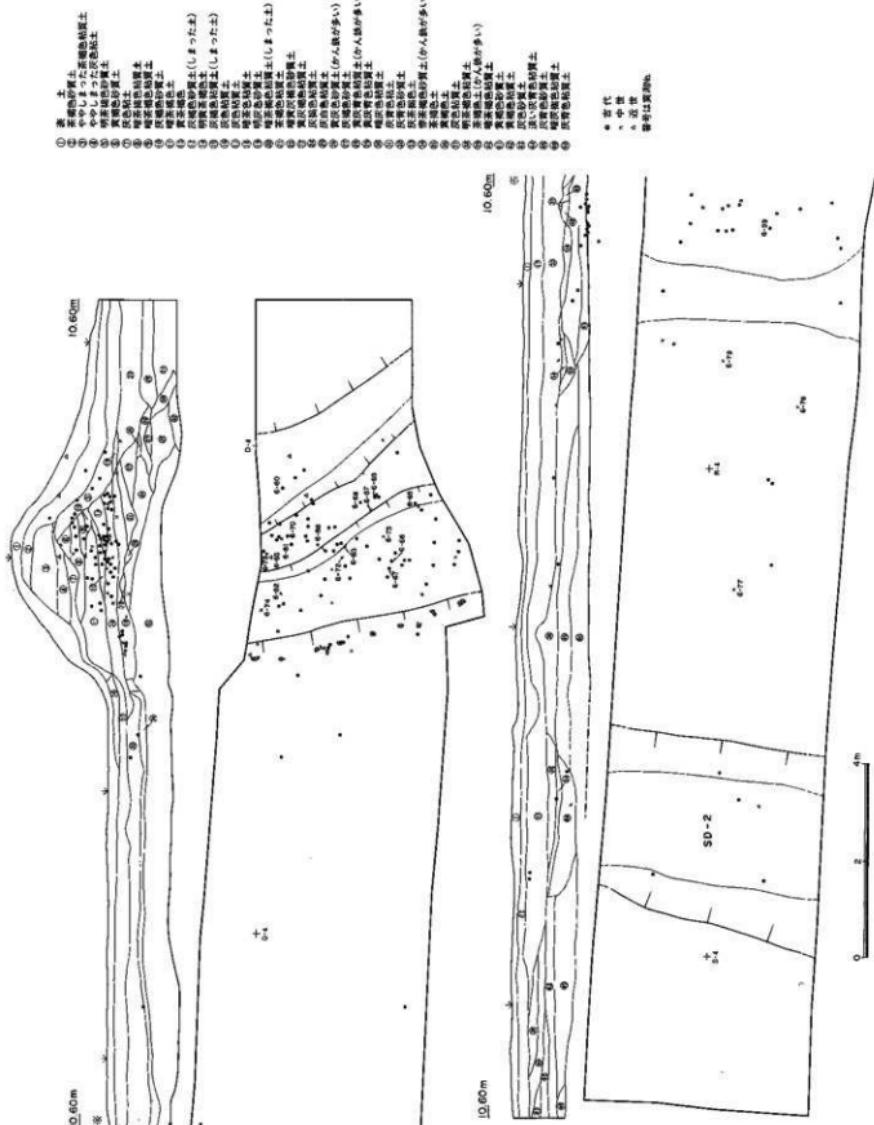
出土遺物については、第V章まとめで記述する。



第28図 第6次調査東区土器窯平面図

## 北地区（第29図）

調査区は、大屋敷遺跡の北西隅よりさらに西へ延びる北側拡張土塁のほぼ中央地点から西側水田部分にかけて幅45m×全長36mのトレンチを設定し面積158m<sup>2</sup>を調査対象とした。トレンチは工事計画図に従って東端は旧流路の落ち込み、西端は現水田の排水路までの東西方向となっている。層位はR-4地点の西側で検出した1層、37層、33層、36層、45層、50層が基本層位と考えられる。17層下面はSD2東付近で水田畦畔に伴う落ち込みが検出されており、1層の耕作土とも併せて近世以降の水田整地層と考えられる。33層はS-4地点から発生し土塁の西隅までの厚さ40cmを測り安定した水平な堆積となっている。36層はSD2掘り方の東側からR-4地点より4m付近までの間確認されている。45層は調査区西端から発生してR-4地点で消滅する。50層は調査区全域の下層の基本層となっている。遺構は溝（SD2）1箇所、水田跡2箇所、土塁1箇所が検出されている。SD2は調査区の西側S-4地点の東に位置する。溝の掘り方は36層の上面より緩やかに傾斜し断面皿状を呈する。覆土は34層、38層、44層からなる。44層はこの溝の堆積のはとんどを占めており、溝の廃棄後、単時に埋まつたと考えられる。規模は幅は3.8m、36層上面からの深さは50cmでトレンチに直交する形で南北に延びている。遺物は古墳時代～中世の土器が数点出土している。土器はいずれも小破片で計測できるものはなかったが、最下層より12世紀後半の壺の破片が出土している。この溝は出土遺物より中世の遺構と考えられる。水田遺構はSD2の東2m地点より落ち込みが検出され、土塁の西端までの全長18mの範囲で、36層上面が水田の基盤層となっている。36層の上面は標高9.40m前後で平らとなっている。水田の西端部にあたる地点では土塁との境に木材が打たれ土溜めされている。杭は60cm間隔で検出面より60cm程打ち込まれている。杭の大きさは1.1mで丸太を半截し、先端部を3～4面カットしてある。遺物は下層より山茶碗76・77・79が出土している。山茶碗は東遠系の製品で、12世紀後半から13世紀前葉と考えられる。この水田跡は、出土遺物から中世前期の年代が想定されるものの遺構の切り合いで、SD2より新しい時期と判断される。R-4地点より東へ4mいった所から36層上面より50cm程掘り込みが検出されており、この地点より東へ向かって平坦な地形が旧流路まで続く水田跡と考えられる。上層部は砂利混じりの堆積層が著しく、旧流路の氾濫による堆積層と推測される。土塁は、版築工法で構築されている。最も高い中央部で標高11.98mを測り、24層上面の基盤層まで1.3mの盛土となっている。盛土は基盤層の24層を境に7層、上面（上面）、18層上面（中面）、24層上面（下面）で積み替えが認められた。上面は2～4層で、木の根等による攪乱は見られるものの絞まった茶褐色の土となっている。4層の基盤は幅2mで中面上部より1m程東側に振れ、西側がカットされたような土層を占めている。中層はこの土塁の構築状態を良好に残しており、東側では斜めに数回にかけて盛土し固めているのに対して、西側は11層と14層の二層で版築している。これは東側が流路側にあたり川の氾濫に対する備えの対策と考えられる。中面からは土器が多く出土している。下面是東側で21層、22層が東に傾斜する24層上面に20cm～30cmの厚さで右上がりに積み上げ、18層の上層で平坦な地形を形成している。基盤層の東側は24層から下層にかけて複雑な堆積状況で砂層を主体としており流路の堆積層と考えられる。遺物は上面より近世から現代までの土器が出土しているほか、中面から下面の18層上面にかけて弥生時代から中世の土器がみられた。特に弥生時代の土器は最も多く、後期の壺60や中期の壺65～69などがある。古墳時代から奈良時代の須恵器、土師器は出土しているが、小破片で計測できるものはなかった。中世では山茶碗72～75、小皿81・82、壺87、白磁83、青磁84があり山茶碗が多い。山茶碗は湖西系の12世紀後半の製品となっており、小皿は山茶碗と平行する時期から13世紀前半となっている。船載陶磁器は、城館内で出土している蓮弁文碗とセットで出土する白磁口禿皿と14世紀後半段階の青磁84がある。瀬戸・美濃製品は片口鉢88をはじめ近世の製品が多い。土塁の築



第29図 第6次調査北区平面図

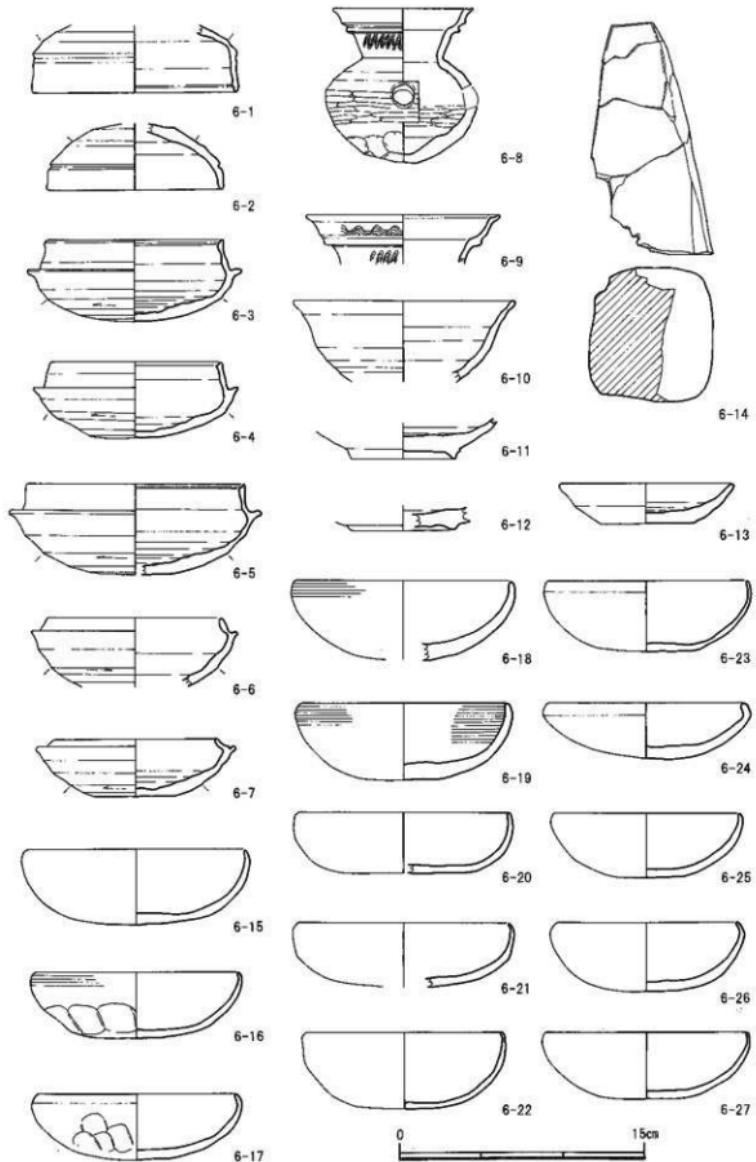
造については水田遺構が埋設した後、築かれており数回の修復を加え現在に至っている。この土壙の構築によって東外側の流路からの防波堤としての堤遺構、西内側の水田が生産空間が広がったと推測され、少なくとも近世段階に成立していたことは明らかで中世のどの段階まで遡るものか今日の調査資料では明確な答えはないが、古代まで古くなることはあり得ない。

第6次調査は前回までの遺跡範囲の調査に対して、面的な本調査であった。しかし、城館の中心部でなく外部の調査であったため、この遺跡の性格を裏付ける資料を提供することはできなかった。東地区では、中世の遺物は少量出土するものの遺構は検出されていない。しかし、古墳時代中期末から後期前半にかけての土器窯は、この周辺に集落が存在することを裏付けるものであった。さらに、河川の岸部に土器を中心に身具などを投棄する祭祀が行われた遺構がみられ、静岡市大谷川流域の調査をはじめ、近年調査例が増加しつつある当時の水辺の祭りの一端を窺い知ることができる資料であろう。北地区では弥生時代中期の土器が多く出土し、この時期に集落が形成されたことを明らかにした。今まで断片的に弥生時代後期の遺物がみられたが、今回東地区的土器窯と推定される土器をはじめ確実に中期まで遺跡の年代が上がったことは、周辺の耳川遺跡をはじめ、この地域の弥生集落の解明に一石を投げたものであった。また、北側拡張土壙が数回にわたり修復され現在まで存続したことが明らかになったものの、その構築年代を限定するに至らなかった。

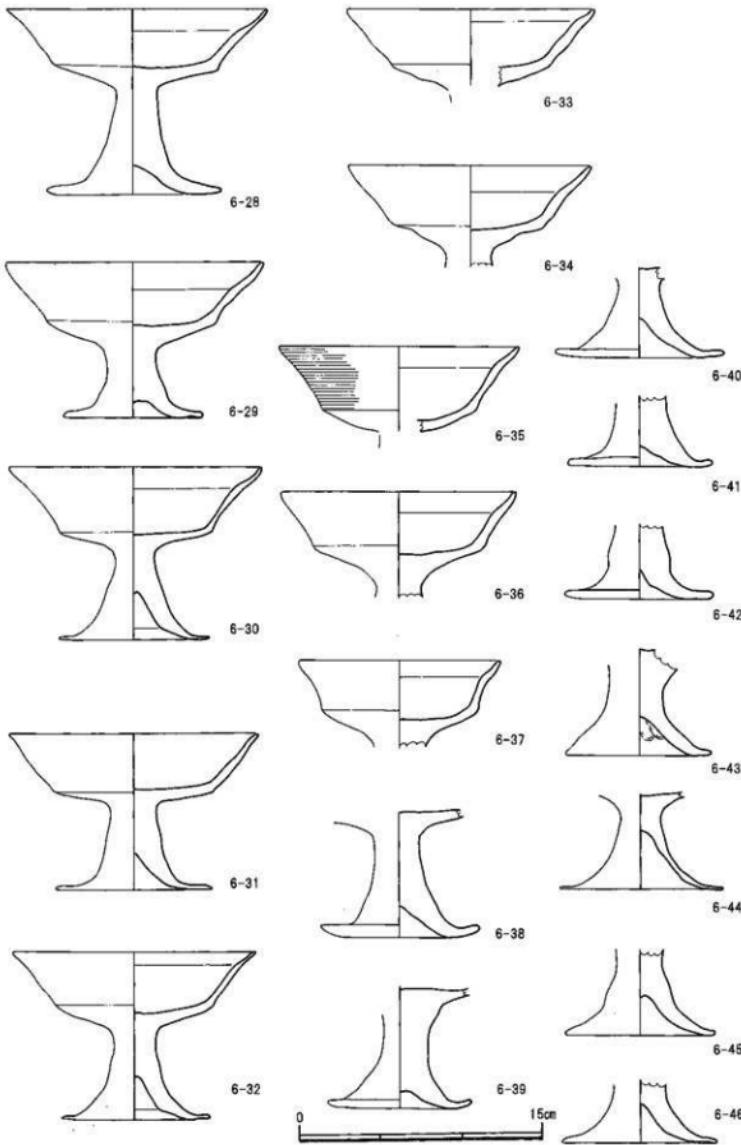
以上のように、高田大屋敷遺跡が弥生時代中期から中世までの複合遺跡であることが明らかになつたほか、土壙の外側には城館に付随する施設を現段階では確認できなかった。

第9表 第6次調査出土土器観察表

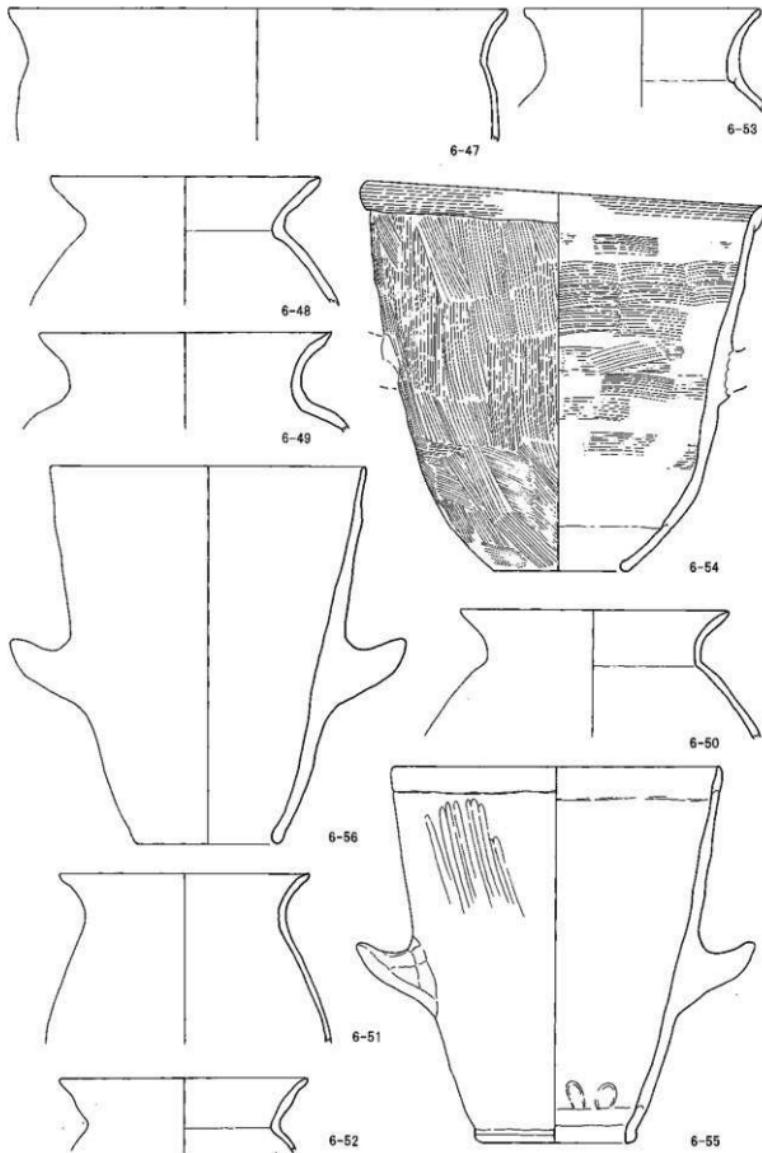
図版番号	登録番号	実測番号	出土地点	器種	法量(mm)					残存率		所在地	破片数	備考
					口径	器高	底部	高台高		口	底			
6-1	703-190	248	東地区	須恵器环蓋	124	-	-			1/6	-		1	TK10
6-2	703-2	249	東地区	須恵器环蓋	106	(44)	-			2/5	-		2	
6-3	703-112	244	東地区	須恵器环身	106	50	-		最大径 130	1/3	1/2		1	TK47
6-4	703-26	245	東地区	須恵器环身	103	46	-		最大径 125	3/4	-		1	TK47
6-5	703-202	243	東地区	須恵器环身	132	55	-		最大径 155	1/2	-		3	MT15
6-6	703-52	247	東地区	須恵器环身	105	42	-		最大径 126	1/3	-		1	
6-7	703-14	246	東地区	須恵器环身	98	35			最大径 122	2/5	-		1	
6-8	703-42	251	東地区	須恵器身	85	95	-		体部幅 92	1/3	1/1		9	TK47
6-9	703-135	250	東地区	須恵器身	118	-	-			1/12	-		1	
6-10	703-4	252	東地区	山茶碗	135	-	-			1/14	-	東通系	1	
6-11	704	253	東地区	山茶碗	-	-	62			1/1	-	東通系	1	
6-12	702	22	東地区	山茶碗	-	-	65	3		-	1/8	東通系	1	
6-13	701	254	東地区	かわらけ	106	25	56			1/11	1/1		1	
6-14	703-114	136	東地区	土器支脚	上部 24	142	下部 82			1/2	1/2		6	
6-15	703-46	153	東地区	土器器環	132	46			最大径 138	1/4	--		4	
6-16	703-90	142	東地区	土器器環	124	40			最大径 129	3/4	-		9	
6-17	703-57	144	東地区	土器器環	120	40			最大径 129	1/2	-		5	
6-18	703-160	151	東地区	土器器環	130	(48)			最大径 137	2/5			26	



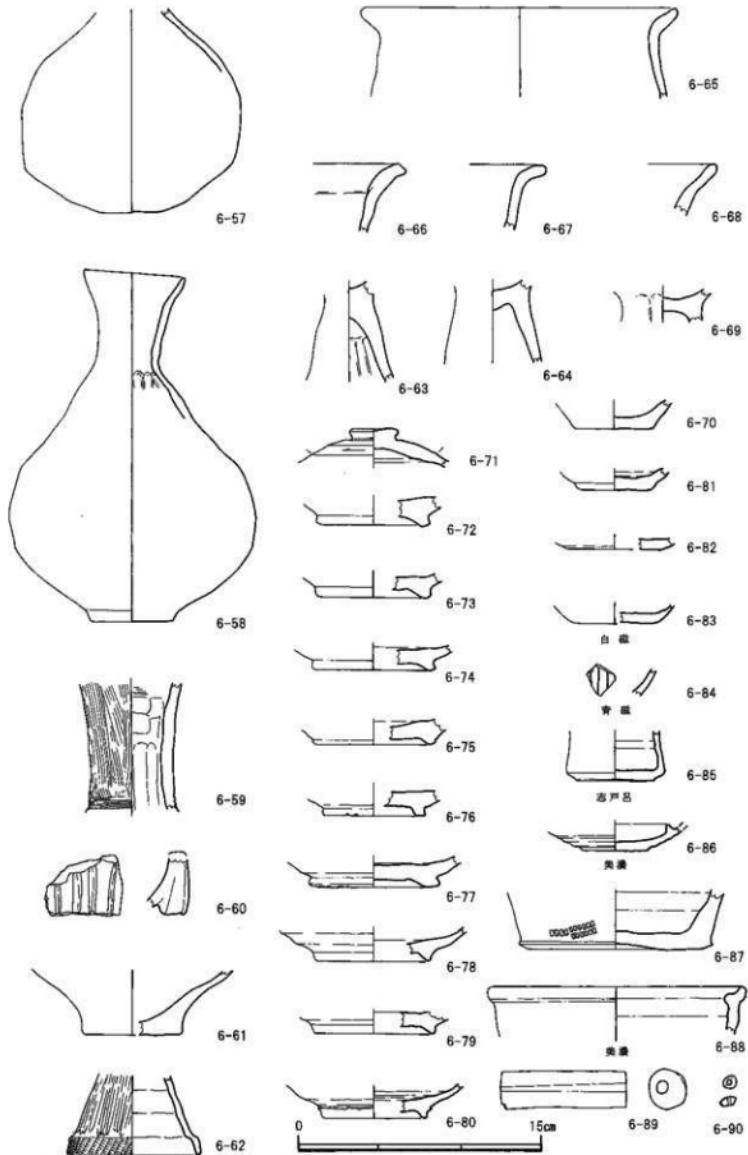
第30図 第6次調査出土遺物実測図1



第31図 第6次調査出土遺物実測図2



第32図 第6次調査出土遺物実測図 3



第33図 第6次調査出土遺物実測図4

図版番号	登録番号	実測番号	出土地点 グリット・ トレンド名	器種	法 量(mm)			残存率		产地	破片数	備考
					口径	器高	底部	高台高	口	底		
6-19	703-58	145	東地区	土師器坏	126	47			最大径 132	1/1	-	22
6-20	703-148	150	東地区	土師器坏	130	37			最大径 135	1/18	-	1
6-21	703-94	154	東地区	土師器坏	128	-			最大径 134	1/5	-	6
6-22	703-69	148	東地区	土師器坏	120	48			最大径 129	1/4	-	14
6-23	703-146	147	東地区	土師器坏	122	44			最大径 127	1/5	-	9
6-24	703-61	143	東地区	土師器坏	120	34			最大径 126	3/4	-	10
6-25	703-60	149	東地区	土師器坏	112	39			最大径 118	2/3	-	11
6-26	703-139	152	東地区	土師器坏	108	42			最大径 118	1/3	-	12
6-27	703-103	146	東地区	土師器坏	124	41			最大径 127	2/5	-	6
6-28	703-189	138	東地区	土師器坏	170	113	108			1/1	3/4	9
6-29	703-110	137	東地区	土師器坏	158	96	86			1/1	1/1	6
6-30	703-143	139	東地区	土師器坏	155	106	92			2/3	1/3	10
6-31	703-144	140	東地区	土師器坏	152	96	96			1/2	1/2	11
6-32	703-32	141	東地区	土師器坏	149	103	91			1/6	3/5	4
6-33	703-166	129	東地区	土師器坏	150	-	-			1/2	-	3
6-34	703-86	123	東地区	土師器坏	149	-	-			2/3	-	5
6-35	703-321	130	東地区	土師器坏	146	-	-			1/4	-	3
6-36	703-78	128	東地区	土師器坏	142	-	-			1/14	-	4
6-37	703-178	124	東地区	土師器坏	122	-	-			1/7	-	10
6-38	703-71	122	東地区	土師器坏	-	-	98			-	1/1	11
6-39	703-48	125	東地区	土師器坏	-	-	88			-	3/4	8
6-40	703-149	135	東地区	土師器坏	-	-	104			-	2/5	10
6-41	703-143	133	東地区	土師器坏	-	-	90			-	1/1	10
6-42	703-146	132	東地区	土師器坏	-	-	92			-	1/1	12
6-43	703-131	131	東地区	土師器坏	-	-	90			-	1/1	7
6-44	703-65	126	東地区	土師器坏	-	-	100			-	小片	5
6-45	703-165	127	東地区	土師器坏	-	-	92			-	1/4	1
6-46	703-163	134	東地区	土師器坏	-	-	96			-	1/2	1
6-47	703-192	191	東地区	土師器壺	308	-	-			1/8	-	2
6-48	703-169	190	東地区	土師器壺	166	-	-			1/5	-	4
6-49	703-200	192	東地区	土師器壺	170	-	-			1/5	-	7
6-50	703-49	187	東地区	土師器壺	166	-	-			2/7	-	6
6-51	703-141	189	東地区	土師器壺	154	-	-			1/8	-	4
6-52	703-7	186	東地区	土師器壺	154	-	-			1/3	-	3
6-53	703-96	188	東地区	土師器壺	146	-	-			1/4	-	4
6-54	703-193	183	東地区	土師器壺	248	233	80			1/1	1/1	6

出土地点 登録番号	実測番号	グリット トレンチ名	遺構名	器種	法 量(mm)				残存率		底地	破片数	備考
					口径	器高	底部	高台高	口	底			
6-55	703-133	156	東地区	土師器瓶	204	233	88		1/4	1/4		18	
6-56	703-133 -138-201	193	東地区	土師器瓶	194	234	86		1/5	1/5		75	
6-57	703-160	196	東地区	土師器壺	-	-	37		体部最大径 135	-	1/1		26
6-58	700	155	東地区	弥生壺	63	214	50				1/1	1/3	98
6-59	813	46	北地区	弥生長頸壺	-	-	-		腹部 54	-	-		2
6-60	760	18	北地区	土壺	弥生壺	小片	-	-			-	-	1
6-61	723	14	北地区		弥生壺	-	-	62			-	1/4	1
6-62	722	163	北地区	弥生高壺	-	-	82				-	1/2	5
6-63	709	158	北地区	弥生高壺	-	-	-		腹部 30	-	-		1
6-64	765	164	北地区	弥生高壺	-	-	-			腹部 45	-	-	1
6-65	779	19	北地区	土壘	弥生壺	196	-	-			1/12	-	4
6-66	773	166	北地区	土壘	弥生壺	小片	-	-			-	-	1
6-67	794	167	北地区	土壘	弥生壺	小片	-	-			-	-	1
6-68	780	20	北地区	土壘	弥生壺	小片	-	-			-	-	1
6-69	797	21	北地区	土壘	弥生合付壺	-	-	-		接合部 50	-	-	1
6-70	754	160	北地区	土壘	かわらけ	-	-	48			-	1/1	1
6-71	711	206	北地区		須恵器壺蓋	-	-	-		フマキ 30×7	-	-	1
6-72	770	201	北地区	土壘	山茶碗	-	-	70	5		-	1/4	湖西系
6-73	709-6	200	北地区	土壘	山茶碗	-	-	69	5		-	1/4	湖西系
6-74	803	202	北地区	土壘	山茶碗	-	-	76	4		-	1/6	湖西系
6-75	709-19	204	北地区	土壘	山茶碗	-	-	75	3		-	1/4	湖西系
6-76	730	15	北地区		山茶碗	-	-	62	5		-	1/4	東道系
6-77	727	203	北地区		山茶碗	-	-	80	4		-	1/6	東道系
6-78	711	199	北地区		山茶碗	-	-	68	5		-	1/5	東道系
6-79	731	16	北地区		山茶碗	-	-	74	5		-	1/4	東道系
6-80	711	23	北地区		山茶碗	-	-	64	5		-	1/4	東道系
6-81	787	205	北地区	土壘	小豆	-	-	42	-		-	2/5	東道系
6-82	759	17	北地区	土壘	小豆	-	-	58	-		-	1/6	東道系
6-83	748	115	北地区	土壘	白磁口禿壺	-	-	54	-		-	1/4	中国
6-84	714	114	北地区		青磁縁描文碗	小片	-	-	-		-	-	中国
6-85	709-5	208	北地区	土壘	小壺	-	-	48	-		-	1/2	志戸呂
6-86	722	211	北地区		灯明皿	-	-	40			-	1/4	美濃
6-87	804	207	北地区	土壘	甕	-	-	120	-		-	1/6	滋美
6-88	709-15	209	北地区	土壘	片口甕	160	-	-	-		1/10	-	美濃
6-89	703-89	178	東地区		管玉	径 8	26				1/1		1
6-90	725	179	北地区		ガラス小玉	径 2	2				1/1		1

## 第7節 第7次調査

**調査の目的** 第3次調査で確認された土壘の西側の堀の部分について範囲や規模を確認する

**調査期間** 平成3年8月16日～9月21日

**調査面積** 252m<sup>2</sup>

**調査経過**

- 8月16日 調査区内の除草作業
- 19日～23日 調査区内の除草作業
- 26日～30日 第1～第5トレンチ掘削
- 9月2日～5日 第6・第7トレンチ掘削
- 6日～11日 第8・第9トレンチ掘削
- 12日～20日 第10トレンチ掘削
- 21日 第10トレンチの埋め戻し。
- 現地調査を完了

### 調査の概要

**第1トレンチ** (第35図) 第3次調査で設定した、第2トレンチの南に位置する。トレンチは

東側茶畠から古川神社境内にかけて設定したもので、長さ17mである。堀と考えられる落ち込みは茶畠と水田の境より4mほど西側に検出された。堀の深さは、地表面より2mほど下の砂利層まで確認したが、さらに下層へは掘り下げることが不可能であった。土層の堆積は、非常に安定しており有機質が多く含まれており第3次調査地点の土層の土壤と非常に近いものである。トレンチの東側の茶畠は4層までは盛土であるが、それより下層は安定した土層である。出土遺物は少なく、下層はほとんどなく摩滅した土師器が数点出土している。計測できた土器は、12世紀の湖西系山茶碗10、13世紀後半の常滑系山茶碗12、17世紀の志戸呂産擂鉢20、小壺22がある。

**第2トレンチ** 最も東側に設定されたもので、長さ7.3mの規模である。表土より20cmほど下より明黄灰色土(7層)が検出された。この7層の上面より弥生時代の土器が数点出土している。この地点は落ち込み等はみられなかった。計測できた土器は、高壺2の脚部で脚端がしっかり屈折させる菊川式の古い段階と考えられる。

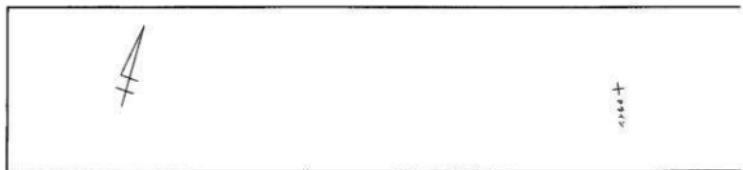
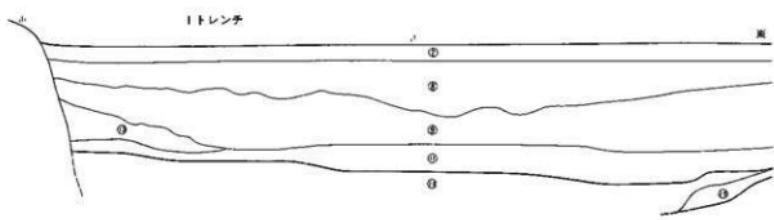
**第3トレンチ** 第2トレンチに直交するもので長さ10mである。トレンチの中央部分で落ち込みが確認された。この落ち込みは7層から掘り込まれており、第1トレンチで確認された位置よりも4mほど東側にあたり南東方向に緩やかにカーブしている。遺物は特にない。

**第4トレンチ** 第1と3トレンチの中間に設定したもので長さ3mの規模である。第1トレンチから第3トレンチにかけての落ち込みの方向を確認するものである。茶畠と水田との境より3mほど西側で落ち込みが検出され、第1トレンチよりまっすぐ南に続くことが明らかとなった。出土遺物は特になかった。

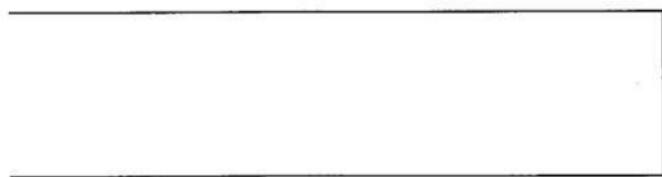
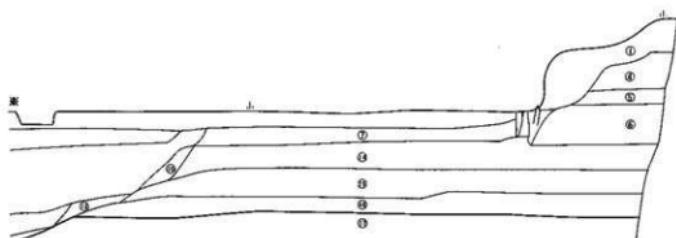
**第5トレンチ** 第3トレンチの南7mの地点に長さ5mの規模で設定したもののである。特に落ち込み



第34図 第7次調査位置図

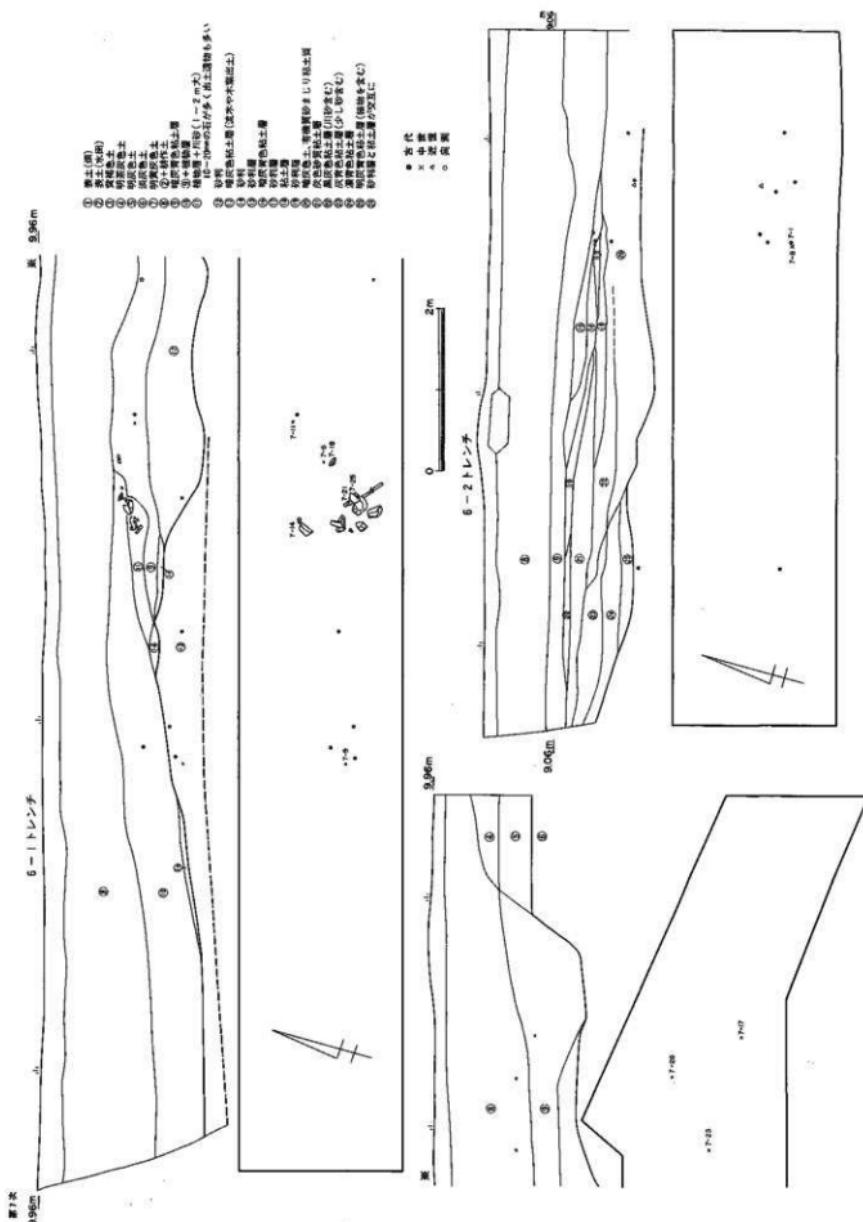


- |             |             |         |
|-------------|-------------|---------|
| ① 黄土(原)     | ⑦ 青黄色色土     | ⑩ 青灰色土  |
| ② 黄褐色粘土     | ⑧ 青灰色土      | ⑪ 青灰色粘土 |
| ③ 黄褐色土      | ⑨ 灰色土       | ⑫ 黄灰色粘土 |
| ④ 明黄色色土(埴土) | ⑩ 淡青灰色土     | ⑬ 明黄色粘土 |
| ⑤ 明灰色土      | ⑪ 淡灰色色土(埴土) | ⑭ 暗灰色粘土 |
| ⑥ 淡灰色土      | ⑫ 青灰色土      | ⑮ 粘土層   |

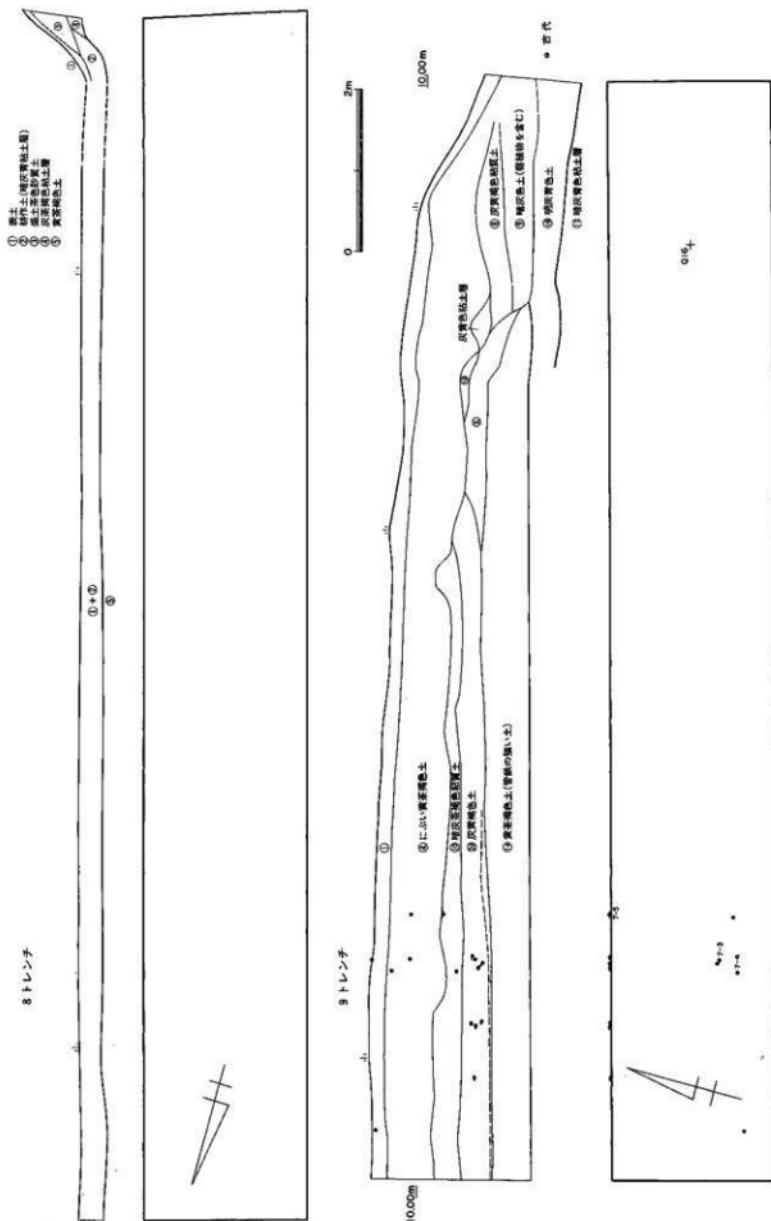


0 1 2m

第35図 第7次調査1トレンチ平面図



第36図 第7次調査6トレンチ平面図



第37図 第7次調査 8・9 レンチ平面図

は、確認されず粘質の強い砂を検出した。また、7層も確認されなかった。遺物は表土より50cm下より17世紀後半の瀬戸・美濃産の天目茶碗15が出土している。このことからこの地点はすでに堀の中であることを確認できた。

**第6トレンチ（第36図）** 第3トレンチで確認された落ち込み地点より、南西方向に長さ20.5mの規模で設定したものである。トレンチは途中排水路の関係で切れているため東側を6-1、西側を6-2と呼ぶことにした。第6-1トレンチでは落ち込み地点より6mほど西側で新たな落ち込み（西側落ち込み）が確認された。堀の落ち込みは深さ2mまで確認することができた。この土層は非常に安定した堆積である。第6-2トレンチでは、西側落ち込みの堆積は途中から複雑な土層の変化が認められ緩やかな流れによるものとは考えにくく短期間による堆積によるものと判断される。なお、図面の土層図では26層が安定した堆積のように表現されているが数cmの厚さで砂利と粘土が交互に堆積している土層である。遺物は堀の8層より常滑窯23・26、9層ではかわらけ6、山茶碗11、古瀬戸後期の仏龕具17、大窯の志戸呂産内禿皿18が出土している。また、11層では円碟と混ざって、常滑片口鉢14、17世紀の志戸呂産筒型容器21、15世紀～16世紀の常滑窯25が出土し、下層の13層より12世紀後半の湖西系山茶碗9がみられる。西側落ち込み内では15層より弥生時代中期白岩式の壺1と古手の山茶碗8が出土している。また第6-2トレンチの7層より中世の山茶碗や奈良時代の須恵器や土師器などの土器の小破片が出土している。

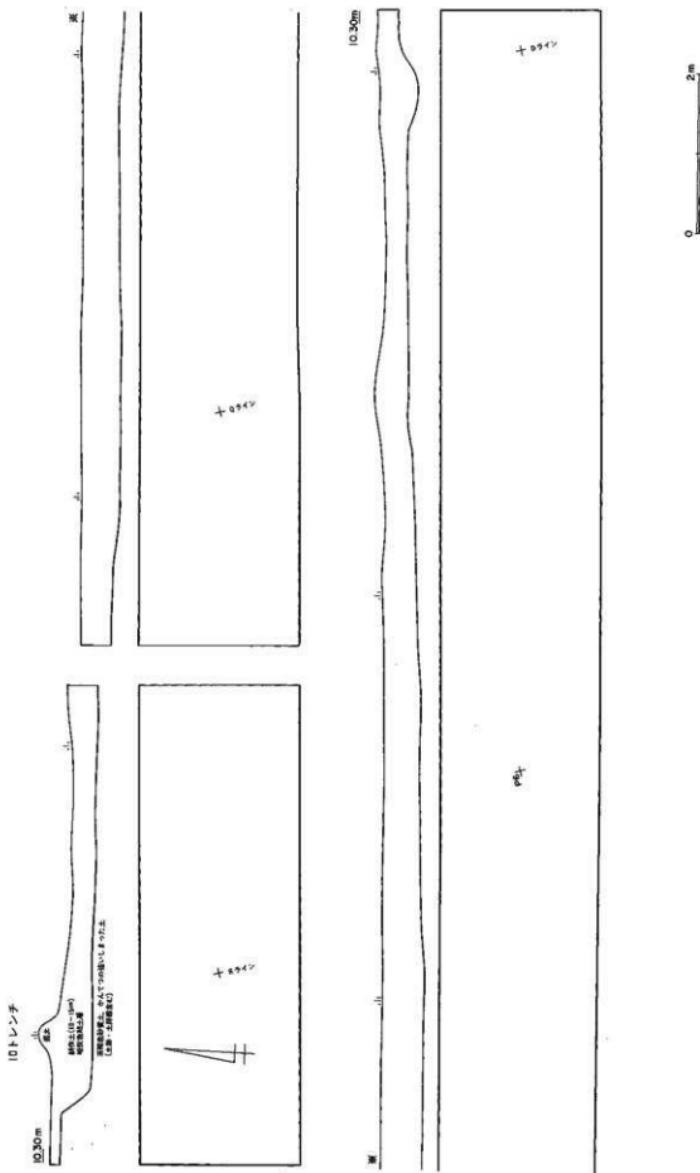
**第7トレンチ** 古川神社境内の入口に最も近い地点で東西に17m設定したものである。特に土層の変化もなく落ち込み等確認されなかった。

**第8トレンチ（第37図）** 土塁の北東コーナー地点の水田に大屋敷遺跡の北側土塁に直交する方向で16mの長さで設置する。表土を除去した下層より7層が検出された。特に落ち込み等は認められなかった。

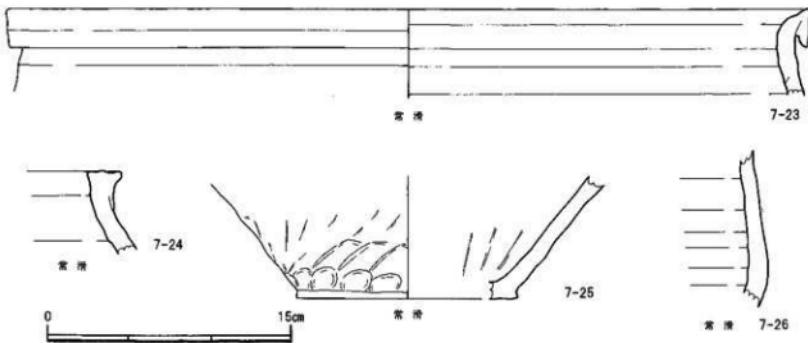
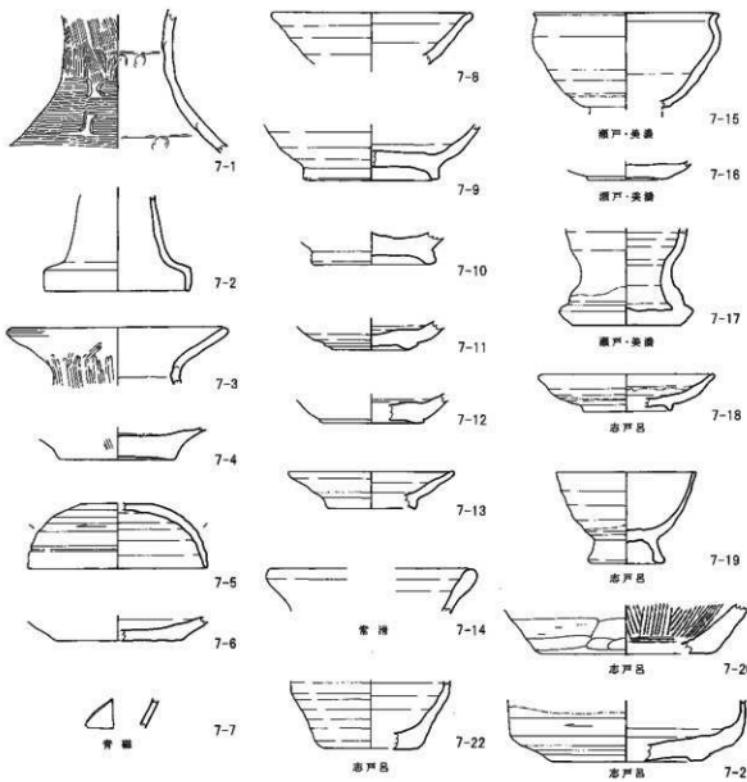
**第9トレンチ（第37図）** 古川神社境内より北側の畑に水田との境より東西に13.5mの長さで設定したものである。表土より1m近くは盛土及び耕作の攪乱により土層は明らかでない。20層は安定した堆積の土層で遺物が多く含まれている。トレンチの東側では水田との畑の境より2mほど西に入り込んだ地点で落ち込みが確認された。落ち込みは21層を掘削して作られているが、この地点の土層は水分を多く含んでいたため、粘質が強く色も識別がつきにくい状態のため落ち込みがないわけではない。畑の部分の土層は第1トレンチの東側の茶畠の土壤と良く似ているものである。遺物は弥生時代～古墳時代の土器が出土している。計測できた土器は、10層から弥生時代後期壺3、20層でも弥生時代の壺4がある。5は古墳時代後期の須恵器の壺蓋で7世紀前半のものである。

**第10トレンチ** 第8トレンチに直交するもので東西に29m設定したものである。トレンチの中央地点で小規模な落ち込みを検出した。この落ち込みは、おそらく第6次調査で確認された中世の溝（SD2）に繋ぐもので堀の落ち込みとは考えにくい。トレンチの西側では現況の水路地点よりも西にかけては、第9トレンチの畑部分の19～21の土層と類似すると思われる土層が検出されている。

今回の調査の結果、堀については第10トレンチから第5トレンチの間で確認された落ち込みが堀跡だと考えられる。堀の掘削時期については、第6トレンチの状況から判断した中世と考えられる。ただし、第6-1から6-2にかけては、新たに人工的な掘削があり、当初の堀の一部削平している時期が認められる。出土遺物から江戸時代頃ではないかと判断される。堀跡は第3トレンチ南東の畑地内で確認のための小発掘か、またはボーリング調査を実施すれば、堀跡の方向を明らかにできるだろう。この堀跡の東壁はほぼ現在の畑地と水田の境界下で、西壁は茶畠と水田の境または少し西の地点にあたると考えられる。但し、第6-2トレンチ周辺では落ち込みは明らかではない。



第38図 第7次調査10トレンチ平面図



第39図 第7次調査出土遺物実測図

以上のように、これまで7回にわたる確認調査の成果を踏えて大屋敷遺跡の範囲を考えると西は古川神社境内の東辺、東は上小笠川西側を境界とする。北は旧河川の南側、南は県道小笠・掛川線から水落へ向かう道路によって限られていたと推測される。

第10表 第7次調査出土土器観察表

調査 番号	登録番号	実測 番号	出土地点 クリット トレンチ名	遺構名	器種	法 量(mm)				残存率		產地	破片数	備考
						口径	器高	底部	高台高	口	底			
7-1	827	170	6Nシテ	弥生壺	-	-	-		瓶部 66	-	-		3	白岩式
7-2	811	169	2Hシテ	弥生窓坏	-	-	90			-	1/6		1	
7-3	854	185	9Nシテ	弥生壺	136	-	-			1/7	-		3	
7-4	852	184	9Nシテ	弥生壺	-	-	70			-	1/1		5	
7-5	856	221	9Nシテ	筑恵盤窓壺	110	40	-			1/4	-		3	
7-6	841	29	6Nシテ	かわらけ	-	-	126			-	1/5		4	
7-7	847	116	6Nシテ	青磁碗	小片	-	-			-	-	中田	1	
7-8	827	26	6Nシテ	山茶碗	124	-	-			1/12	-	瀬西系	1	
7-9	828	219	6Nシテ	山茶碗	-	-	84	7		-	1/1	瀬西系	1	
7-10	810	224	1Hシテ	山茶碗	-	-	70	6		-	1/1	瀬西系	1	
7-11	816	24	6Nシテ	山茶碗	-	-	58	3		-	1/6	瀬西系	1	
7-12	809	225	1Hシテ	山茶碗	-	-	59	2		-	1/2	常滑系	1	6a型式
7-13	847	48	6Nシテ	小碗	102	23	56	4		1/10	1/12	東遠系	1	
7-14	833	27	6Nシテ	片口体I型	小片	-	-			-	-	常滑系	1	
7-15	812	228	5Hシテ	天目茶碗	114	-	(44)			1/9	-	瀬戸・美濃	2	17C後半
7-16	824	220	6Nシテ	縁輪小皿	-	-	46	-		-	1/1	瀬戸・美濃	2	占領戸 後III～前古
7-17	819	223	6Nシテ	仏龕具	-	-	67	-		-	1/4	瀬戸・美濃	1	古瀬戸 後III～前古
7-18	830	47	6Nシテ	内光皿	108	23	54	3		1/3	1/3	志戸呂	1	大4前半
7-19	861	216	6Nシテ	仏龕具	85	56	45	14		1/4	1/1	志戸呂	1	17C後半
7-20	810	103	1Hシテ	擂鉢	-	-	106	-		-	1/8	志戸呂	1	17C
7-21	822	218	6Nシテ	筒型容器	-	-	92	-		-	2/5	志戸呂	1	17C
7-22	810	222	1Hシテ	小杯	-	-	58			-	2/5	志戸呂	1	17C前半
7-23	840	28	6Nシテ	甕	496	-	-			1/16	-	常滑	1	6a型式
7-24	810	226	1Hシテ	甕	小片	-	-			-	-	常滑	1	12型式
7-25	821	217	6Nシテ	甕	-	-	136			-	1/4	常滑	1	15C～16C
7-26	818	25	6Nシテ	甕	-	-	-			-	-	常滑	1	

## 第8節 第9次調査

調査の目的 遺跡内家庭排水・畑等の排水処理のための仮設排水路工事に伴う記録保存調査

調査期間 平成5年9月25日～10月15日

調査面積 82m<sup>2</sup>

調査の経過 9月25日・26日

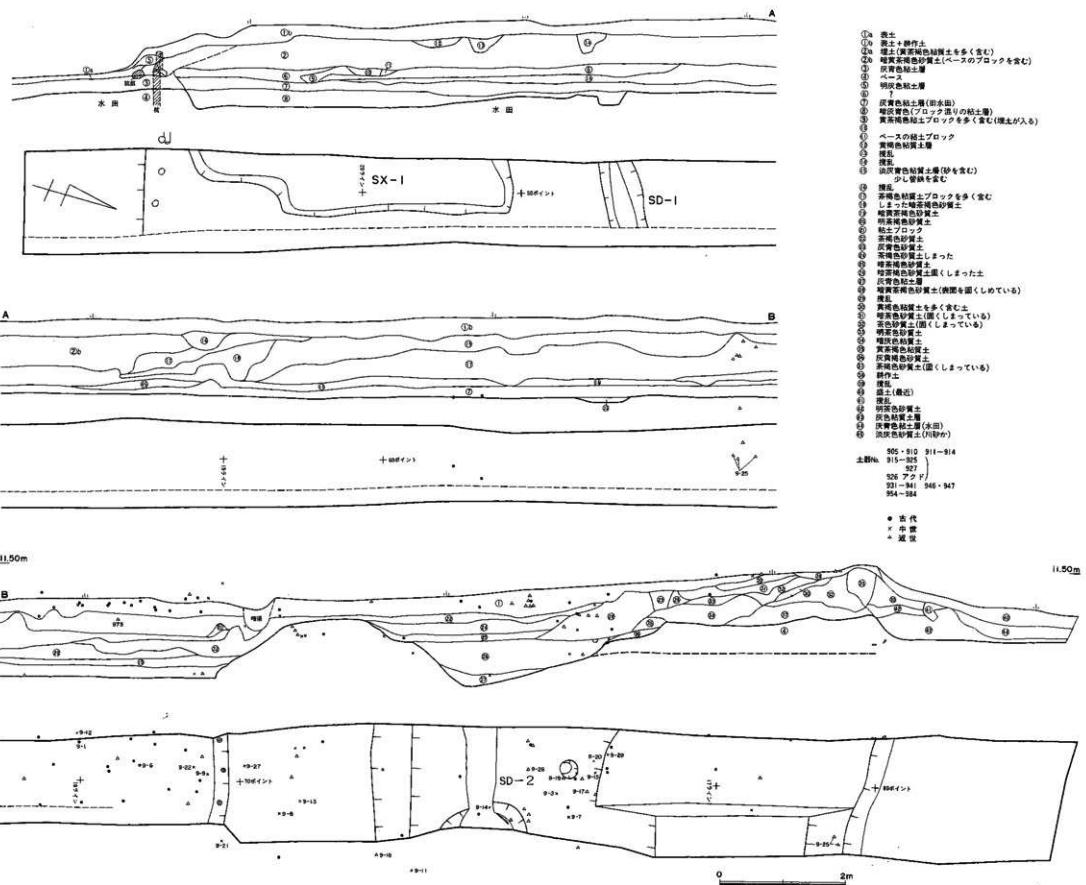
除草作業、現地測量  
27日～30日 調査区上面完掘  
10月1日～5日 土壌調査  
6日～ 計測作業  
9日 現地説明会  
13日～15日 調査区下面完掘

調査の概要（第40図～第42図）

大屋敷遺跡は、今までに8次調査が行われ土壌の外側の西・東・北の外堀と屋敷内の調査が行われてきた。今回の調査区は屋敷内の土壌南側の部分から外堀にかけての位置にあたり第9次調査とした。調査は、圃場整備事業が文化財の取り扱いについて協議中で事業が一時中断しているため、土壌が巡る屋敷内の排水と生活環境の改善をはかるため仮設排水路を設けることとなった。工事にあたり、掘削範囲を最小限に留め遺構をできるだけ保存する方向で関係者と協議し行うこととなった。そのため土壌部分は排水路の幅と狭く、すべて人力によって掘削し土層観察を中心に調査を行った。計測は、調査区に合わせグリッドを設定し調査記録した。記録は基本的に20分の1の縮尺として、遺物出土状態は光波測距儀を用いて計測し、ドットで取り上げを行った。写真撮影は3段の格子を組んで、その上から35mmと6×7版カメラを用いて行った。使用したフィルムは白黒フィルムとカラースライドを用いた。調査区は、南側土壌の北側地点から住宅境に沿う形で水田境までの全長41mに幅2mの規模で南北方向に調査区を設定した。調査区周辺は工事計画外の用地に接すると共に、地盤が軟弱のため掘削にあたり斜めに切り土したため、下層面では幅1.6mと狭くなっている。また、検出された土壌部分は静岡県教育委員会文化課の現地指導で掘削は最小限にし、工事計画の標高に努めるよう指導があったため調査幅が極端に狭くなっている。北端は土壌の内側部分で、第2次調査Gトレチ南端より5m東にあたり畠となっている。土層ではGトレチの1層と3層を基本に黄茶褐色の砂質土が厚さ20cm程盛土されている。調査区全体は畠となっているが緩やかに南に向かって傾斜している。北側は標高11.5m前後で最も高くなり、約6m南に地点で標高10.9mを測り、それより南までは平坦となり地境で1m前後低くなっている。このように表面観察では畠の耕作により現況は大きく変わっており、南の土壌がかろうじて確認できる状態である。土壌は後世の耕作によって盛土部分はかなり削平され、現在最も残存する高さで標高11.46mを測る。基盤層は4層で表土より約90cm下、標高10.6mに3m幅の平坦地形となっており、その両側に掘り込みがみられる。盛土は20cm前後の厚さで4層上面に平らに重ねて積み上げている。特に南側は丁寧な積み上げし、堅固な工法を用いて



第40図 第9次調査位置図



第41図 第9次調査平面図 - 67・68 -

いるのに対して土壘内側にあたる北側は比較的簡単な構築工法となっている。土壘内の遺物は、古代の遺物を含んでいるが少ない。土壘の南側に検出された掘り込み（SD 2）は、幅4.4mで検出面より深さ1mの規模となっている。SD 2は土層状態によると上層と下層遺構に分かれ26層上面と1度乾燥帯をもち、掘り方も二段掘りとなっている。下層遺構は26層の上面で幅3.1mを測り、下場は南側上場より北へ80cm付近と急斜面を呈し、断面がV字状に掘られている。このように掘り込みは土壘に伴う堀の機能を果たす遺構と考えられ、少なくとも2回以上改修が認められる。出土遺物では、掘り込みの遺構状態とリンクし土器は上層遺構で1層と28層にまとまっており、美濃双耳壺17、肥前染付碗19、古瀬戸描鉢20など中世の土器があり近世土器が目立つ。下層遺構では26層の下層から古瀬戸天目茶碗14、灰釉丸碗15、常滑窯29などが出土しており、中世の時期のものが主体となっている。調査区北端より南へ11mの地点は南側土壘+SD 2（堀）に続き、幅1mで平らとなっている。この平坦地は土壘の基盤層4層上面と同じ標高で同位層となっている。平坦面の南端から1.4m南で約1m落ち込み、杭で土留されている。出土遺物は上面より山茶碗8、青磁碗13が出土している。北側の畑の境にあたる地点は7層下層で標高10.6mを測り、南へ26mに至る間平らとなっている。この間、上層では耕作による攪乱はみられるものの、下層まで4~5層でまとまっており、いずれも整地層となっている。7層の下面には溝（SD 1）、不明遺構（SX 1）が検出されている。SD 1は南側に幅50cm、深さ20cmの規模で調査区に直交する形で掘り込まれている。遺物等は認められなかった。SX 1は南端の北6m付近から検出され、12cmの深さとなっている。規模は5mで竪穴状で方形な掘り方が二つ切り合う形となっており、出土遺物は特にならない。7層までの堆積土内からは、古代から近世の土器が出土している。上層の1層内からは多くの古代の土師器、須恵器が出土しており、二次堆積と考えられる。7層下層からは近世陶器が出土しており、整地層が中世以降、近世段階に大きな変化があったと推測される。南端は畑と水田の地境にあたり、地表面でも大きく段となるが、南では平らな地形となる。基本層位は1層から3層・4層の3層で4層が基盤層となっている。覆土より土器が数点出土しているが、計測できるものはなかった。調査区の出土遺物は、総点数461点すべて土器である。土器は古代が286点で全体の62%を占め、近世は135点の29.3%となっている。中世は比較的少なく40点で8.7%を数える。40点のうち舶載陶磁器の青磁蓮弁文など4点と1割を占めるほか瀬戸・美濃産や志戸呂産など大窯期の国産陶器が目立った。出土遺物より12世紀後半から13世紀までと15世紀後半~17世紀にまとまっている。今回の調査は南側の土壘を含め、今までの土壘外堀よりも規模が大きい空堀とともに空堀の南には堤状遺構など、二重の防禦遺構を備えることは今までの土壘周辺の遺構とは明らかに違いが認められる。このことは、方形に土壘を巡らした屋敷地の南側に堅固な防禦が必要であること、すなわちこの城館の正門部分にあたるためと推測される。土壘の南外側は、平坦な地形であり堆積状態より沖積地であったようである。この沖積地は近世段階に整地し地形を大きく変貌させ、その後、耕作地へと移行していくと考えられる。今回の調査区周辺は土壘を巡らす空間構造の外側にあたり、古川神社との境に広がる沖積地である堀遺構のほか、特別な城館遺構はなく、この地点のもつ意義を今後面的調査によって明らかになるものであろう。

※ 木製品の14C年代測定（パリノ・サーヴェイ株式会社）

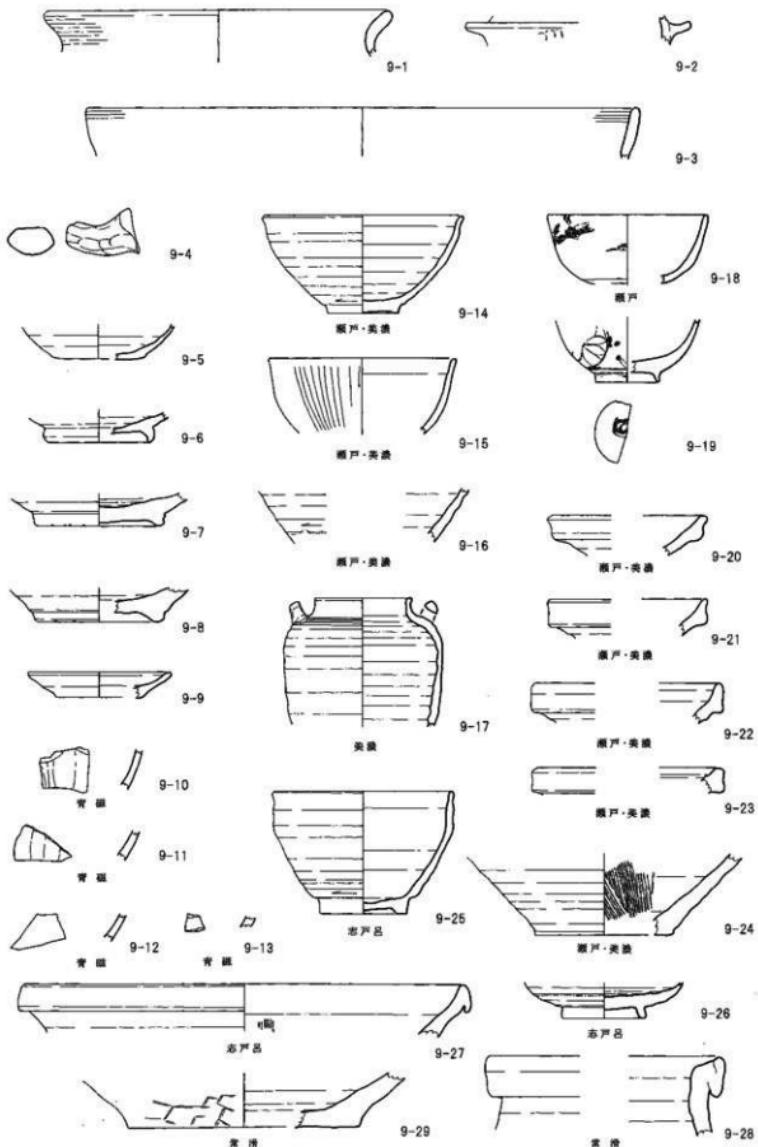
①掘り込み（SD 2）下層出土木製品

②土溜用杭

試料番号	年代（1950年よりの年数）	
1	700±70	A.D. 1250
2	100±50	A.D. 1850

第11表 第9次調査出土土器観察表

団版番号	登録番号	実測番号	出土地点 グリット、 トレンチ名	器種	法 量 (mm)				残存率	施地	破片数	備考	
					L径	器高	底径	高台高					
9-1	953	38		土師器壺	216	-	-		1/12	-	1		
9-2	902	30		羽釜	小片	-	-		-	-	1		
9-3	931	35	SD-2	土師器鍋	340	-	-		1/20	-	2		
9-4	902	32		土師器瓶	小片	-	-		-	-	1		
9-5	923-927	34		かわらけ	-	-	58		-	1/3	3	近世	
9-6	960	40		灰釉碗	-	-	64	7	-	1/3	1		
9-7	991	42	SD-2	山茶碗	-	-	80	4	-	4/5	湘西系	1	
9-8	979	41		山茶碗	-	-	80	6	-	1/4	湘西系	1	
9-9	954	39		小皿	88	15	54		1/12	1/12	東進系	1	
9-10	903	117		青磁蓮弁文鏡	小片	-	-		-	-	中国	1 B I類	
9-11	965	119		青磁蓮弁文鏡	小片	-	-		-	-	中国	1 B II類	
9-12	955	118		青磁蓮弁文鏡	小片	-	-		-	-	中国	1 B III類	
9-13	983	120		青磁碗	小片	-	-		-	-	中国	1	
9-14	990	59	SD-2	天目茶碗	124	61	44	5	1/3	1/1	瀬戸・美濃	1 大1	
9-15	993	87	SD-2	灰釉丸瓶	116	-	-		1/8	-	瀬戸・美濃	1 大1	
9-16	902	31		直線大皿	小片	-	-		-	-	瀬戸・美濃	1 占瀬戸後Ⅲ	
9-17	937	57	SD-2	双耳壺	60	-	-		体部 98	1/2	-	美濃	3 18C前
9-18	917	33		榮作碗	100	-	-		1/4	-	瀬戸	3 19C前	
9-19	936	36	SD-2	榮作碗	-	-	40		-	1/2	肥前	3 18C	
9-20	911	95	SD-2	擂鉢	小片	-	-		-	-	瀬戸・美濃	1 大1後半	
9-21	980	97		擂鉢	小片	-	-		-	-	瀬戸・美濃	1 大2後半	
9-22	910	94		擂鉢	小片	-	-		-	-	瀬戸・美濃	1 大2後半	
9-23	901	93		擂鉢	小片	-	-		-	-	瀬戸・美濃	1 大4前半	
9-24	918	96		擂鉢	-	-	86		-	1/16	瀬戸・美濃	1 大3~大4	
9-25 945-950-957	944-945-958	土呂	天目茶碗	112	76	54	3		1/2	1/1	志戸呂	7 17C前半	
9-26	920	56		皿	-	-	52	6		1/3	志戸呂	1 17C	
9-27	976	104		履鉢	128	-	-		1/16	-	志戸呂	1 大3後半	
9-28	930	215		甕	小片	-	-		-	-	常滑	2 6a型式(占)	
9-29	940	37	SD-2	甕	-	-	144		-	1/6	常滑	1 15C~16C	



第42図 第9次調査出土遺物実測図

## 第V章 まとめ

### 調査の成果と出土遺物

今回の報告書では、調査次ごとに調査成果をまとめたため、ここでは総括して概観してみよう。

①遺跡の年代は弥生時代から中世までの複合遺跡で、継続的な遺跡である。弥生時代は第6次調査によって中期の土器が、北地区の北側拡張土壘内と下層面から一定量出土している。遺構は東地区ではほぼ完形な壺58が単独で検出されており土器棺と考えられ、周間に住居跡の存在を想定させるもので、この時期に当地が初めて生活域となったものと考えられる。上小笠川流域では内田地区の政所本屋敷遺跡、下内田地区耳川遺跡など中期の中核的な集落の一端を担うもので、この流域に弥生文化が芽生え定着した時期であったと言える。

古墳時代では第2次・第6次調査で中期から後期前半の遺物及び遺構が認められた。特に第6次調査において旧路の岸辺地点で検出された土器溜が注目される。土器溜からは須恵器坏蓋・坏身・甕・壺や土師器坏・高坏・甕・壺、裝身具の管玉がまとまって出土している。坏類や甕などの食生活用具に直接関連する器種以外に甕や装身具など祭祀性をもつ遺物を含んでいるほか、高坏の器種比率が一般的な住居跡の出土量より高いなど、水辺の祭りに関連する遺構である。出土土器は、坏類では坏身3・4が最大径15cm以下と小形で受部が水平に横に延び口縁立ち上がりが極めて長く、削り調整は体部の広い範囲にわたり丁寧に施している。これらの特徴よりTK47平行の土器であり5世紀末段階の古手のものである。6世紀になると坏身5に見られるように大型で口縁端部を面取りし段をなすなど、細部に特徴があり坏身5(MT15)→坏蓋1(TK10)→坏身6(TK209)の順となっている。甕8は小型なもので口縁部は短く、体部から底部にかけて手持ちヘラ削りが施されるなどTK47平行の土器である。土師器の坏はMT15平行段階に出現し、TK10・TK43平行に盛行する模倣坏が見当たらず、すべて半円形状で口縁部を直立又は内弯させるものでTK47～TK10平行期の範囲と思われる。高坏は代表されるように坏部は大半部で屈折させ、口縁部はカーブを描き外反させる28や直線的に外側に延びる31などがみられる。全体的形状は前期の系譜を引くもので、古い様相が残る。甕47～53は、くの字に折れ直線的に外反する口縁部のものや緩やかに外反するものが存在する。甕は口縁端部は外側に折り返し縁帶条となるもので体部は丸味のある筒状となる。体部外面にハケ調整する54と外面にケンマ調整が施される55が出土している。土師器は特定の年代を限定することは難しいものの、5世紀の古い様相の中に新しい特徴が加わったもので、須恵器の編年に対比される5世紀末から6世紀前半の時期として捉えることができよう。今回、検出した土器溜のように土器を一括投棄し、水辺の祭り儀礼を行うことは古墳時代以降、河道敷や沖積地に各地にみられる。5世紀を代表する浜松市山ノ花遺跡、恒武西宮・西浦遺跡をはじめ、6世紀から中世にかけての静岡市大谷川遺跡・神明原・元宮川遺跡などの祭祀遺構が確認されており、各時期において祭祀の方法や祭祀具が徐々に変容していく様子が窺える。当遺跡は古墳時代中期末～後期の祭り祭祀の一例となりうるものであろう。

②中世の時期は当遺跡が最も注目されることとなった城館遺跡である。遺跡は確認調査によって北から東、さらに南東は旧河道まで、西は古川神社境内に至る範囲が東西150m×南北200mの総面積30,000m<sup>2</sup>と判断される。施設としては、方形に巡らす土壘によって5,000から6,000m<sup>2</sup>の内を区画し、土壘の西側の沖積地が堀として設けている。さらに旧河道が自然の要害としての堀の役割を担うなど防禦上の配慮を持つ城館となっている。このような空間構造を備えた遺構は社会的地位の高い人物の居館、信仰的な空間、政治・経済的施設などが考えられる。静岡県内において旧河道を配した中に土壘で囲まれた方形の区画をもつ事例として裾野市に葛山氏によって築かれた葛山館がある。この館は大久保

川沿いに100m四方を幅15m、高さ3~4mの土塁で囲まれ、東と北側に幅10mの堀を備えたもので高田大屋敷遺跡に最も形状が近いものである。近隣では浅羽町の十二所遺跡が報告されているが、これは信仰的な施設と推測される。また、同町に所在する四方を土塁を巡らす浅羽庄司館がみられる他は具体的な事例はない。よって中世城館造構の特徴を良く残す遺跡として貴重となっているのである。

遺物は今回の調査では、ほとんどが土器となっている。土器は総点数で13,911点を数え、中世以前13,120点で93.8%を占め、中世以降379点で2.7%と中世以外は96.5%と圧倒的に多い。出土遺物の分類は別紙表にまとめ、調査次ごと、さらに各トレンチ及びグリットごとにまとめたので、それを参照して戴きたい。中世の土器についてみると全体の3.5%の492点となっている。その内、山茶碗・小皿・小碗など無釉陶器の山茶碗類の土器が325点で66%、次いで国産施釉陶器が68点で13.8%、舶載陶磁器19点で3.8%となっている。土師器ではかわらけや鍋など22点で4.5%と比率は低い。これらを時期別に器種を見てみると12世紀から13世紀は山茶碗類の山茶碗・小皿・小碗、常滑窯・瀬戸・美濃産入子、舶載陶磁の青磁碗・白磁皿で圧倒的に山茶碗を主体にする雜器で菊川流域の中世前期の様相を反映するものである。14世紀後半から15世紀後半は瀬戸・美濃産の碗皿類、天目茶碗・盤類・擂鉢が一定量出土しているが、15世紀後半が主体となっている。また、舶載陶磁器は青磁碗・白磁皿が出土しているものの、13世紀の製品に比べ出土量は少なく、碗皿類に限定される。15世紀末から16世紀前葉は瀬戸産のほか志戸呂産の擂鉢や壺・瓶類が出土し、従来の瀬戸・美濃産との補完関係にあり、当地域の窯業生産の成立の背景を語っているものである。また、舶載陶磁器の染付製品が出土していない点は、この遺跡の性格を知る重要なポイントであり、画期となっている。そして16世紀後半から17世紀になると瀬戸・美濃産は擂鉢だけとなり、地元の志戸呂や初山産の製品が主力となり、瀬戸・美濃産の不足

調査年次	番号	器種	点数	分類	遺構・地区	備考
1	3	青白磁 合子	1	-	4グリット	耕作土
1	3	青磁 蓋弁文碗	1	B 1	4グリット	耕作土
1	6	* 蓋弁文碗	2	B 1	3グリット	3層覆土
1	17	* 蓋弁文碗	1	B 1	1グリット	1層
2	52	青磁 花文碗	2	A 2	Cトレンチ	3層
2	128	* 磁紋碗	1	D 2	Gトレンチ	15世紀前半 表土
2	42	* 碗	1		Bトレンチ	表土
2	203	白磁 口丸皿	1	IX	Hトレンチ	表土
2	280	* 皿	1	B耕	Hトレンチ	15世紀前半 2層覆土
3	686	青磁 花文碗	1	A 2	2トレンチ	
6	714	青磁 蓋弁文碗	1	B 4	北側	覆土
6	748	白磁 口丸皿	1	IX	土器内	
7	847	青磁 痕	1	-	6トレンチ	最下層
9	903	青磁 蓋弁文碗	1	B 1	トレンチ	上面覆土
9	965	* 蓋弁文碗	1	B 1	土器内	
9	965	* 蓋弁文碗	1	B 1	上層内	
9	983	* 碗	1	-	80区	
計			19			

第12表 調査年次別出土舶載陶磁器分類表

第13表 出土遺物分類表

調査年次	調査面積 ( )	調査面積 面積 ( )	出土土器分類表(破片数)									
			古代			中世			近世			
第1次調査 (昭和63年度)	23.4m <sup>2</sup>		608 (81.2%)			90 (12.0%)			51 (6.8%)			
			山茶碗	小瓶	小皿	常滑・瀬美	瀬戸・美濃	初山・志戸呂	中国	土師器		
			(90)	38	2	15	4	11	7	5	7	1
第2次調査 (昭和63年度)	329.8m <sup>2</sup>		古代			中世			近世			
			3,692 (92.9%)			217 (5.4%)			66 (1.7%)			
			山茶碗	小瓶	小皿	常滑・瀬美	瀬戸・美濃	初山・志戸呂	中国	土師器		
第3次調査 (平成2年度)	220m <sup>2</sup>		古代			中世			近世			
			891 (87.7%)			78 (7.7%)			47 (4.6%)			
			山茶碗	小瓶	小皿	常滑・瀬美	瀬戸・美濃	初山・志戸呂	中国	土師器		
第4次調査 (平成2年度)	113m <sup>2</sup>		古代			中世			近世			
			7 (87.5%)			1 (12.5%)			0			
			山茶碗	小瓶	小皿	常滑・瀬美	瀬戸・美濃	初山・志戸呂	中国	土師器		
第5次調査 (平成2年度)	61.2m <sup>2</sup>		古代			中世			近世			
			4 (66.7%)			0			2 (33.3%)			
			山茶碗	小瓶	小皿	常滑・瀬美	瀬戸・美濃	初山・志戸呂	中国	土師器		
第6次調査 (平成2年度)	396m <sup>2</sup>		古代			中世			近世			
			7,310 (98.6%)			39 (0.5%)			64 (0.9%)			
			山茶碗	小瓶	小皿	常滑・瀬美	瀬戸・美濃	初山・志戸呂	中国	土師器		
第7次調査 (平成3年度)	263.2m <sup>2</sup>		古代			中世			近世			
			322 (88.7%)			27 (7.4%)			14 (3.9%)			
			山茶碗	小瓶	小皿	常滑・瀬美	瀬戸・美濃	初山・志戸呂	中国	土師器		
第8次調査 (平成5年度)	82m <sup>2</sup>		古代			中世			近世			
			286 (62.0%)			40 (8.7%)			135 (29.3%)			
			山茶碗	小瓶	小皿	常滑・瀬美	瀬戸・美濃	初山・志戸呂	中国	土師器		
合計	1488.6m <sup>2</sup>		古代			中世			近世			
			13,120 (93.8%)			492 (3.5%)			379 (2.7%)			
			山茶碗	小瓶	小皿	常滑・瀬美	瀬戸・美濃	初山・志戸呂	中国	土師器		
			(492)	241	33	51	47	56	12	19	22	11

第14表 調査年次別出土土器分類表1

第1次調査

グリット名	面 積(m <sup>2</sup> )	総点数 ( )中世分	中 世								
			山茶碗	小碗	小皿	常滑・瀬美	瀬戸・美濃	若山・志戸呂	中国	土師器	その他
第1	4.0	16(1)								1	
第2	3.8	46(1)	1								
第3	4.0	75(2)	10	2	3		2		2	1	1
第4	3.6	218(47)	15		9	4	7	6	2	4	
第5	4.0	346(8)	4		2		2				
第6	4.0	48(12)	8		1			1		2	
合 計	23.4	749(90)	38	2	15	4	11	7	5	7	1

第2次調査

トレンチ名	面 積(m <sup>2</sup> )	総点数 ( )中世分	中 世								
			山茶碗	小碗	小皿	常滑・瀬美	瀬戸・美濃	若山・志戸呂	中国	土師器	その他
Aトレンチ	129.4	794(20)	8	1	5	3	3				
Bトレンチ	30.3	247(29)	15	2	1		4		1	4	2
Cトレンチ	87.0	538(69)	35	6	8	7	11		2		
Dトレンチ	18.0	50(5)	2		1	1	1			1	
Eトレンチ	4.3	41(9)	5		1						
Fトレンチ	32.4	1369(45)	24	2	4	3	10	1			1
Gトレンチ	17.8	30(5)		1	1	1	1		1		
Hトレンチ	10.6	306(38)	16	8		5	3		2	2	
合 計	329.8	3,975(217)	106	20	21	20	33	1	6	7	3

第3次調査

グリット名	面 積(m <sup>2</sup> )	総点数 ( )中世分	中 世								
			山茶碗	小碗	小皿	常滑・瀬美	瀬戸・美濃	若山・志戸呂	中国	土師器	その他
第1	180.0	953(67)	42	5	7	8	1	1			4
第2	40.0	63(1)	5		1	1	1		1	1	
合 計	220.0	1,016(78)	47	5	8	9	2	1	1	1	4

第4次調査

トレンチ名	面 積(m <sup>2</sup> )	総点数 ( )中世分	中 世								
			山茶碗	小碗	小皿	常滑・瀬美	瀬戸・美濃	若山・志戸呂	中国	土師器	その他
Aトレンチ	22.0	20(1)									1
Bトレンチ	7.0										
Cトレンチ	17.0	6(0)									
Dトレンチ	34.0										
Eトレンチ	3.5										
Fトレンチ	5.0										
Gトレンチ	4.0										
Hトレンチ	4.5										
Iトレンチ	2.0										
Jトレンチ	14.0										
合 計	113.0	8(1)									1

第15表 調査年次別出土土器分類表2

第5次調査

グリット名	面積(m <sup>2</sup> )	総点数 ( )中世分	中世								
			山茶碗	小碗	小皿	常滑・瀬戸	瀬戸・美濃	碧山・志戸呂	中国	土師器	その他
Kトレンチ	10.0										
Lトレンチ	25.0	6(0)									
Mトレンチ	32										
Nトレンチ	10.0										
Oトレンチ	12.0										
合計	61.2	6(0)									

第6次調査

地区名	面積(m <sup>2</sup> )	総点数 ( )中世分	中世								
			山茶碗	小碗	小皿	常滑・瀬戸	瀬戸・美濃	碧山・志戸呂	中国	土師器	その他
北地区	158.0	1,030(19)	10	2	2	1			2		2
東地区	238.0	6,383(20)	18	1	1						
合計	396.0	7,413(39)	28	3	3	1			2		2

第7次調査

トレンチ名	面積(m <sup>2</sup> )	総点数 ( )中世分	中世								
			山茶碗	小碗	小皿	常滑・瀬戸	瀬戸・美濃	碧山・志戸呂	中国	土師器	その他
1トレンチ	34.0	41(6)	2			4		2			
2トレンチ	14.6	11(0)									
3トレンチ	11.2										
4トレンチ	8.6										
5トレンチ	4.7										
6-1トレンチ	23.0	81(18)	7	1		2	2		1	4	1
6-2トレンチ	17.6										
7トレンチ	34.0										
8トレンチ	31.7										
9トレンチ	27.0	217(0)									
10トレンチ	56.8	13(1)	1								
合計	263.2	363(27)	10	1		6	2	2	1	4	1

第9次調査

トレンチ名	面積(m <sup>2</sup> )	総点数 ( )中世分	中世								
			山茶碗	小碗	小皿	常滑・瀬戸	瀬戸・美濃	碧山・志戸呂	中国	土師器	その他
	82.0	461(40)	12	2	4	6	8	1	4	3	

総合計	面積(m <sup>2</sup> )	総点数 ( )中世分	中世								
			山茶碗	小碗	小皿	常滑・瀬戸	瀬戸・美濃	碧山・志戸呂	中国	土師器	その他
	1488.6	13,991(492)	241	33	51	47	56	12	19	22	11

第16表 調査年次別中世国産施釉陶器一覧表

調査年	番号	器種	点数	時期	出土地	調査年次	番号	器種	点数	時期	出土地	調査年次	番号	器種	点数	時期	出土地
第1次調査																	
1	9	桶鉢	2	後晉	志門口	2	190	天日茶碗	3	大1	桶戸	第3次調査					
1	3	桶鉢	1	大3後半	志門口	2	77	天日茶碗	1	後期	古瀬戸	3	552	桶鉢	1	後W	志門口
1	15	燈	1	後IV	志門口	2	154	天日茶碗	1	後III~V古	古瀬戸	3	402	天日茶碗	1	後期	古瀬戸
1	3	天日茶碗	1	大4	志門口	2	44	天日茶碗	1	後I~II	古瀬戸	3	666	折沿盤	1	後IV古	古瀬戸
1	2	天日茶碗	1	後晋	古瀬戸	2	167	天日茶碗	1	大1~2	古瀬戸	7	810	桶鉢	1	後IV	志門口
1	8	天日茶碗	1	大3後半	初山	2	277	皿	1	大3後半	初山	7	820	内乳皿	1	大4後半	志門口
1	1	天日茶碗	1	大3後半	初山	2	121	小壺	1	大1	瀬戸	7	819	弘輪片	1	後I	古瀬戸
1	8	灰陶蓋小瓶	1	後I~II	古瀬戸	2	52	花瓶	1	後期	古瀬戸	7	824	桶鉢小皿	1	後III~V古	古瀬戸
1	8	桶鉢	1	後期	古瀬戸	2	343	盛鉢	1	後I~II	古瀬戸	9	919	古瀬戸	9	901	桶鉢
1	1	桶鉢	1	後期	古瀬戸	2	199	盆鉢	1	後III~V古	古瀬戸	9	901	桶鉢	1	大4後半	古瀬戸
1	32	盤	1	後II~III	古瀬戸	2	52	盤	1	後期	古瀬戸	9	918	桶鉢	1	大3~4	古瀬戸
1	5	盤	1	後期	古瀬戸	2	52	盤	1	後期	古瀬戸	9	911	桶鉢	1	大1後半	古瀬戸
1	12	瓶	1	後期	古瀬戸	2	125	折沿深皿	1	中期	古瀬戸	9	910	桶鉢	1	大2後半	古瀬戸
1	8	盤	1	後I	古瀬戸	2	51	折沿深皿	1	中期	古瀬戸	9	980	桶鉢	1	大2後半	古瀬戸
1	9	瓶	2	後I~II	古瀬戸	2	44	桶鉢小皿	1	後III	古瀬戸	9	976	桶鉢	1	大3後半	志門口
1	2	桶鉢小皿	1	後III~V古	古瀬戸	2	203	桶鉢小皿	1	後I	古瀬戸	9	990	天日茶碗	1	大1	瀬戸
第2次調査																	
2	52	桶鉢	1	後V新	古瀬戸	2	39	灰陶平鍋	1	後I古	古瀬戸	9	993	灰陶丸鍋	1	大1	瀬戸
2	149	桶鉢	1	後~大	古瀬戸	2	51	人子	1	中I~II	古瀬戸	9	902	折沿深皿	1	後V古	古瀬戸
2	44	桶鉢	1	火	古瀬戸	2	58	灰陶不明	1	中期	古瀬戸	小計			68		
2	109	桶鉢	1	後V~大1	古瀬戸	2	214	細目特大皿	2	後V新	古瀬戸						

第17表 高田大屋敷遺跡出土器種編年表

器種	時 期				1200				1300				1400				1500				1600			
	古瀬戸前期				中 期				後 期				大窓期											
	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI
山茶碗																								
小鏡																								
小皿																								
青磁碗																								
青磁皿																								
白磁碗																								
白磁皿																								
漁人・美濃 天目																								
碗類																								
皿類																								
盤類																								
鉢皿																								
壺・瓶類																								
神仏具																								
鉢類																								
小壺・ 小瓶類																								
入子																								
志戸呂 天目																								
碗類																								
皿類																								
鉢皿																								
壺・瓶類																								
初山 天目																								
皿類																								
常滑 甕																								

分を補完した構図となっており、瀬戸・美濃産の生産流通と当地域の消費量が密接に関わっていたものと考えられる。さらに国産陶器と競合関係にあった舶載陶磁器の出土量は、特に突出したものでなく一般的である。以上のように遺物から13世紀～14世紀前半および15世紀から16世紀前葉の二時期に分期をみることができよう。今回の調査資料がすべてこの遺跡を反映しているものではないが、器種組成に偏りがあり、周辺の中世遺跡の消費状況を見極めながら性格を論ずることが必要であろう。

### 大屋敷遺跡の歴史的位置づけ

大屋敷遺跡から出土した遺物は、13世紀～14世紀前半および15世紀～16世紀にまとまりが認められる。このことは当遺跡がこの時期に一定の生活空間として利用されたことを意味している。当該期の大屋敷遺跡が、この地域の中世世界においていかなる位置づけであったかを検討してみたい。

前半期にあたる13世紀～14世紀前半については、内田家文書が伝えられており、御家人内田氏の存在が確認される。この内田氏に関する研究については大山喬平が8次調査の際に分析を加えている（『遠州御家人内田氏の史的考察－内田家文書と侯賀家文書を中心に－』〔菊川町教育委員会「高田大屋敷遺跡 第8次発掘調査報告書」1993〕）。この成果に導かれて、大屋敷遺跡に関する論点を列挙すると下記のようになる。

①内田氏の先祖はおそらく平安時代の末にこの地に進出しており、内田氏はこれを、平安時代以来の本領として、幕府によって安堵された本領安堵の地頭だったのである。

②『源平盛衰記』に見える「内田三郎家吉」は「致」の字を通字とする下郷内田氏とは異なる系統の名前であり、また『吾妻鏡』に見える「内田四郎」も致茂の「三郎」とは違う人物のようで、承久合戦当時、内田氏は四郎・三郎があい並んで合戦に参加していたものとみてよいであろう。下郷内田氏とともに上郷内田氏がいて、むしろ後者の方が本来の惣領家だったのではなかろうか。内田氏を名乗りながら莊内では下郷の狭い範囲から出られなかった下郷内田氏のその後の歴史から判断して、そのように考えられる。

③南北朝内乱が始まった時には、まだ遠江で活躍していた内田到景は建武5年（1338）～康永元年（1342）の間に5世代ないしそれ以上におよぶ父祖の地遠江の所領を実質上放棄して、石見に移っていました。以上によって伊豆から来て、石見へ去った遠江国御家人としての歴史は終了する。

このうち、②の視点については新井孝重『武藏藤原内田之系譜』考（日本歴史第607号 1998）が、上郷内田氏の系譜の検討を行い、研究を発展させていることは注目したい。

内田家文書に見える「内田庄下郷」であるが、大屋敷遺跡の所在地は菊川町下内田であることから、本遺跡を「内田庄下郷」の比定地として考えるのは妥当であろう。すなわち、文書においても長く見て康永元年（1342）までの存続ということになるため、発掘調査で確認された終末期の年代観と合致することとなる。

また起源であるが、内田家文書における「内田庄下郷」の初見が嘉禎二年（1236）とあることから、同じく考古学的年代観に即応しよう。ただし、大山氏は①に示したごとく、平安末期以来の開発領主を想定していることから、この点については課題を残すことになる。

以上のように文献資料によって鎌倉期内田氏の影響があった地域であり、当該遺跡もその影響下であったことはまず間違いないだろう。

ところで、この時期以降室町時代まで菊川東岸には御家人横地氏の所領があった。「奥横地」「東横地」「西横地」の大字が谷に沿って東西一列に並んで所在しており、地名から考えて横地氏の本拠地であることは動かない。この名字の地を中心とした広がりがどうなっていたのか。東は横地の谷奥まで。

山を隔てた東は現在の小笠町であり、当時も莊園公領の帰属が異なると推定されることから、恐らくは別の領主の所領となる。反対の西は菊川の河川を境とし、西岸は内田庄となり、内田氏の所領となる。北側については、河村庄との関連ということになる。しかし現在のところ、横地氏が河村庄に関わった事実ではなく、河村庄は横地氏の領域外と考えられる。但し、横地の谷と繋がる牛渕川沿いの大字神尾（かんのお）について微妙である。南側であるが、菊川町に南接する小笠町下平川について、横地氏の所領であった文献資料から可能性が指摘できる。横地の名字の地を中心にやや南北に広がる可能性が窺えたが、横地氏の中心所領は郡規模にまで広がることはなきそうで、隣接する勝間田氏が勝田庄を領していたことなどに比べると中心となる所領の規模は極めて小さい。恐らくは横地氏の所領は、この名字の地の中心所領に加えて、他所にある散在所領から成っていたと考えられる。

そして、関連する文書から横地氏を鎌倉及び京都において武芸を以て直接に將軍に奉公する武士であったことが確認できた。この点に所領構成の状況を加味したときに、横地氏は15世紀中頃迄は在地で一円的な領域＝「領」を構成する方向性を指向していなかったと考えられる。どちらかといえば、莊園公領制の枠の中で、將軍の傘下にあることによって自らの存在を得ていた、という存在であった。

しかし、横地氏は東遠江の代表的な武家であり、室町期においては奉公衆をも勤める一族である。軍勢動員を考えた際、莊園制所領以外の権限も想定する必要がありそうである。

そこで注目されるのが次の内田家文書の史料であり、内田氏に対しては軍事指揮権を行使していることが確認される。

（史料） 円阿軍忠状写 益田到知付書写

此前紙切テ無之

〔印カ〕

固阿軍忠事、

〔田〕紙切テ文字無之

右、去自九月十六日、令馳參御方、屬横地・勝申手、

文字同

付着到致軍忠訖、而今奉属大将御手

（城制部）

（通知部）

文字同

并横地・丸崎・氣多城御共仕、一城戸役

前二同

勤仕上者、宛賜御判、為備向後亀鏡、恐々言

如件、

建武三年十月 日

承了、

■■判（花押影）

承了

建武三年（一三三六）十月、内田一族の円阿が同年の九月十六日以来の軍忠を申請した文書の写。署判者は不明。

内田一族の円阿は横地・勝間田両氏に従い、横地城ほかの警固にあたっていることが確認できる。軍事指揮権は、勝間田氏と補完しつつ、所領支配以外にまで及んでいることをこの事例に見ることができる。

横地氏の存在形態は、莊園制の影響力の低い東国の一円的な領域形成をした武家とは著しく異なることを先に指摘した。軍事指揮権のような所領支配以外の側面も重視して、横地氏に領域を評価しないと、本質地の意味を十分に理解し得ないことになる。

逆説的に言えば、横地氏が攻められた際、彼らは内田氏などの近隣の助力を必須としたいたといえるのではなかろうか。

以上のように横地氏の存在形態は内田庄などの周辺にまで影響力をもって存在していたのである。

従来的な領主制論の評価を軸に、領主をその家だけで把握するだけでは、地域の歴史像としての領主は語れなくなってきた。今後は、同時代に併存する多様な存在（遺跡・寺社・領主・集落など）を全体的に関連させて地域史を復原する努力が求められる。

今、求められているのは、単線的な地域像ではなく、多様で一見すると複雑な地域像であろう。それが地域性に繋がっているのではなかろうか。

残る後半期であるが、大屋敷遺跡はどのように評価できるであろう。

残念ながら14世紀後半以降の内田庄下郷の詳細について語る文書は見あたらない。従って多くを語ることはできないが、遺跡は確実15世紀～16世紀に存在していたことを物語っている。従って、文献史料からの歴史像の復元は今後の課題とせざるを得ない。

しかし、先に横地氏の影響力があったことを述べた。この視点を踏まえた時、内田氏が石見国へ西遷したのち、内田庄下郷について横地氏が関係していたことも想定しなければならない。少なくとも横地氏は文明八年（1476）に滅亡するまでは、この地に勢力を誇っていた。大屋敷遺跡に影響を与えていたことは間違いかろう。

遺物の年代観と文献でとらえた様相の相対的関係は、矛盾無く地域の歴史像を浮かび上がらせている。この遺跡の持つ重要性は、もはや現在まで保存された方形の土塁を巡らす館跡だけではない。文献史料と学際的に中世史を語る地域を語る注目できる事例であり、さらには地域における領主の存在形態について、学問的にも新たな視点を投げかける重要な遺跡といえよう。

おわりにあたり、昭和63年の第1次調査からはじまった調査も15年が過ぎ、本年報告書を刊行する運びとなった。その間、昭和から平成と年号も変わり、年月の経つのが早かったを感じた。当初、高田大屋敷遺跡の重要性の認識が浅く、調査方法や成果について正確に把握することができないまま数回に及ぶ調査を行っていたことが整理作業を進める中で痛感した。そのため、今回の報告書の内容がどれだけ当遺跡の性格を反映しているものか疑問が残ると言わざるをおえない。当遺跡については今後の調査にその課題をゆだねたい。本原稿をまとめるにあたって、向坂鋼二、小野正敏、藤澤良祐、中野晴久、大山喬平、小笠原好彦、田辺昭三、鈴木敏則、松井一明、加藤理文、河合修、溝口彰啓、原廣志、桃崎祐輔の諸氏から御教示、指導を戴いた。なお、斎藤慎一氏にはまとめにあたり文献資料や原稿の推敲と格別な御配慮をたまわり末尾ながら深く感謝申し上げます。

## 参考文献

菊川町教育委員会 1993 高田大屋敷遺跡－第8次発掘調査報告書－

菊川町教育委員会 1999 横地城跡－総合調査報告書－

菊川町教育委員会 2000 横地城跡－資料編－

(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1987 大谷川II（本文編）

袋井市教育委員会 1994 坂尻遺跡

鈴木敏則 2001 須恵器生産の出現から消滅 第1回東海土器研究会

「湖西窯古墳時代須恵器縦年の再構築」

## 報告書抄録

書名	たかだおおやしき 高田大屋敷遺跡発掘調査							
副書名	第1次～第7次・第9次調査							
卷次								
シリーズ名	菊川町埋蔵文化財報告書							
シリーズ番号	第71集							
編著者名	塙本和弘、大澤正己、加藤芳朗							
編集機関	菊川町教育委員会							
所在地	〒439-8650 静岡県小笠郡菊川町堀之内61 TEL0537-35-0953 36-3694							
発行年月日	西暦 2004年1月9日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかだおおやしき 高田大屋敷 遺跡	小笠郡菊川町 下内田字高田	44699	164	34度 38分 8秒	138度 04分 50秒	第1次 19880801 ～19880916 第2次 19881128 ～19881224 第3次 19900604 ～19900720 第4次 19901029 ～19901030 第5次 19901127 第6次 19901215 ～19910121 第7次 19910816 ～19910921 第9次 19930925 ～19931015	23.4m <sup>2</sup> 329.8m <sup>2</sup> 220m <sup>2</sup> 113m <sup>2</sup> 61.2m <sup>2</sup> 396m <sup>2</sup> 263.2m <sup>2</sup> 82m <sup>2</sup>	圃場整備事 業に伴う確 認調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡		主な遺物		特記事項	
高田大屋敷 遺跡	城館跡	弥生～中世	溝、柱穴、土星、 土器窪		須恵器・土師器・ 小皿・灰釉陶器 船載陶磁器・石器 弥生土器・鉄製品			

※経緯度・座標値は「使用測地系 日本測地系(改正前)」

### 高田大屋敷遺跡発掘調査報告書

(第1次～第7次・第9次調査)

2004年1月9日 発行

編集 静岡県菊川町教育委員会

発行 静岡県菊川町教育委員会

0537-35-0953 36-3694

印刷 中部印刷株式会社

大屋敷遺跡平面図

縮尺=1:300



# 写 真 図 版

## 写真図版目次

写真図版1	調査地区空中写真	写真図版29	A.第6次調査北地区上面完掘
写真図版2	A.第1次調査1グリット調査前 B.第1次調査1グリット完掘	写真図版30	B.第6次調査北地区下面完掘
写真図版3	A.第1次調査2グリット調査前 B.第1次調査2グリット完掘	写真図版31	A.第6次調査北地区上层
写真図版4	A.第1次調査3グリット調査前 B.第1次調査3グリット完掘	写真図版32	B.第6次調査北地区土壌遺物出土状態
写真図版5	A.第1次調査3グリット東面土層 B.第1次調査3グリット南面土層	写真図版33	A.第6次調査北地区上层遺物出土状態
写真図版6	A.第1次調査4グリット調査前 B.第1次調査4グリット完掘	写真図版34	B.第6次調査北地区土壌遺物出土状態
写真図版7	A.第1次調査5グリット調査前 B.第1次調査5グリット完掘	写真図版35	C.第6次調査北地区土壌調査風景
写真図版8	A.第1次調査5グリット遺物出土状態 B.第1次調査5グリット遺物出土状態	写真図版36	D.第6次調査北地区西側調査風景
写真図版9	A.第1次調査6グリット調査前 B.第1次調査6グリット完掘	写真図版37	E.第7次調査1トレンチ完掘
写真図版10	A.第2次調査Aトレンチ西側完掘 B.第2次調査Aトレンチ東側完掘	写真図版38	F.第7次調査1トレンチ土層東側
写真図版11	A.第2次調査Aトレンチ西側土壌面 B.第2次調査Aトレンチ西側土壌	写真図版39	G.第7次調査第1トレンチ上層西側
写真図版12	A.第2次調査Bトレンチ西側完掘 B.第2次調査Bトレンチ東側完掘	写真図版40	H.第7次調査第2トレンチ完掘
写真図版13	A.第2次調査Cトレンチ完掘	写真図版41	I.第7次調査第2トレンチ土層西側
写真図版14	A.第2次調査Dトレンチ完掘 B.第2次調査Eトレンチ	写真図版42	J.第7次調査第2トレンチ土層東側
写真図版15	A.第2次調査Fトレンチ完掘 B.第2次調査Fトレンチ北側完掘	写真図版43	K.第7次調査第3トレンチ土層
写真図版16	C.第2次調査Fトレンチ土壌	写真図版44	L.第9次調査調査前
写真図版17	A.第2次調査Gトレンチ上層土層 B.第2次調査Gトレンチ完掘 C.第2次調査Hトレンチ完掘	写真図版45	M.第9次調査風景
写真図版18	A.第3次調査第1トレンチ茶木伐採後 B.第3次調査第1トレンチ西側土壌調査前 C.第3次調査第1トレンチ土層	写真図版46	N.第9次調査S X-1完掘
写真図版19	A.第3トレンチ第1トレンチ西側土壌土層 B.第3トレンチ第1トレンチ東側土壌	写真図版47	O.第9次調査上面完掘
写真図版20	A.第3次調査第2トレンチ調査前 B.第3次調査第2トレンチ茶木伐採後	写真図版48	P.第9次調査土壌
写真図版21	C.第3次調査第2トレンチ土壌完掘	写真図版49	Q.第9次調査S D-2完掘
写真図版22	A.第3次調査第3トレンチ西側 B.第3次調査第3トレンチ上層東側	写真図版50	R.第9次調査S D-2上層遺物出土状態
写真図版23	A.第6次調査東地区調査前	写真図版51	S.第9次調査S D-2下層遺物出土状態
写真図版24	B.第6次調査東地区芽生土器出土状態	写真図版52	T.第9次調査S X-1付近
写真図版25	A.第6次調査東地区かわらけ出土状態 B.第6次調査東地区土器遺物出土状態	写真図版53	U.第9次調査土層
写真図版26	C.第6次調査東地区土器遺物出土状態	写真図版54	V.出土遺物1(第1次調査)
写真図版27	A.第6次調査東地区土器遺物出土状態 B.第6次調査東地区土器遺物出土状態 C.第6次調査東地区土器遺物出土状態	写真図版55	W.出土遺物2(第2次調査)
写真図版28	A.第6次調査北地区調査前 B.第6次調査北地区調査前	写真図版56	X.出土遺物3(第2次調査)
		写真図版57	Y.出土遺物4(第2次調査)
		写真図版58	Z.出土遺物5(第3次調査)
		写真図版59	A.出土遺物6(第3・4次調査)
		写真図版60	B.出土遺物7(第6次調査)
		写真図版61	C.出土遺物8(第6次調査)
		写真図版62	D.出土遺物9(第6次調査)
		写真図版63	E.出土遺物10(第6次調査)
			F.出土遺物11(第6次調査)
			G.出土遺物12(第6次調査)
			H.出土遺物13(第6次調査)
			I.出土遺物14(第7次調査)
			J.出土遺物15(第7次調査)
			K.出土遺物16(第9次調査)

# 卷頭 1



A.遺跡遠景（空中写真）



B.土壠

卷頭 2

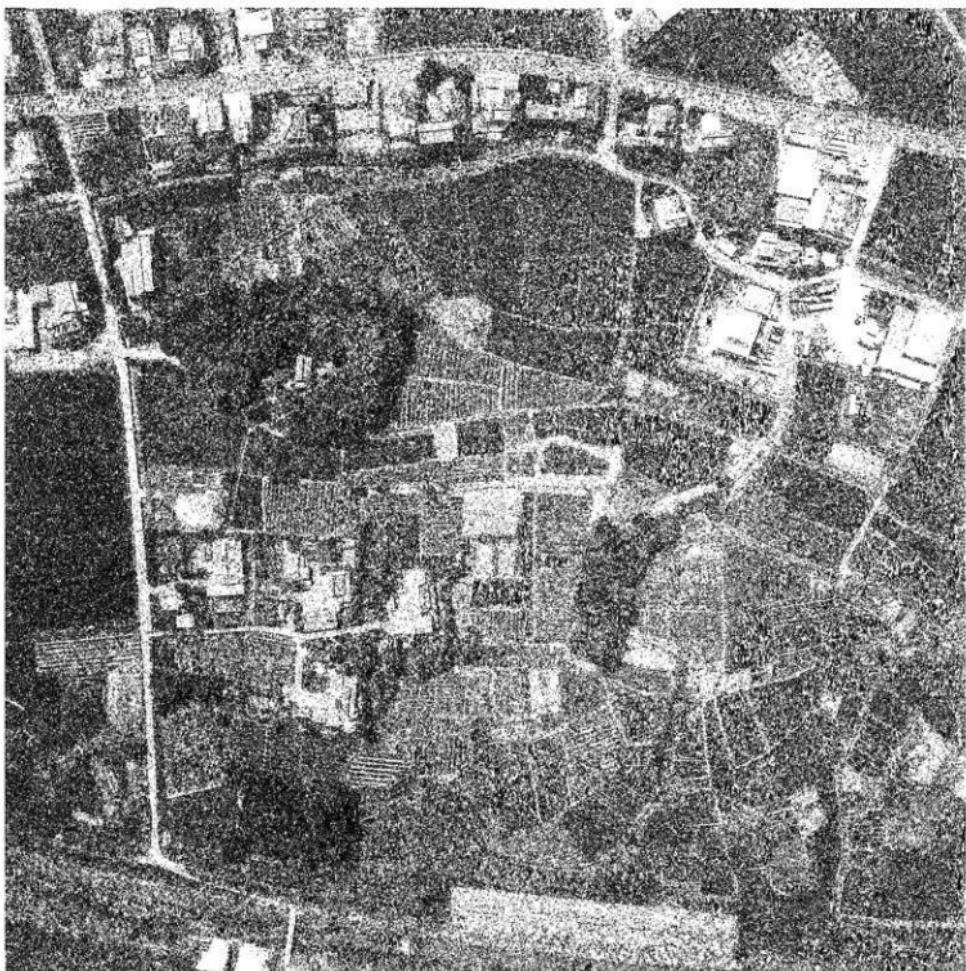


A.船載陶磁器



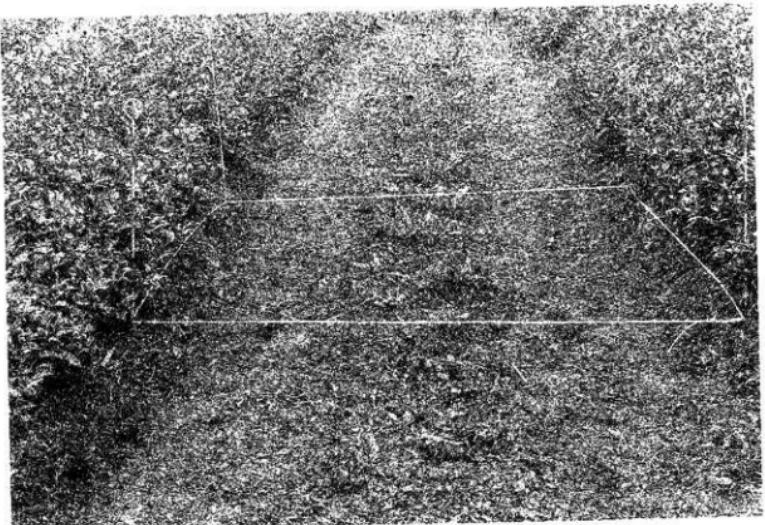
B.國產陶器

写真図版 1

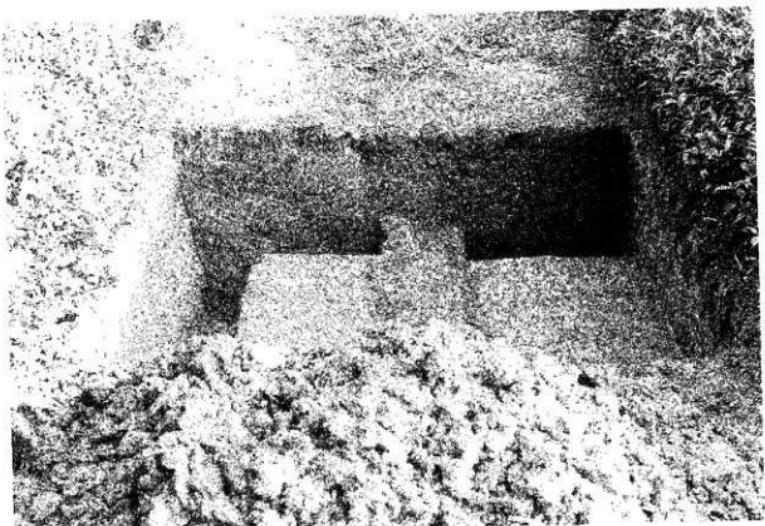


調査地区空中写真

## 写真図版2

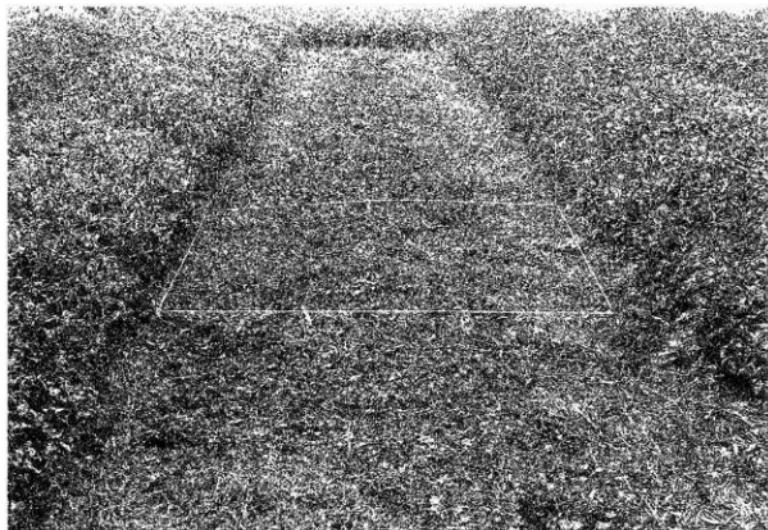


A.第1次調査1グリット調査前（北より）

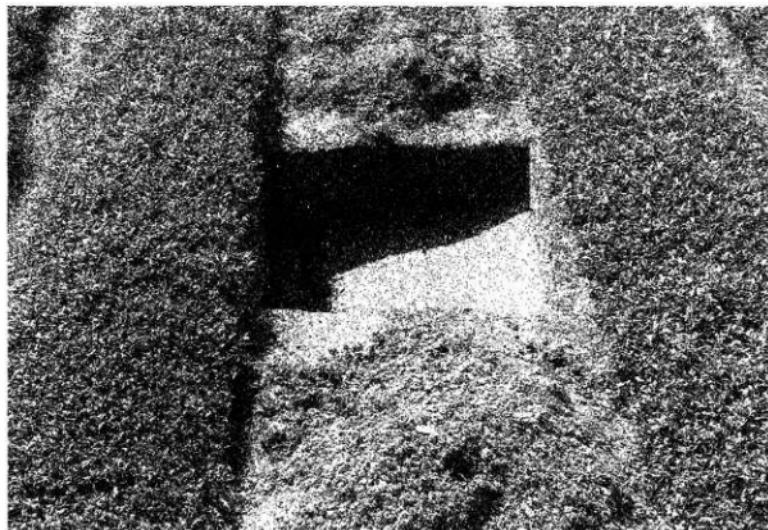


B.第1次調査1グリット完掘（北より）

## 写真図版 3



A.第1次調査2グリット調査前（北より）

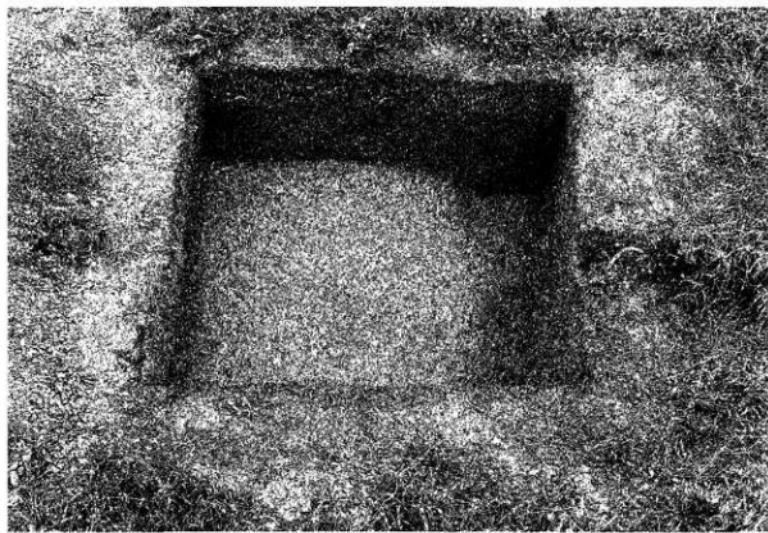


B.第1次調査2グリット完掘（北より）

## 写真図版4



A.第1次調査3グリット調査前（西より）

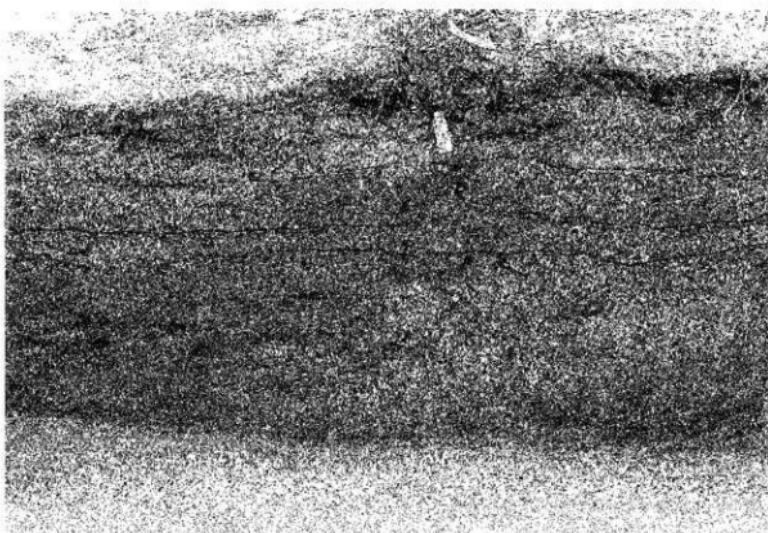


B.第1次調査3グリット完掘（西より）

## 写真図版 5

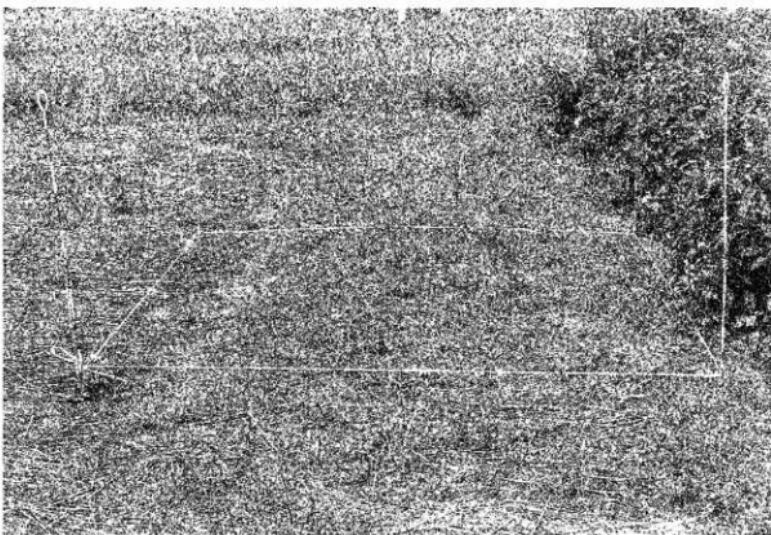


A.第1次調査3グリット東面土層

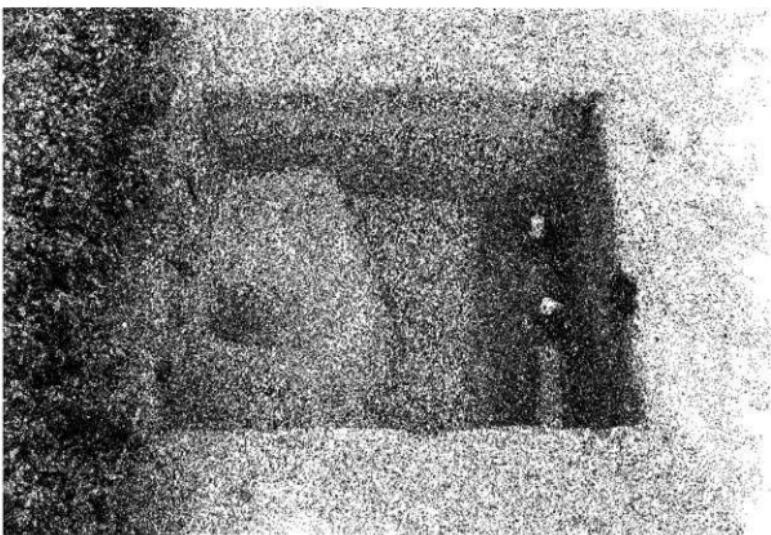


B.第1次調査3グリット南面土層

## 写真図版 6

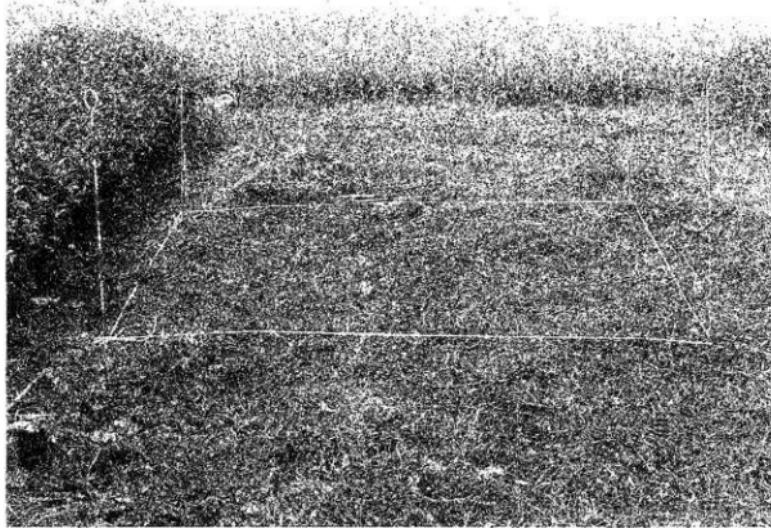


A.第1次調査4グリット調査前（東より）

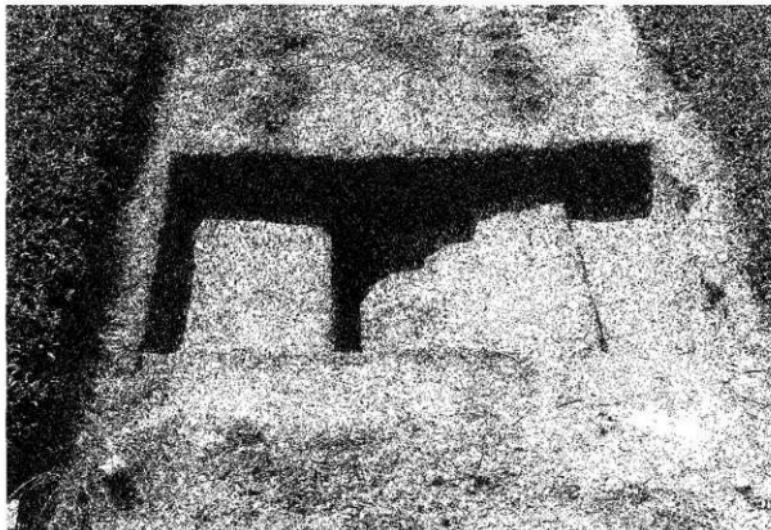


B.第1次調査4グリット完掘（東より）

## 写真図版 7

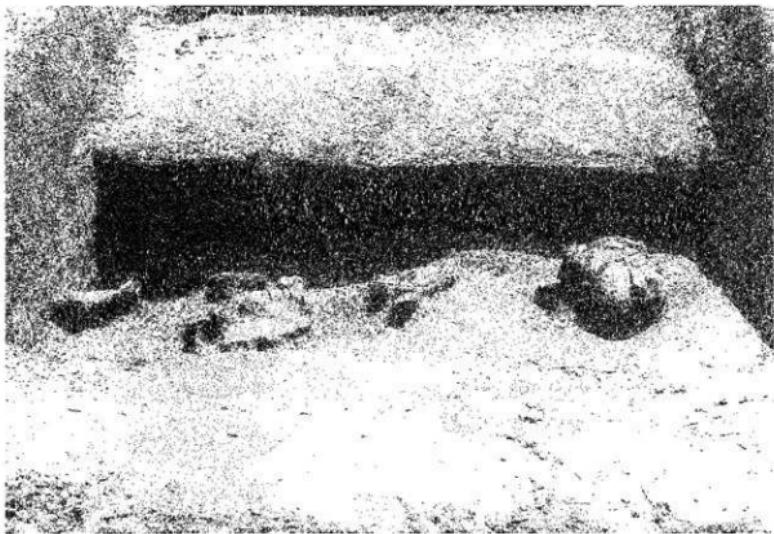


A.第1次調査5グリット調査前（東より）

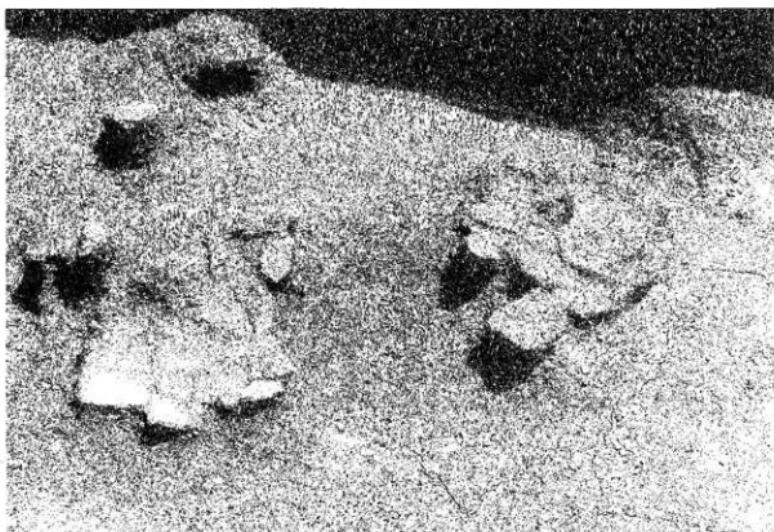


B.第1次調査5グリット完掘（東より）

写真図版 8



A.第1次調査5グリット遺物出土状態（北より）

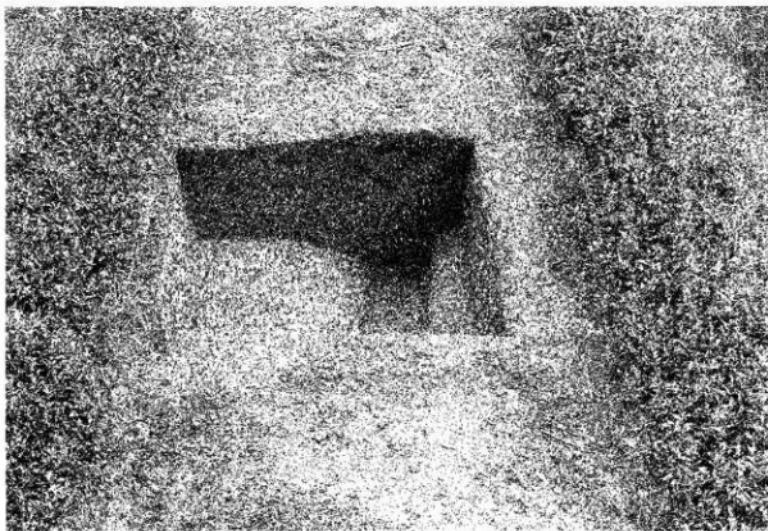


B.第1次調査5グリット遺物出土状態

写真図版 9

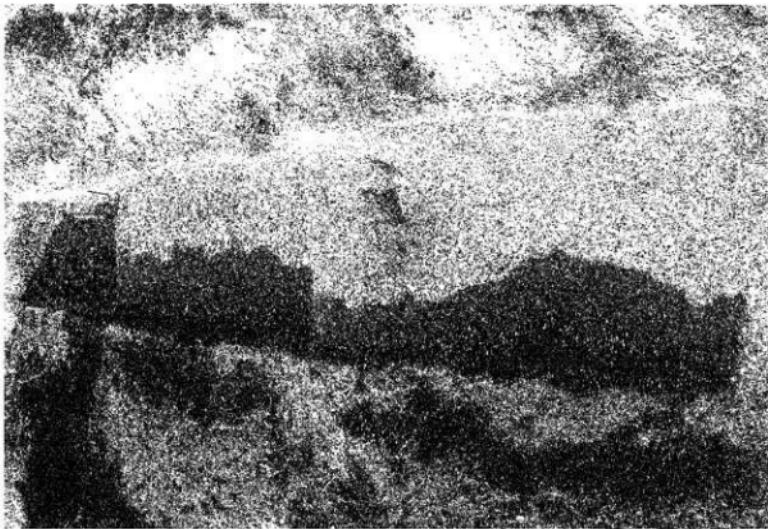


A.第1次調査 6グリット調査前（北より）

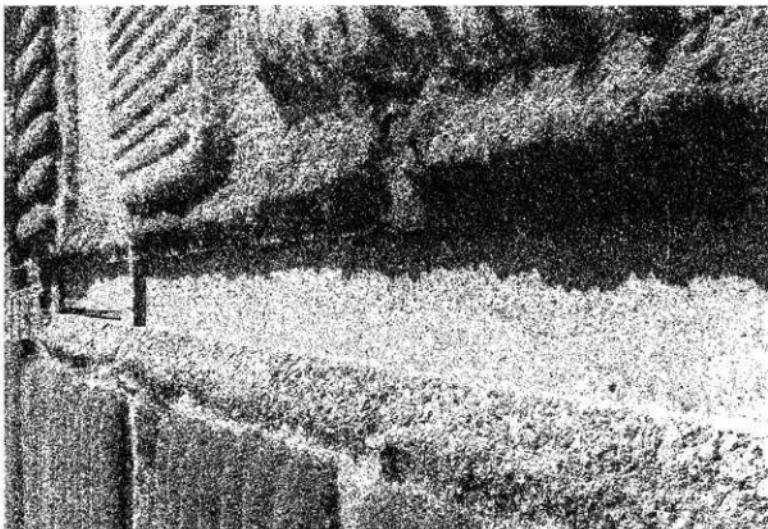


B.第1次調査 6グリット完掘（北より）

## 写真図版10



A.第2次調査Aトレンチ西側完掘（東より）

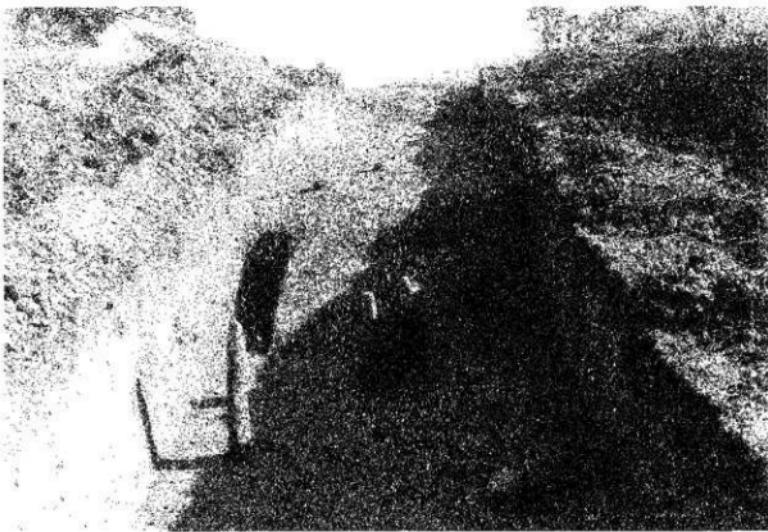


B.第2次調査Aトレンチ東側完掘（西より）

写真図版11

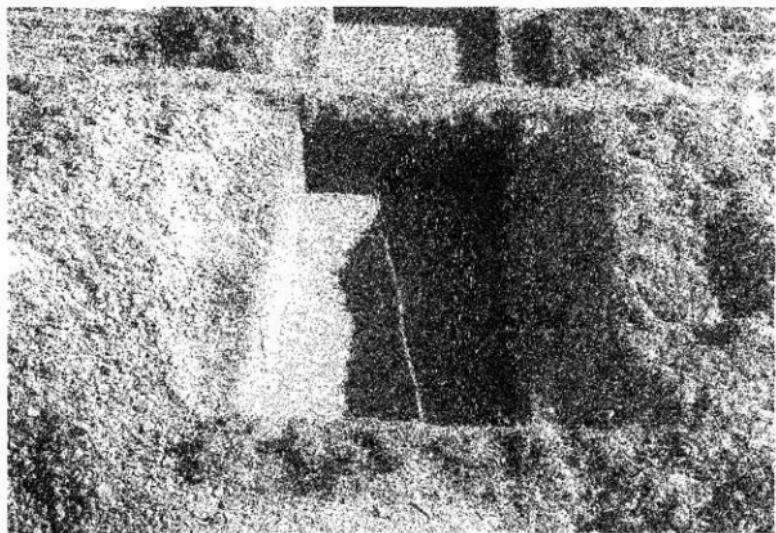


A.第2次調査Aトレンチ西側土壌断面（南より）

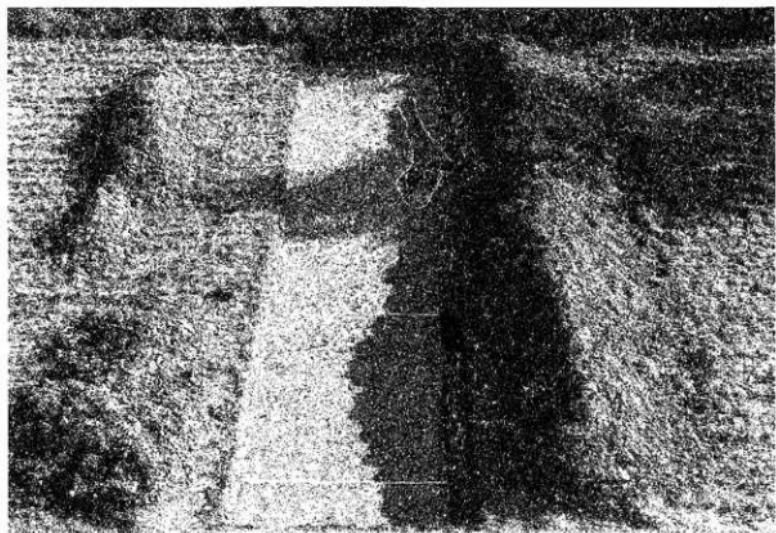


B.第2次調査Aトレンチ西側土壌（西より）

## 写真図版12

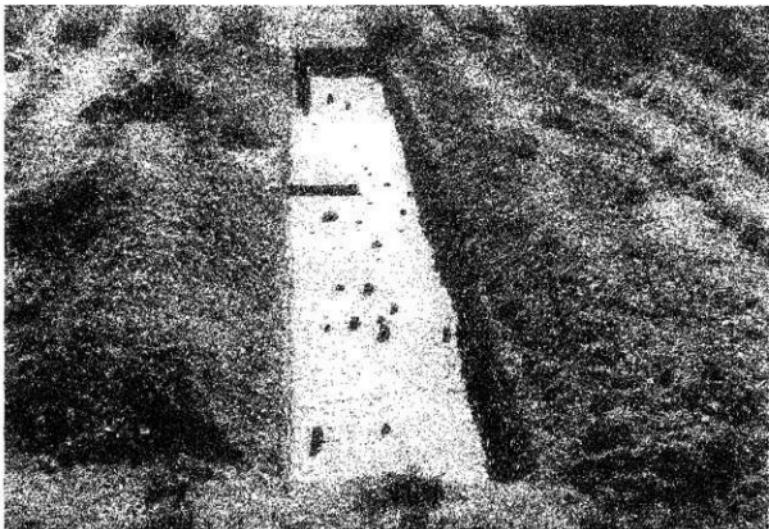


A.第2次調査Bトレンチ西側完掘（西より）

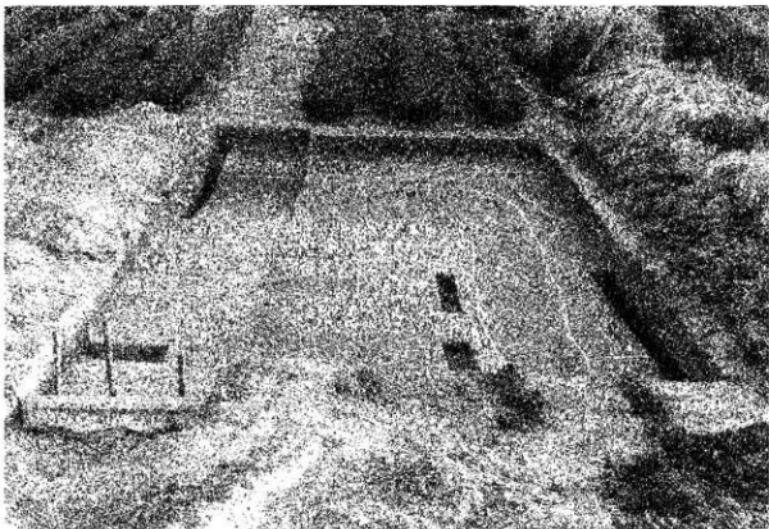


B.第2次調査Bトレンチ東側完掘（西より）

写真図版13

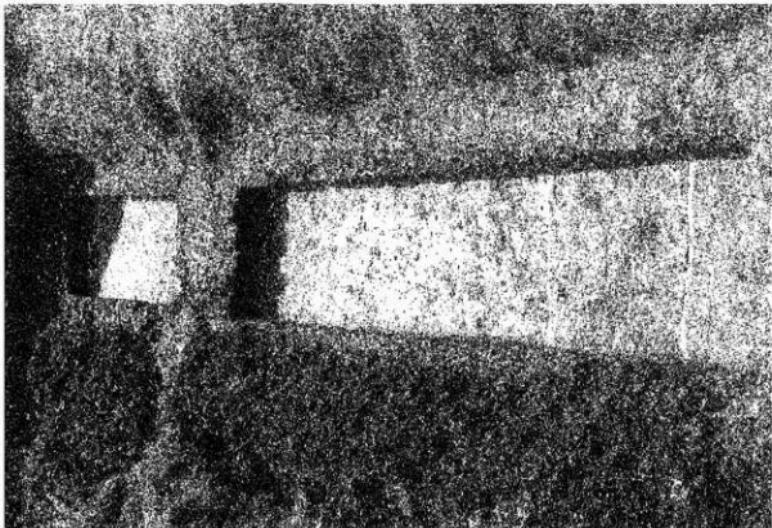


A.第2次調査Cトレンチ完掘（北より）

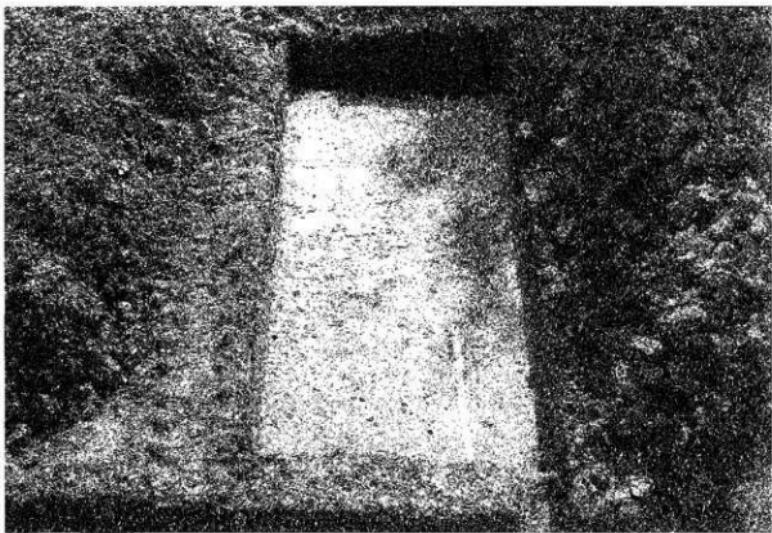


B.第2次調査Cトレンチ拡張区完掘（北より）

## 写真図版14



A.第2次調査Dトレンチ完掘（北より）



B.第2次調査Eトレンチ（北より）

写真図版  
15

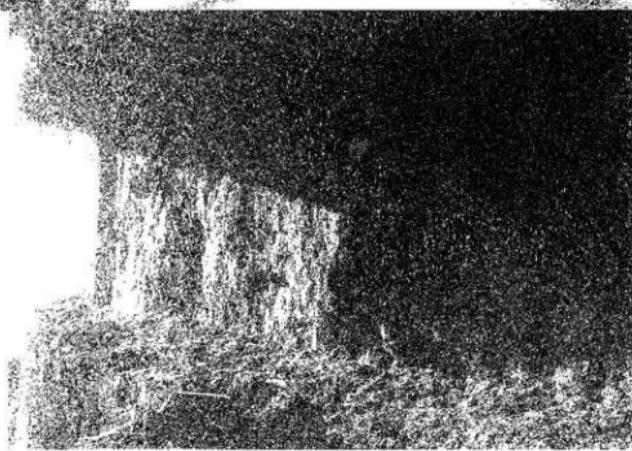
A.第2次調査  
Fトレンチ完掘  
(南より)



B.第2次調査  
Fトレンチ北側  
完掘 (南より)



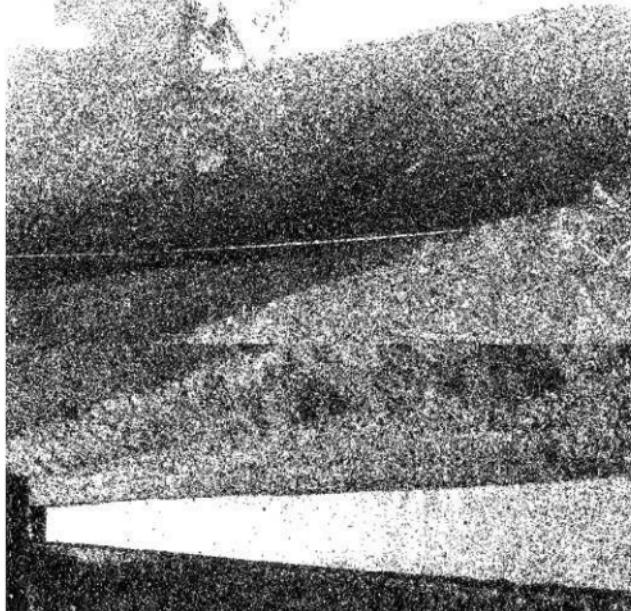
C.第2次調査  
Fトレンチ土壠  
(北より)



写真図版

16

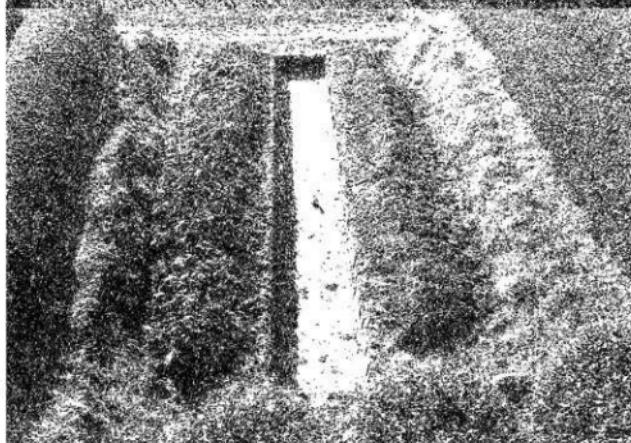
A.第2次調査  
Fトレンチ  
土壌土層  
(東より)



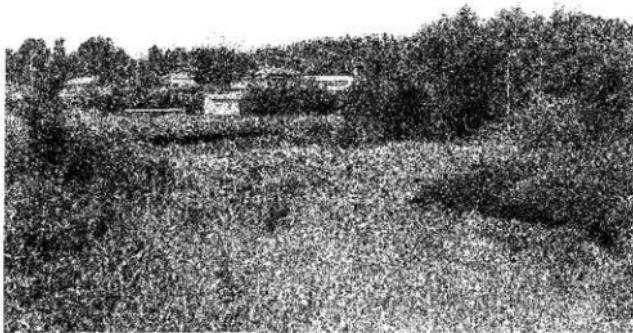
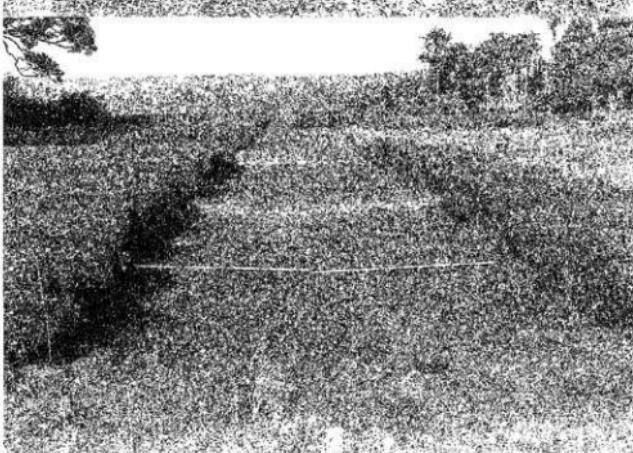
B.第2次調査  
Gトレンチ完掘  
(北より)



C.第2次調査  
Hトレンチ完掘  
(北より)



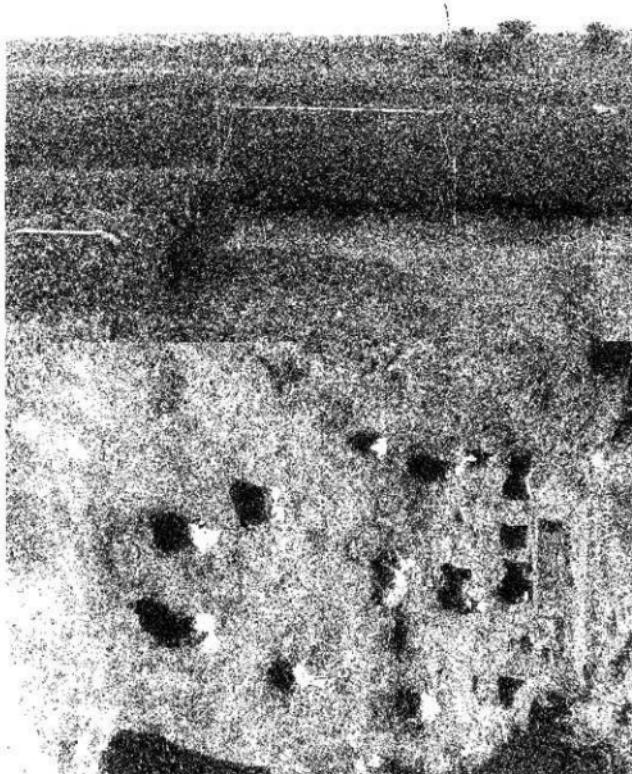
写真図版  
17



写真図版  
18



A.第3次調査  
第1トレンチ  
調査状況



B.第3次調査  
第1トレンチ  
東側土塁調査前  
(西より)

C.第3次調査  
第1トレンチ  
東側土塁遺物  
出土状態

## 写真図版19



A. 第3トレンチ第1トレンチ西側土壌土層（南より）



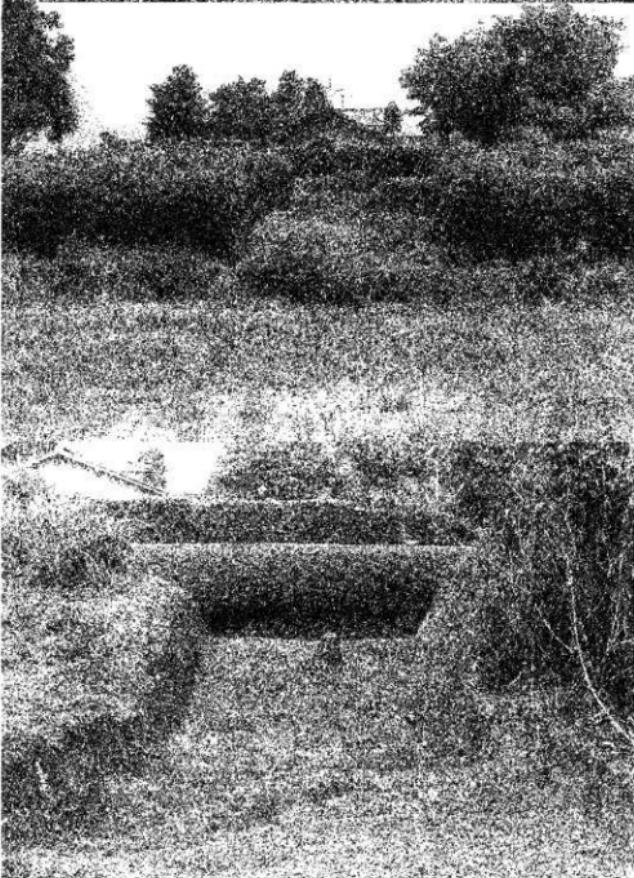
B. 第3トレンチ第1トレンチ東側土壌（北より）

写真図版  
20

A 第3次調査  
第2トレンチ調  
査前（西より）

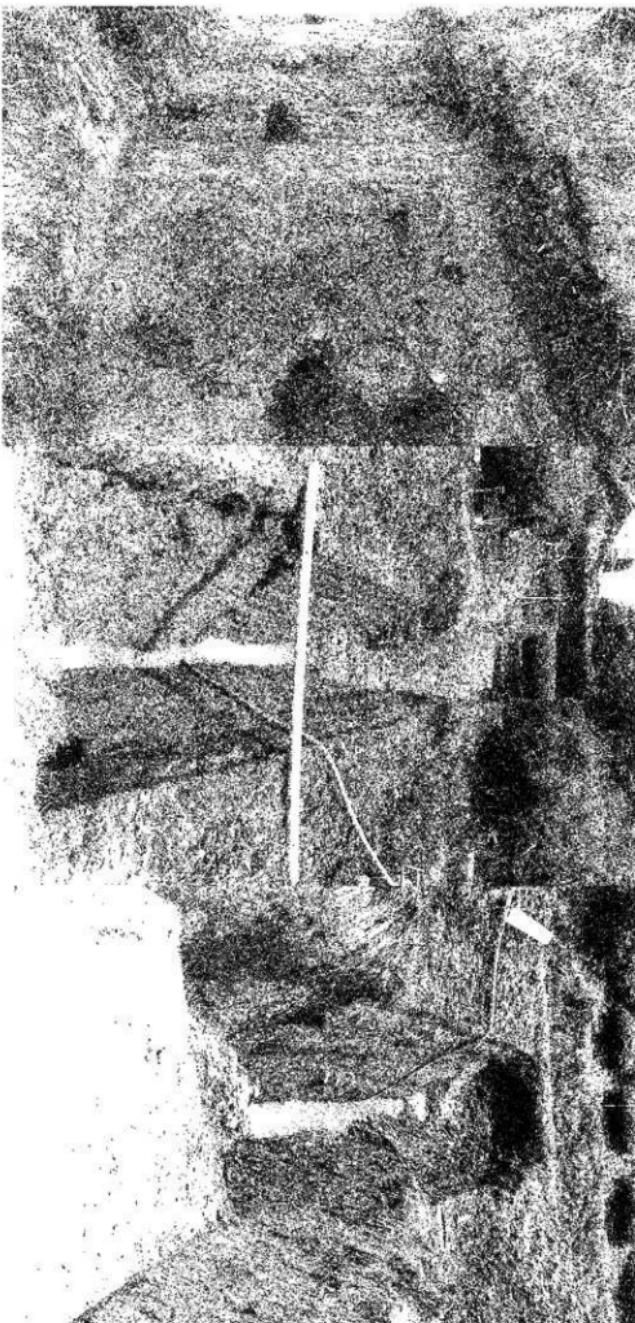


B. 第3次調査  
第2トレンチ  
茶木伐採後  
(西より)

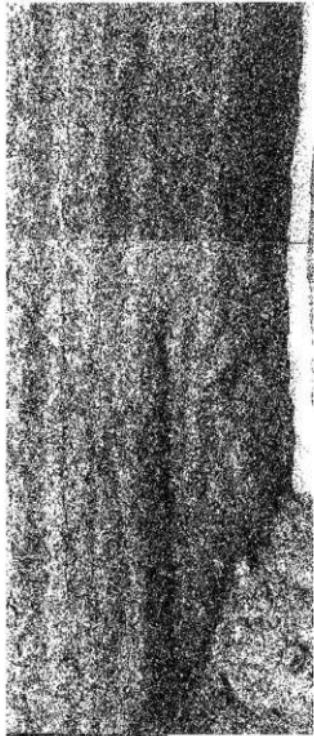


C. 第3次調査  
第2トレンチ  
土塁完掘  
(西より)

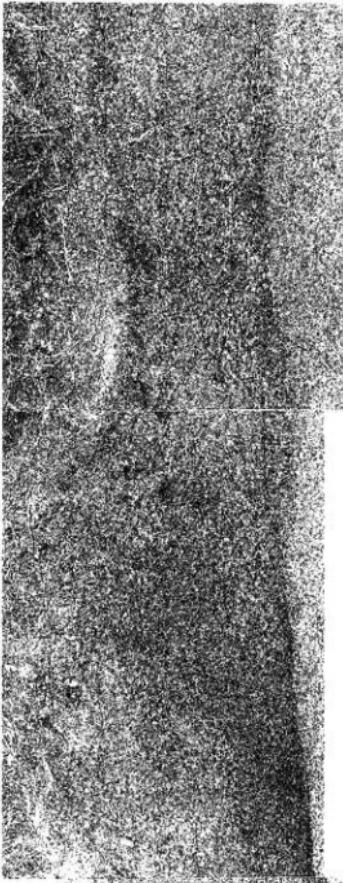
写真図版  
21



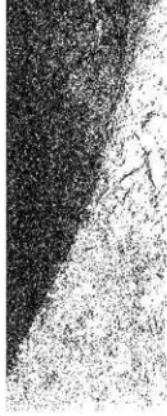
## 写真図版22



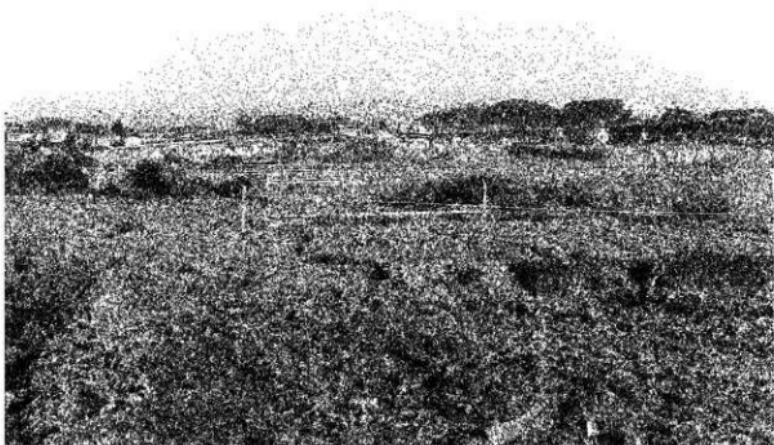
A.第3次調査第2トレンチ土層西側



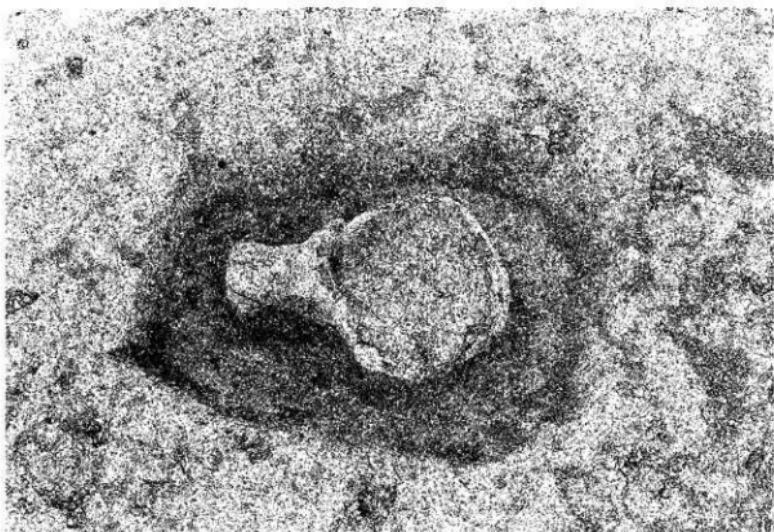
B.第3次調査第2トレンチ土層東側



写真図版23

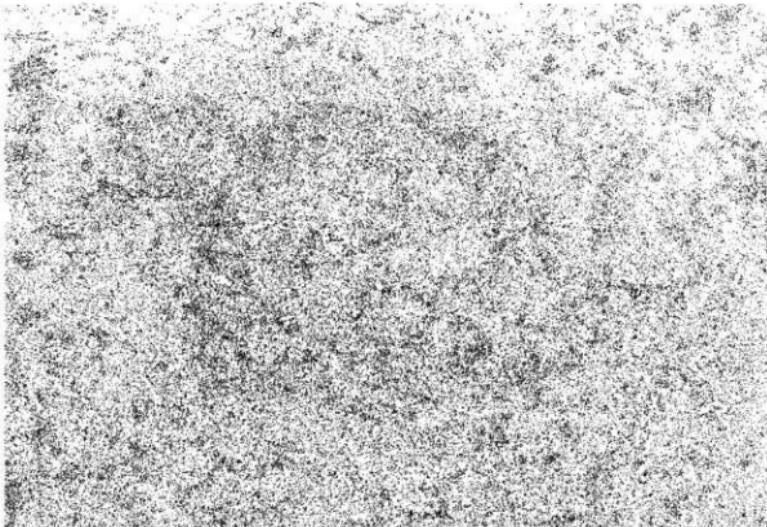


A.第6次調査東地区調査前（南より）

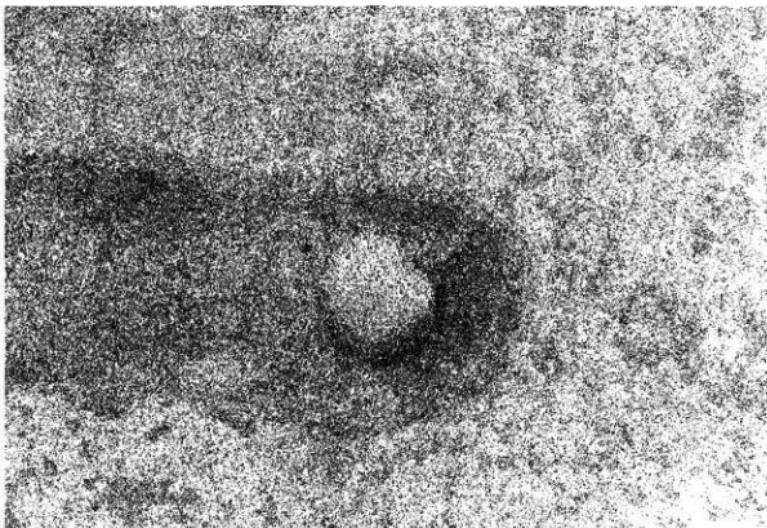


B.第6次調査東地区弥生土器出土状態

写真図版24

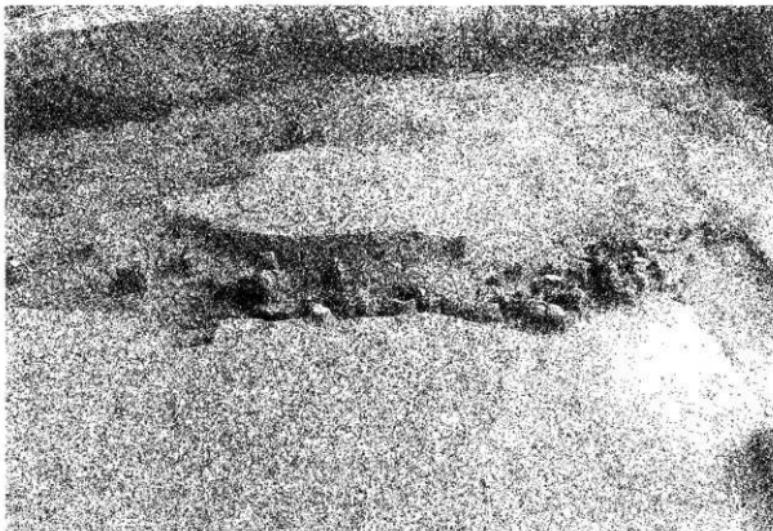


A.第6次調査東地区SK-1完掘（北より）

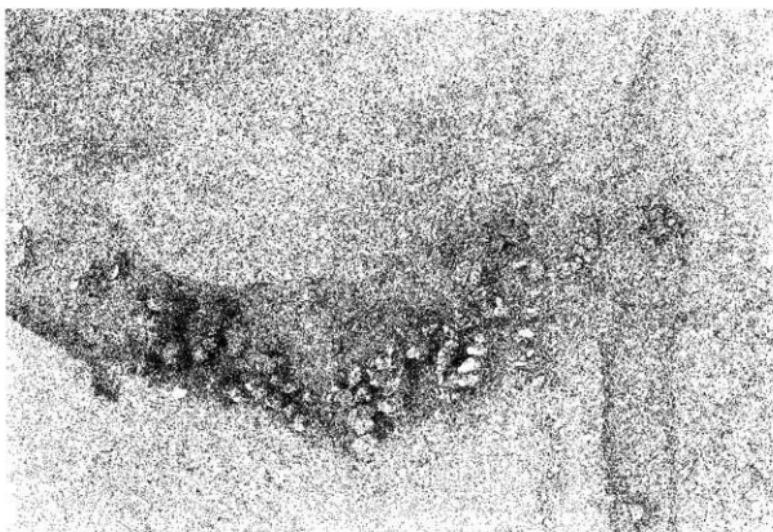


B.第6次調査東地区かわらけ出土状態

写真図版25



A.第6次調査東地区土器窓遺物出土状態（西より）

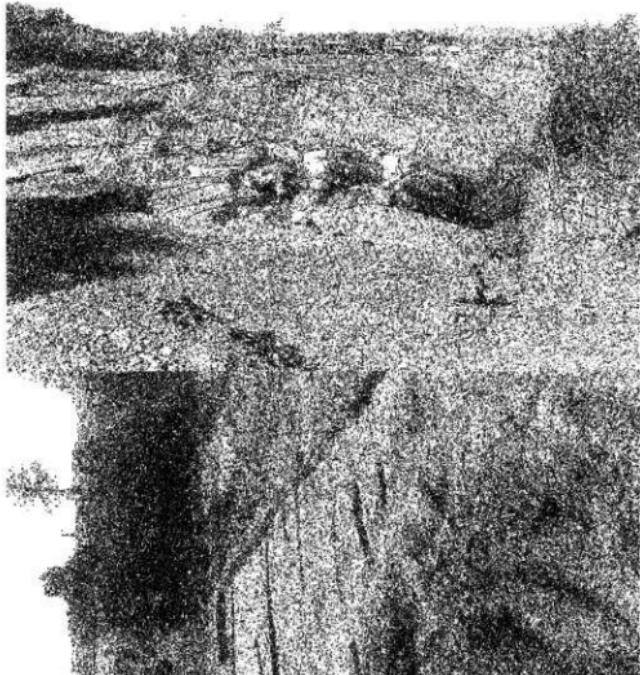


B.第6次調査東地区土器窓遺物出土状態（南より）

写真図版

26

A.第6次調査  
東地区調査風  
景



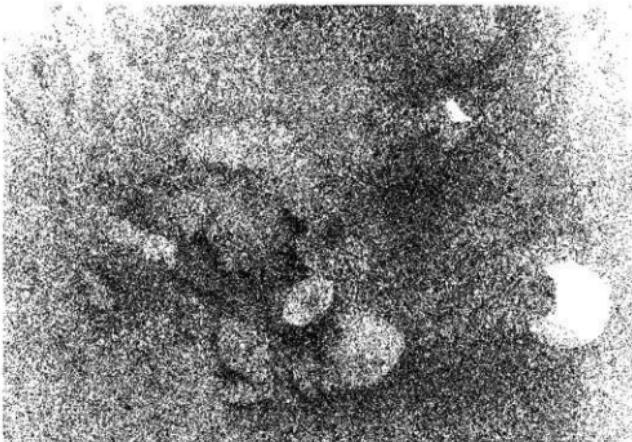
B.第6次調査  
東地区完掘  
(北より)



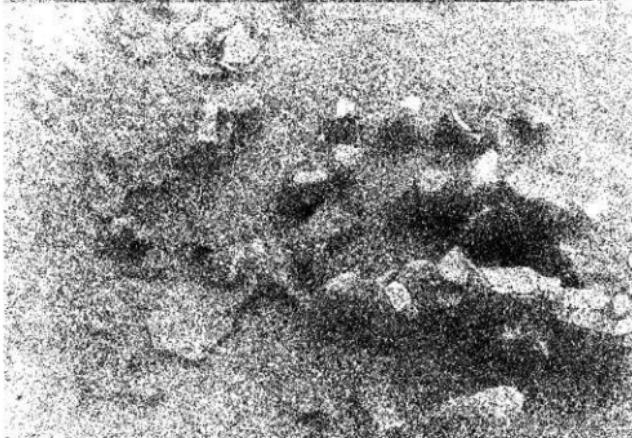
写真図版

27

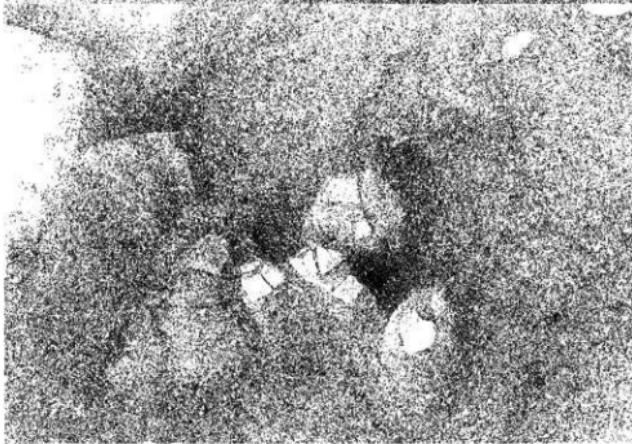
A.第6次調査  
東地区土器溜  
遺物出土状態



B.第6次調査  
東地区土器溜  
遺物出土状態



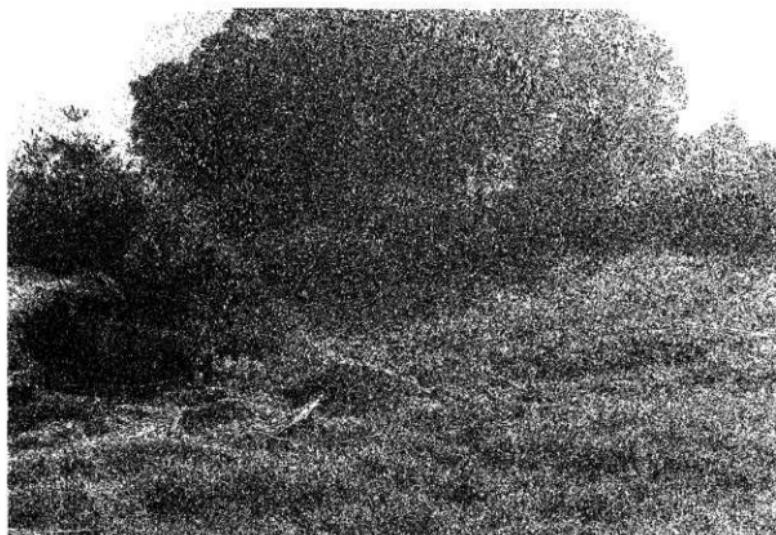
C.第6次調査  
東地区土器溜  
遺物出土状態



写真図版28

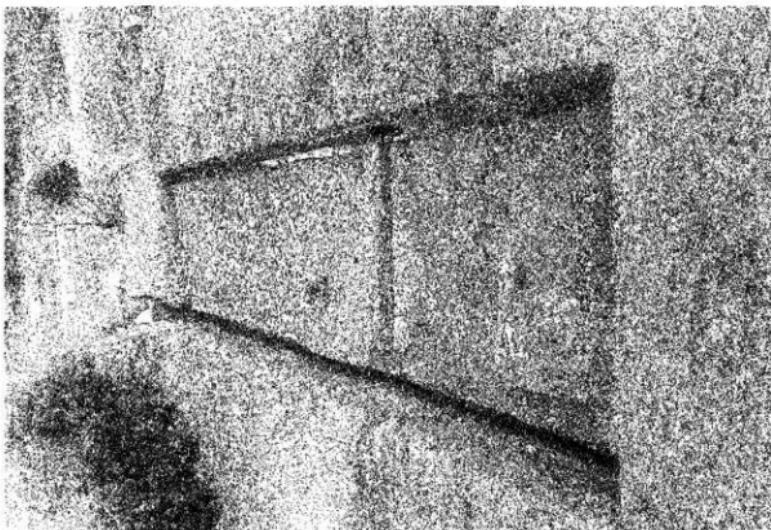


A.第6次調査北地区調査前（南より）

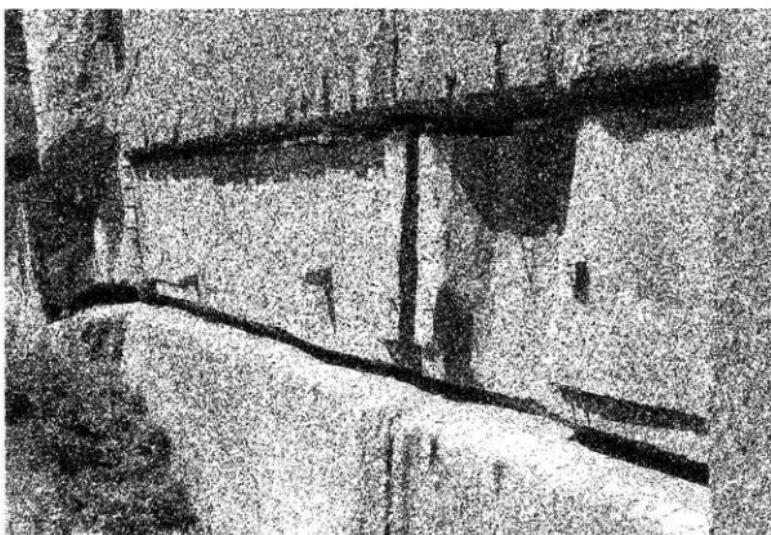


B.第6次調査北地区調査前（西より）

写真図版29



A.第6次調査北地区上面完掘（西より）

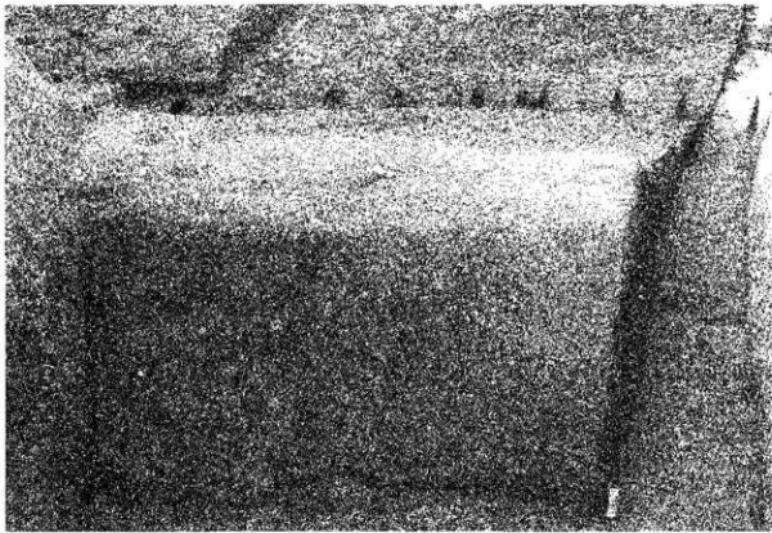


B.第6次調査北地区下面完掘（西より）

写真図版30

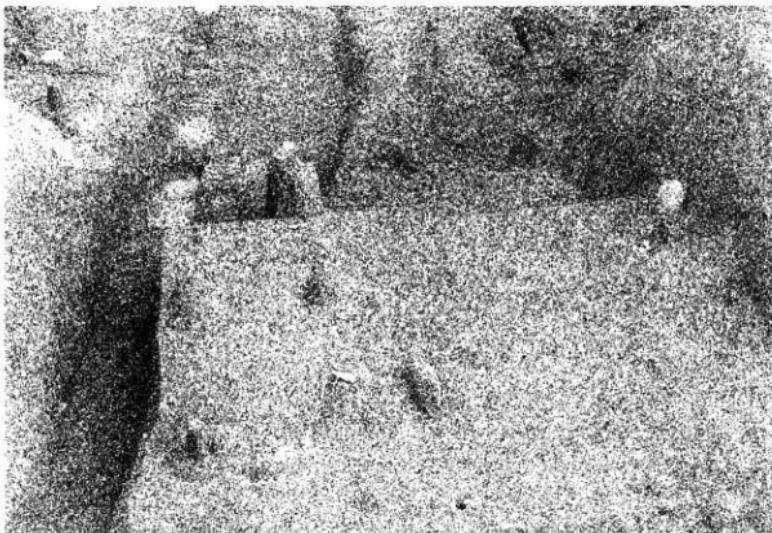


A.第6次調査北地区土塁（西より）



B.第6次調査北地区土塁（東より）

写真図版31



A.第6次調査北地区土壌遺物出土状態（西より）

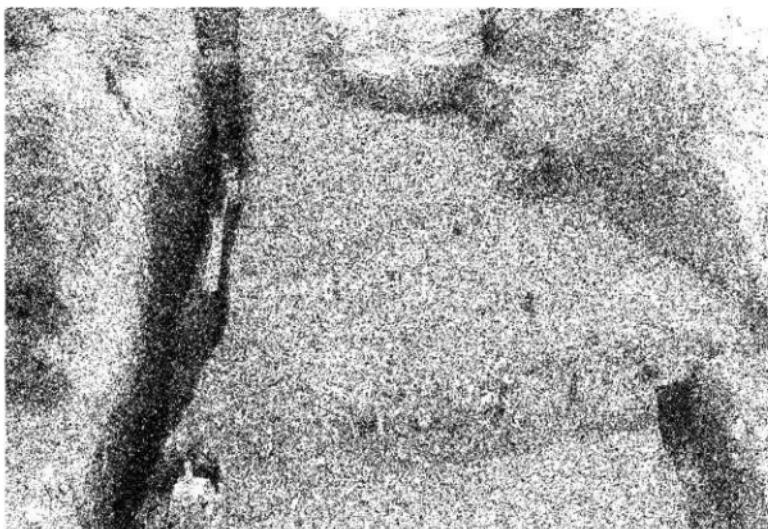


B.第6次調査北地区土壌遺物出土状態（西より）

写真図版32



A.第6次調査北地区土壙遺物出土状態（西より）

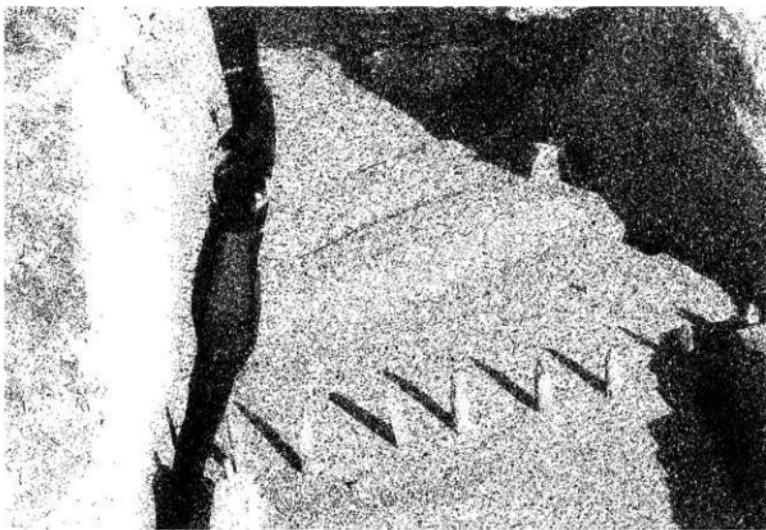


B.第6次調査北地区土壙完掘（西より）

写真図版33

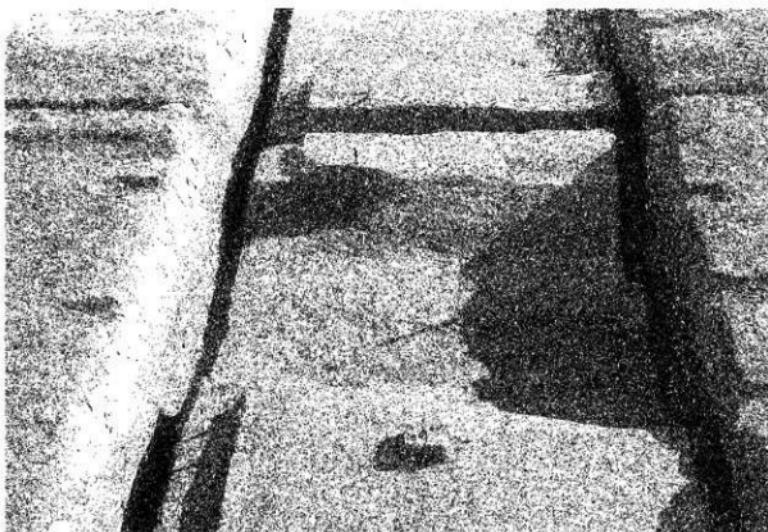


A.第6次調査北地区土墨土層（南より）

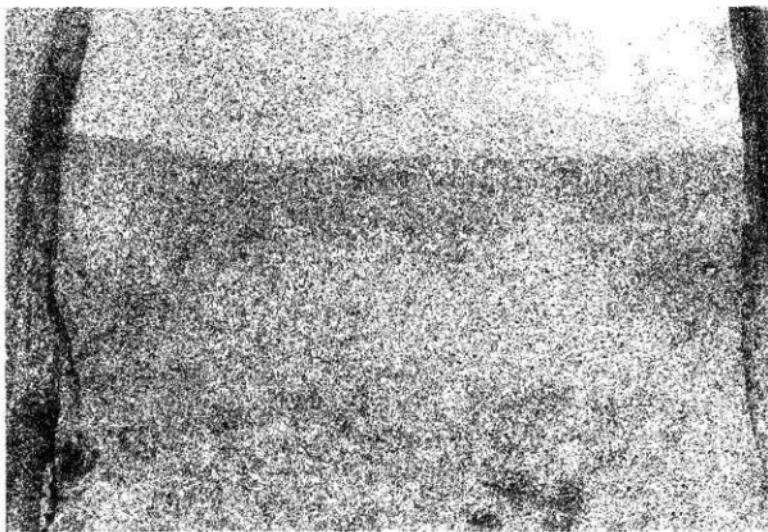


B.第6次調査北地区土墨下層完掘（西より）

写真図版34



A.第6次調査北地区SD-2完掘（西より）



B.第6次調査北地区SD-3完掘（東より）

写真図版

35

A.第6次調査  
北地区土壌調  
査風景



B.第6次調査  
北地区土壌掘  
削作業

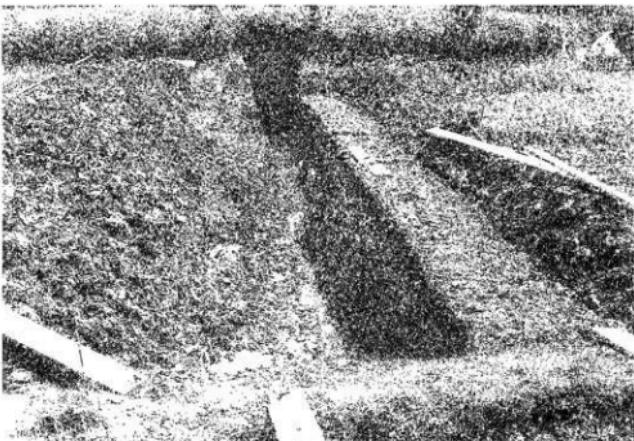


C.第6次調査  
北地区西側調  
査風景

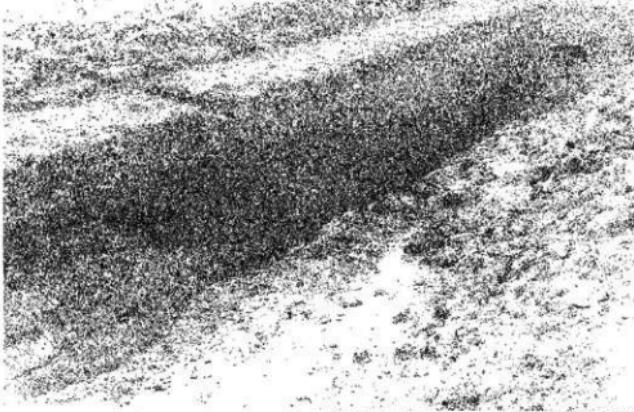


写真図版  
36

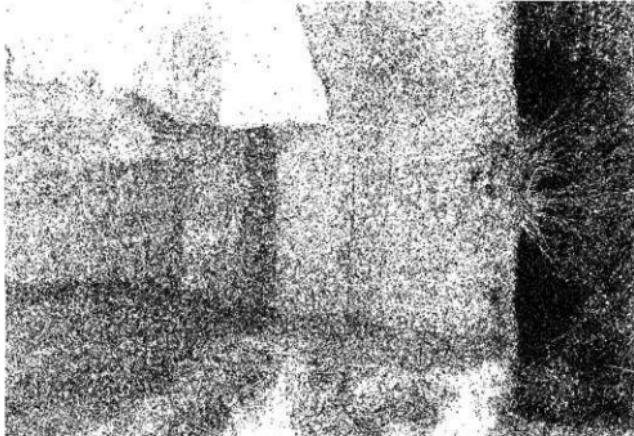
A.第7次調査  
第1トレンチ  
完掘（西より）



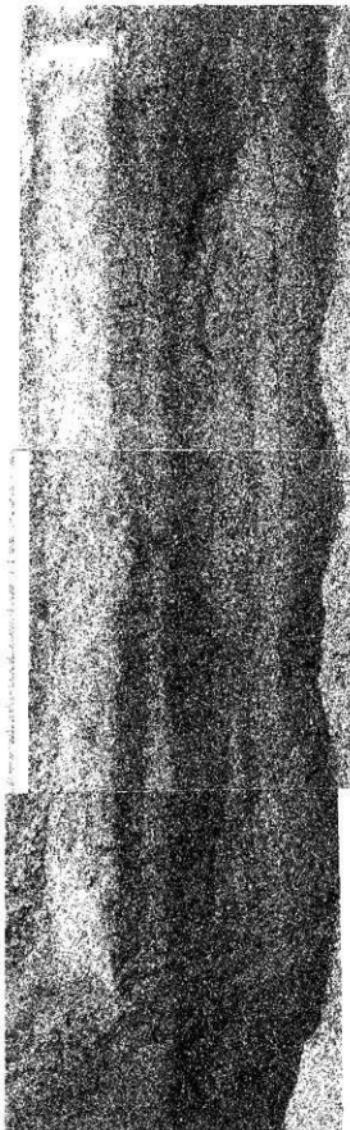
B.第7次調査  
第1トレンチ  
土層（東より）



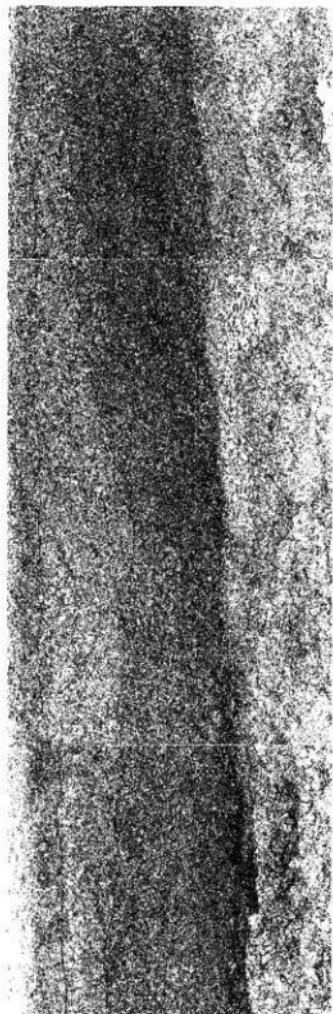
C.第7次調査  
第1トレンチ  
土層東端地点  
(西より)



## 写真図版37



A.第7次調査第1トレンチ土層東側



B.第7次調査第1トレンチ土層西側

写真図版  
38

A.第7次調査  
第2トレンチ  
調査風景



B.第7次調査  
第2トレンチ  
完掘（北より）



C.第7次調査  
第3トレンチ  
完掘（西より）

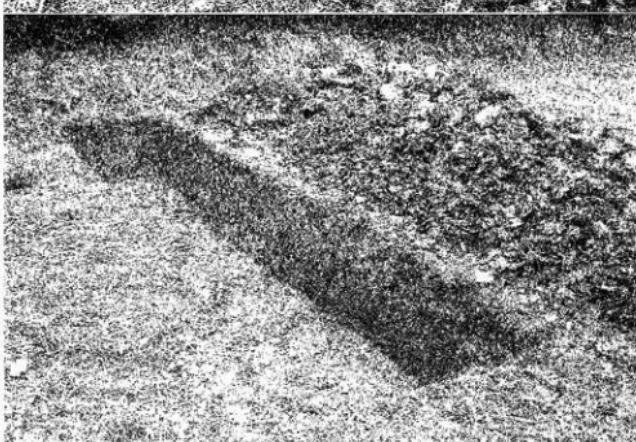


写真図版  
39

A.第7次調査  
第4トレンチ  
完掘（西より）



B.第7次調査  
第5トレンチ  
完掘（北より）



C.第7次調査  
第5トレンチ  
遺物出土状態



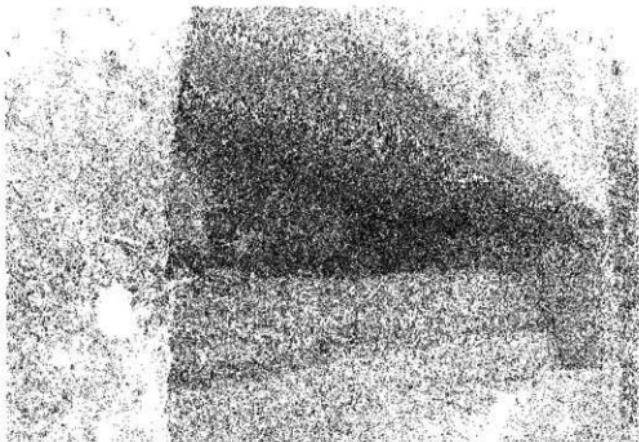
写真図版

40

A.第7次調査

第7トレンチ

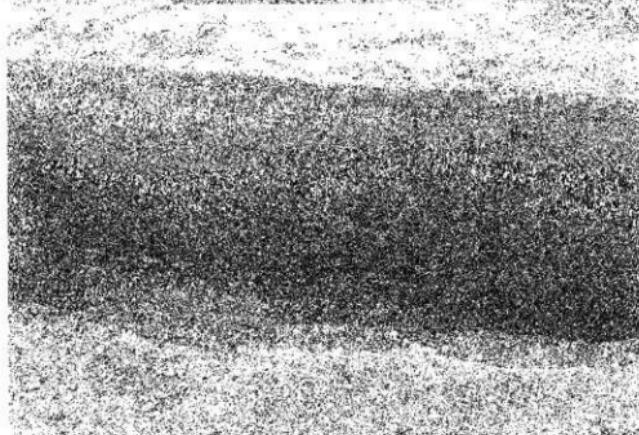
完掘（西より）



B.第7次調査

第7トレンチ

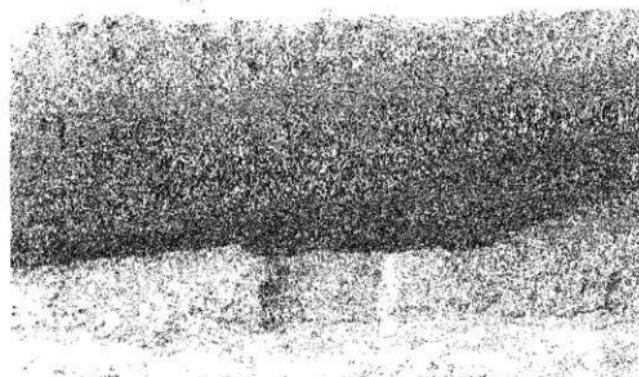
土層西側



C.第7次調査

第7トレンチ

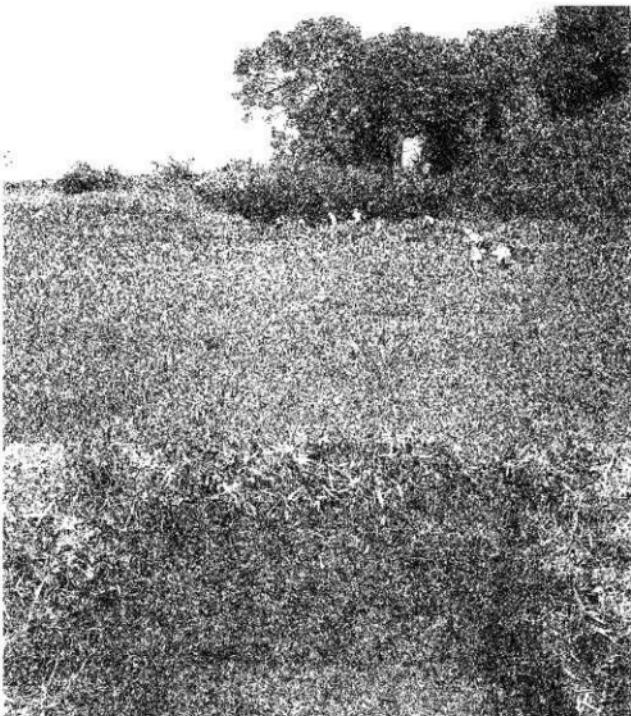
土層東側



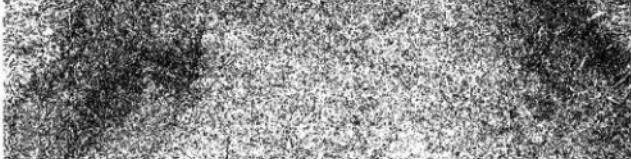
写真図版

41

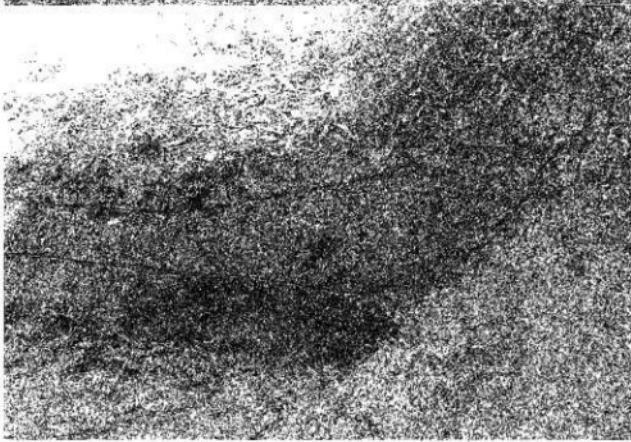
A.第7次調査  
第8・9トレ  
ンチ調査風景



B.第7次調査  
第8トレント  
チ南側完掘  
(北より)

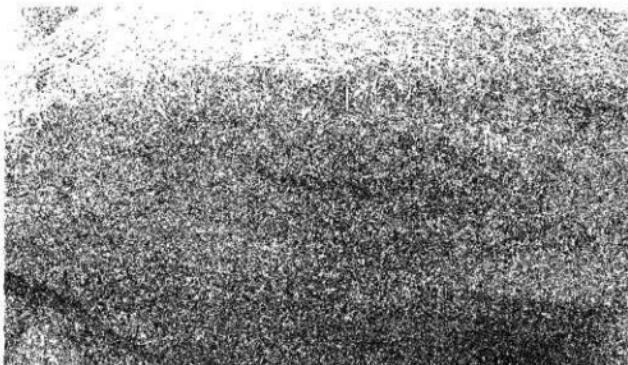


C.第7次調査  
第8トレント  
チ南側土層  
(西より)

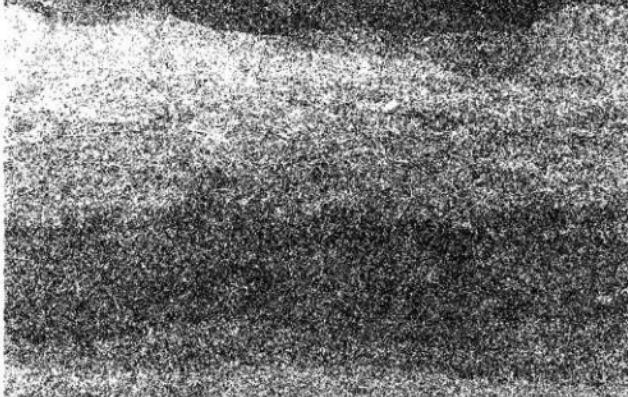


写真図版  
42

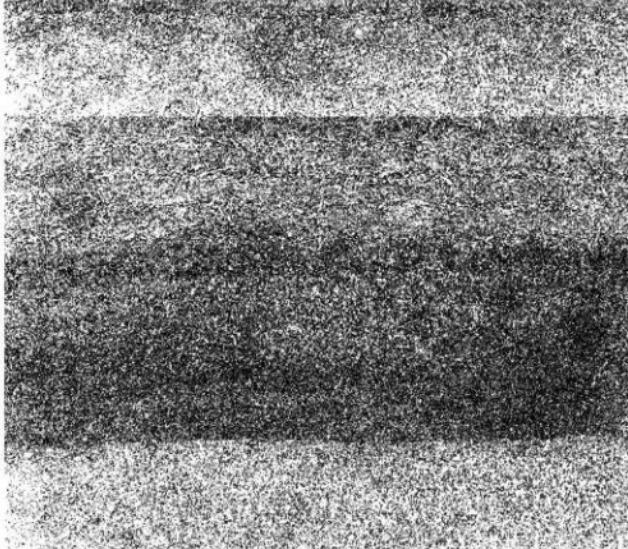
A.第7次調査  
第9トレンチ  
土層（北より）



B.第7次調査  
第9トレンチ  
土層2

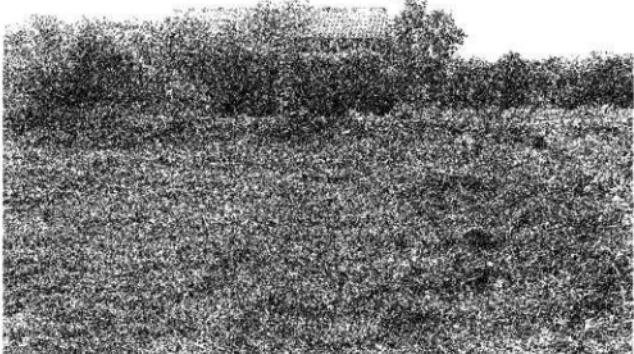


C.第7次調査  
第9トレンチ  
土層3



写真図版  
43

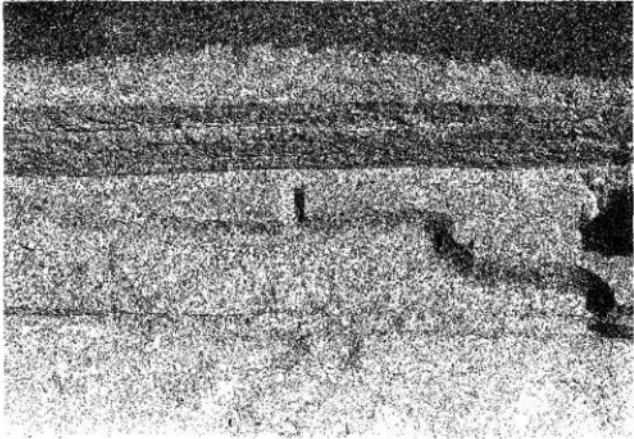
A.第9次調査  
調査前  
(北より)



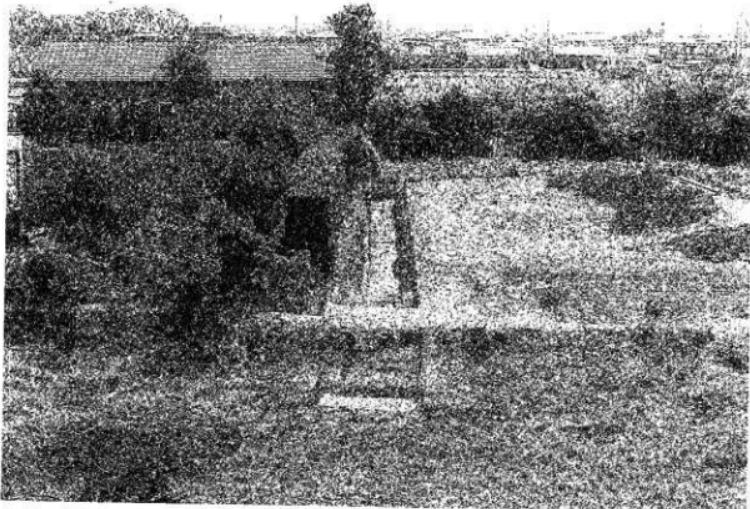
B.第9次調査  
調査風景



C.第9次調査  
SX-1完掘  
(西より)



写真図版44

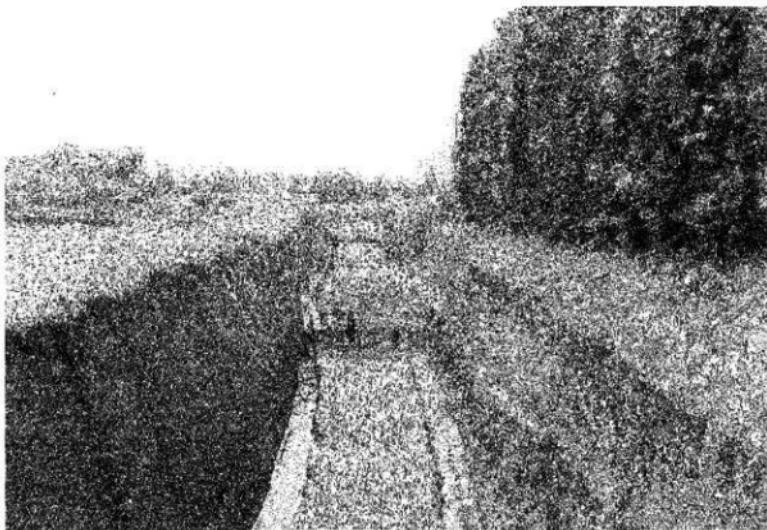


A.第9次調査上面完掘（北より）

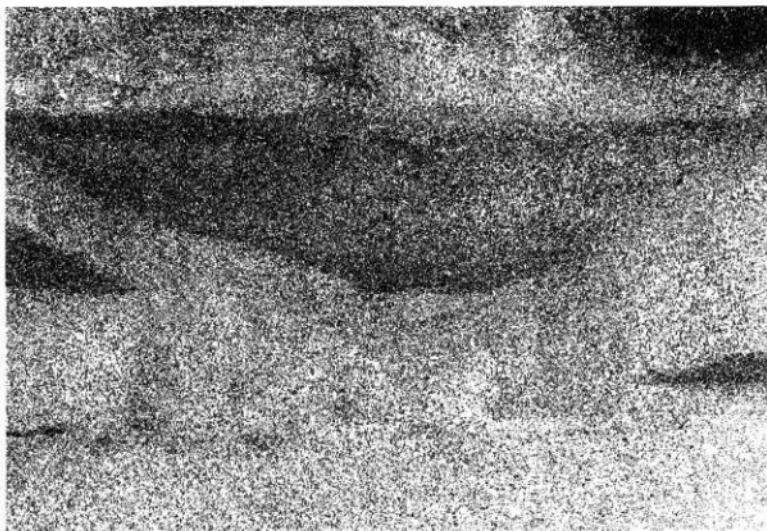


B.第9次調査土壠（西より）

写真図版45



A.第9次調査土壌（南より）



B.第9次調査SD-2完掘（西より）

## 写真図版46

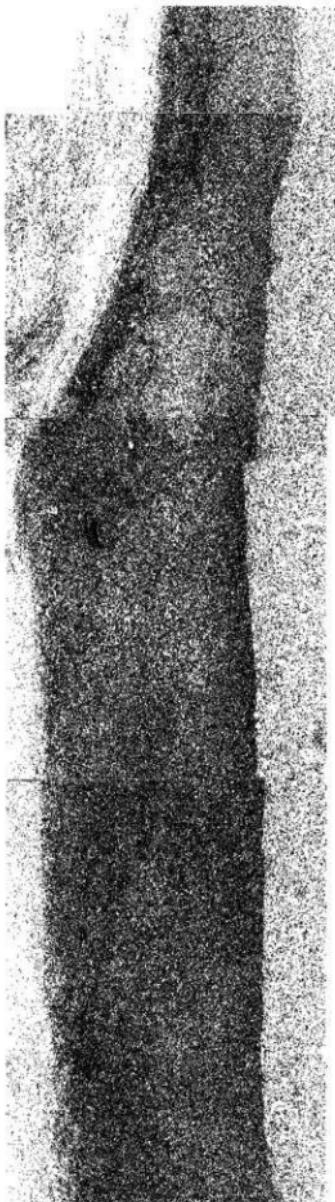


A.第9次調査SD-2上層遺物出土状態（西より）

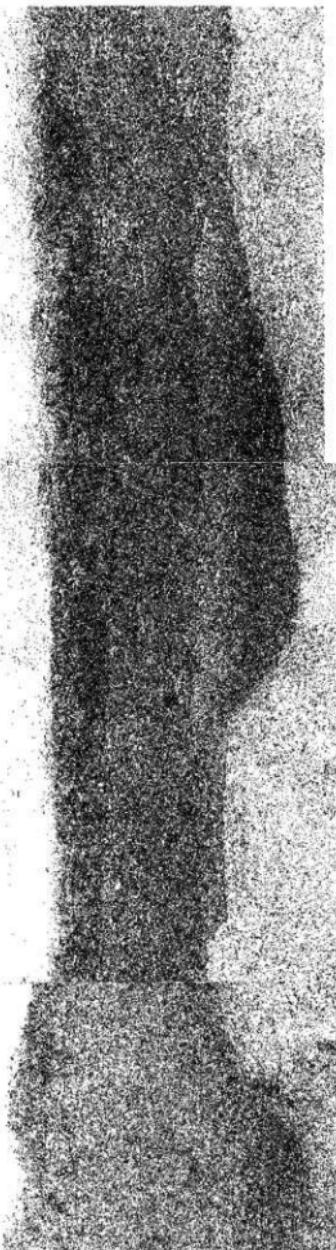


B.第9次調査SD-2下層遺物出土状態（西より）

## 写真図版47

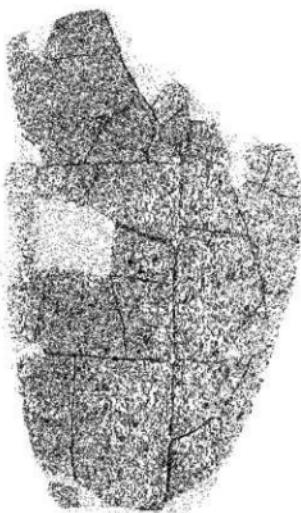
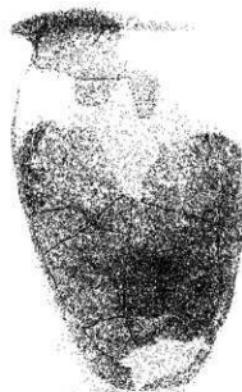


A.第9次調査土層SX-1付近



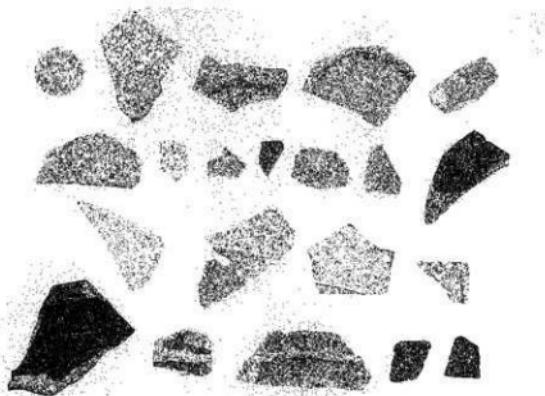
B.第9次調査土層土壌

写真図版48 出土遺物1（第1次調査）



1-2

1-3

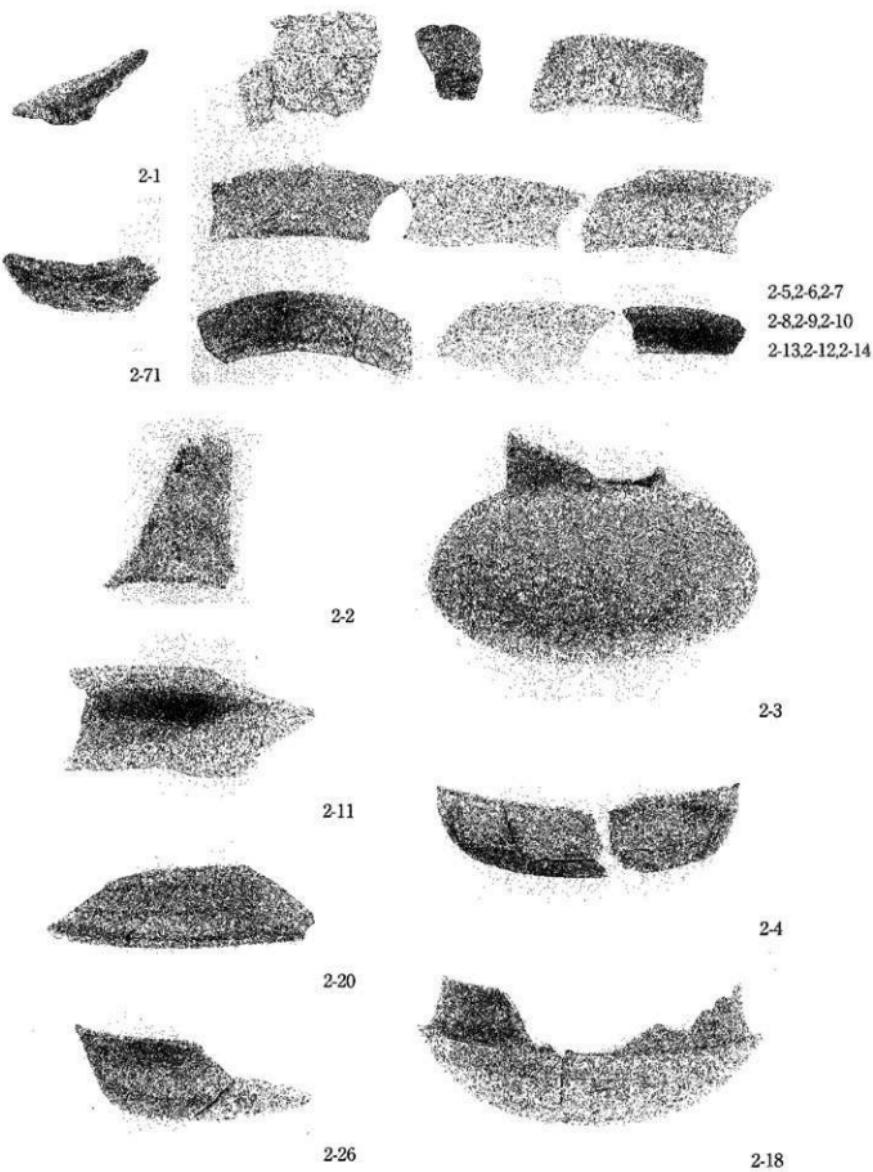


1-4,1-5,1-7,1-6,1-8  
1-10,1-11,1-18,1-16,1-15,1-17  
1-19,1-20,1-21,1-22  
1-23,1-24,1-25,1-26,1-27

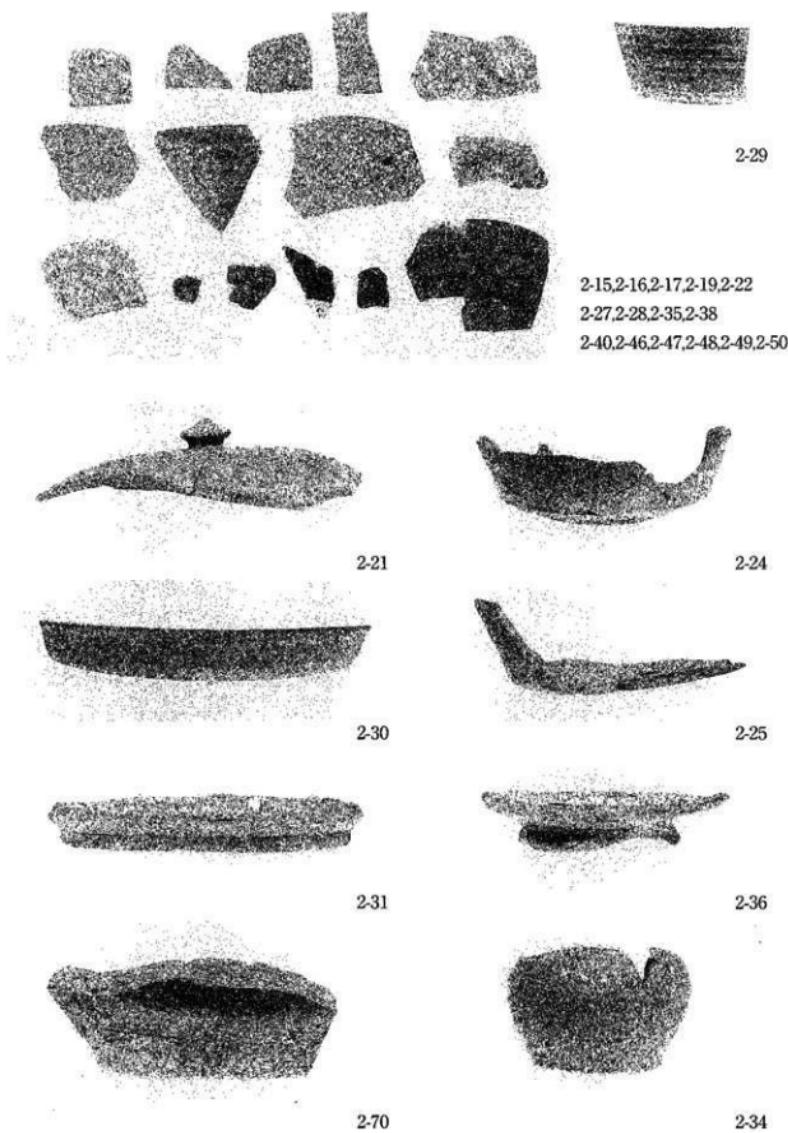


1-1

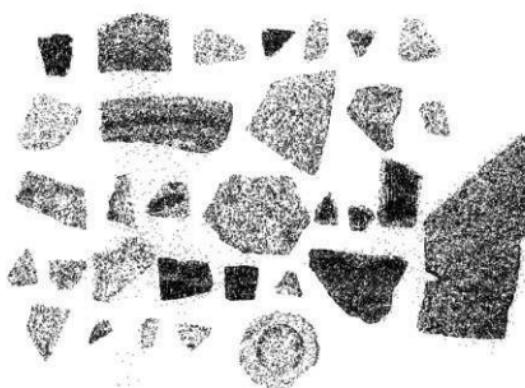
写真図版49 出土遺物 2 (第2次調査)



写真図版50 出土遺物 3 (第2次調査)



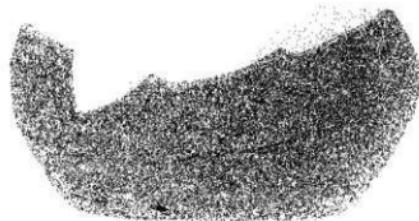
写真図版51 出土遺物 4 (第2次調査)



2-51,2-52,2-53,2-54,2-55,2-57  
2-58,2-59,2-60,2-61,2-62  
2-63,2-64,2-65,2-66,2-67,2-28,2-69  
2-73,2-74,2-75,2-76,2-77,2-78,2-72  
2-79,2-80,2-81,2-82,2-83



2-37  
2-32



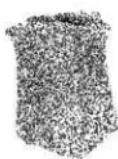
2-42  
2-43



2-33  
2-44

2-41

写真図版52 出土遺物 5 (第3次調査)



3-4



3-16



3-11



3-22



3-15



3-23



3-18



3-27



3-8



3-28



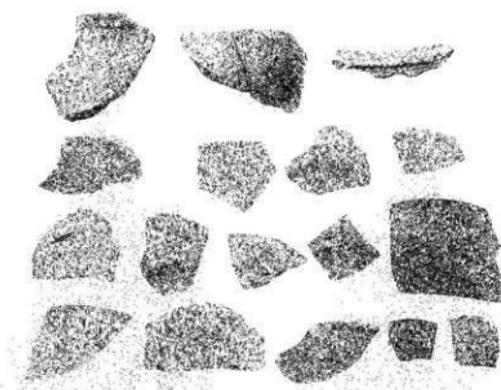
3-14



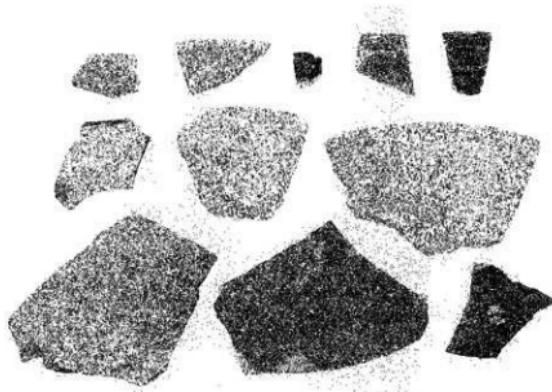
3-31

3-35

写真図版53 出土遺物 6 (第3・4次調査)



3-1,3-2,3-3  
3-5,3-6,3-7,3-9  
3-10,3-12,3-13,3-17,3-19  
3-20,3-21,3-24,3-25,3-26

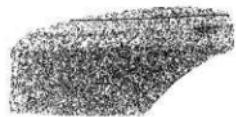


3-29,3-30,3-32,3-33,3-34  
3-36,3-37,3-38  
3-39,3-40,3-41

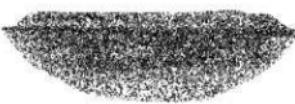


4-1,4-2

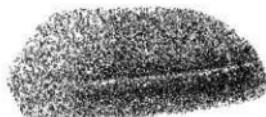
写真図版54 出土遺物 7 (第6次調査)



6-1



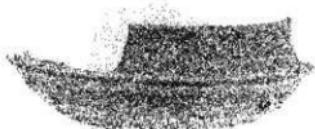
6-7



6-2



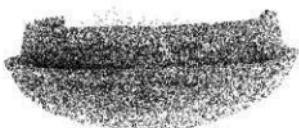
6-11



6-3



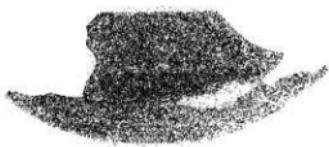
6-13



6-4



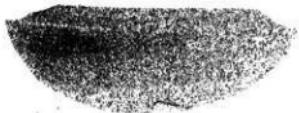
6-15



6-5



6-16

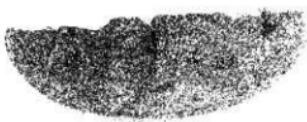


6-6



6-17

写真図版55 出土遺物 8 (第6次調査)



6-18



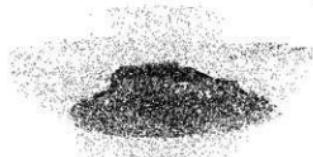
6-24



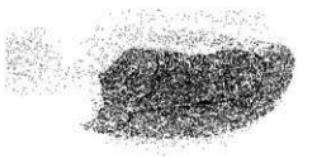
6-19



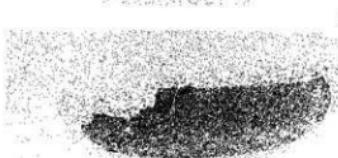
6-25



6-20



6-26



6-21



6-27



6-22

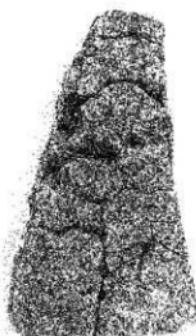


6-23



6-8

写真図版56 出土遺物 9 (第6次調査)



6-14



6-28



6-29



6-30



6-31



6-32



6-33



6-34

写真図版57 出土遺物10（第6次調査）



6-35



6-38



6-36



6-37



6-39



6-40



6-43



6-41



6-44

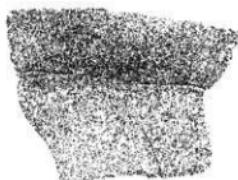


6-42



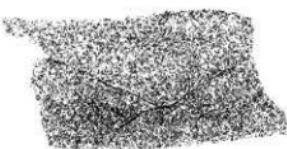
6-45

写真図版58 出土遺物11（第6次調査）

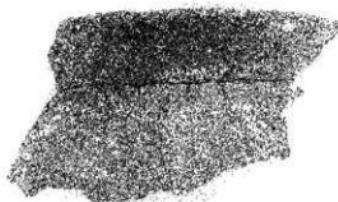


6-46

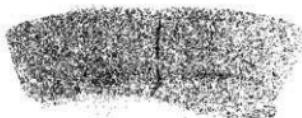
6-48



6-49



6-50



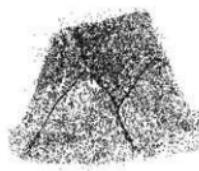
6-52



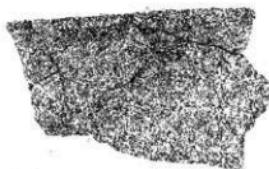
6-51



6-61



6-62



6-53



6-63

写真図版59 出土遺物12（第6次調査）



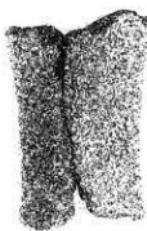
6-54



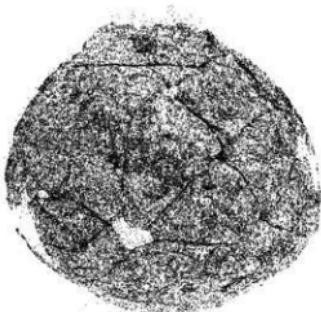
6-58



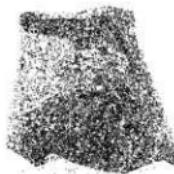
6-55



6-59



6-57



6-64

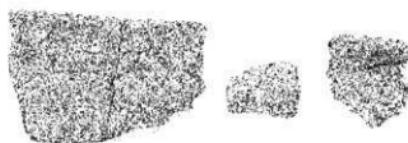


6-70

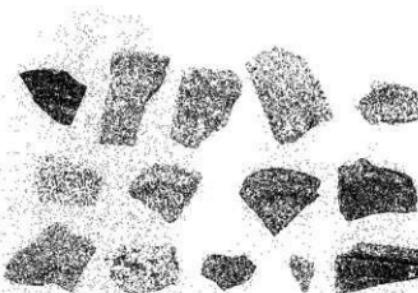


6-77

写真図版60 出土遺物13（第6次調査）



6-9,6-10,6-12  
6-47,6-60,6-65,6-66



6-67,6-68,6-69,6-71,6-72  
6-73,6-75,6-76,6-79  
6-80,6-81,6-84,6-82,6-88



6-83

6-86



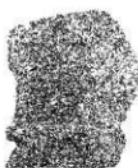
6-85

6-87

写真図版61 出土遺物14（第7次調査）



7-3



7-2



7-4



7-16



7-5



7-18



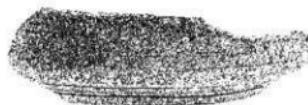
7-6



7-20



7-9



7-21

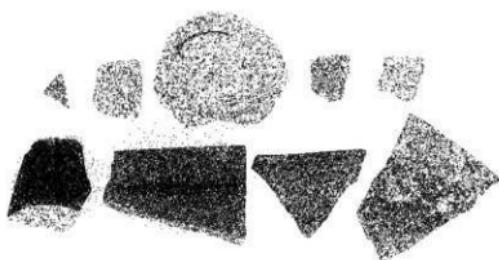


7-11



7-22

写真図版62 出土遺物15（第7次調査）



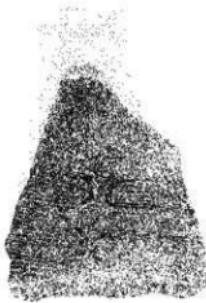
7-7,7-8,7-9,7-13,7-14  
7-15,7-23,7-24,7-26



7-12



7-19

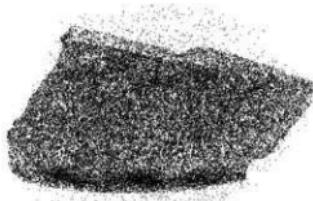


7-17

7-1



7-25



写真図版63 出土遺物16（第9次調査）



9-5



9-7



9-8



9-29



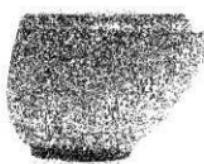
9-20, 9-21, 9-22, 9-23  
9-25, 9-27, 9-28



9-1, 9-2, 9-3, 9-4  
9-6, 9-9, 9-10, 9-11, 9-12  
9-13, 9-15, 9-16, 9-18



9-17



9-14



9-25



9-26

